

川原宮Ⅲ遺跡

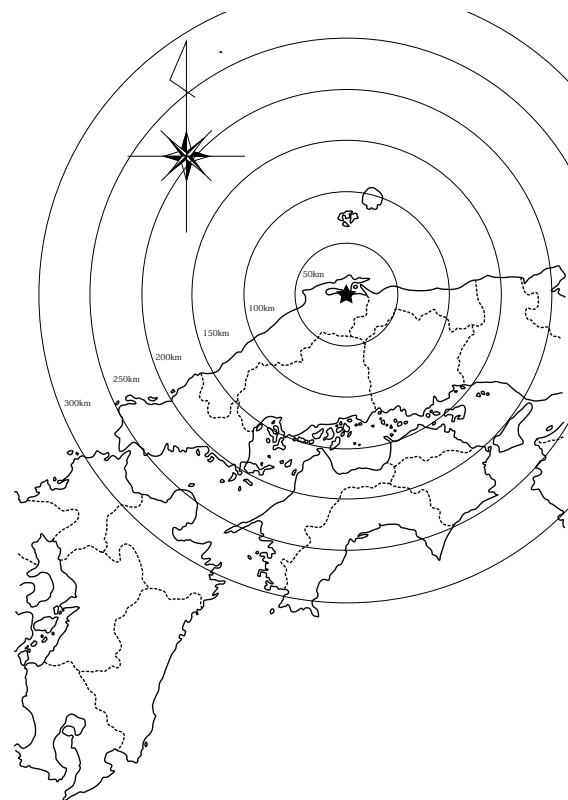
国道 432 号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

2019 年 9 月

島根県教育委員会

川原宮Ⅲ遺跡

国道 432 号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2



2019 年 9 月

島根県教育委員会



1. 川原宮Ⅲ遺跡遠景（南西から）



2. 川原宮Ⅲ遺跡近景（北西から）



1. 調査区全景 調査終了後（南から）



2. SD04 完掘後（南から）

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から依頼を受けて、平成29年度に実施した国道432号大庭バイパス建設予定地内に所在する川原宮Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

遺跡のある松江市大庭町一帯は古代から中世にかけて出雲の中心地でした。奈良時代に編纂され全国で唯一、完本として伝わる『出雲国風土記』に「神名樋野」と記された茶臼山の周辺に、山代二子塚、大庭鶏塚、出雲国府跡、山代郷遺跡群正倉跡など国史跡に指定された遺跡が集中しています。

川原宮Ⅲ遺跡の調査では、室町時代の溝状遺構や江戸時代の土坑など、中世から近世にかけての遺構・遺物を検出しました。茶臼山の南西麓における土地利用の変遷を知るうえでも貴重な成果となりました。

本書がこの地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解を深めるために、広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり御協力をいただきました島根県土木部をはじめ、松江市、地元の方々、並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和元年9月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例 言

1. 本書は、島根県土木部道路建設課からの委託を受けて、島根県教育委員会が平成 29 年度に実施した国道 432 号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は下記のとおりである。
松江市大庭町 84-1 外 川原宮^{かわはらのみや}Ⅲ遺跡
3. 調査組織
調査主体 島根県教育委員会
平成 29 年度
[事務局] 萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聰（同総務課長）、池淵俊一（同管理課長）
[調査担当者] 間野大丞（調査第三課長）、佐野木信義（同調査補助員）、高木優子（同）
平成 30 年度
[事務局] 椿 真治（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聰（同総務課長）、守岡正司（同管理課長）
[調査担当者] 間野大丞（調査第三課長）、米田美江子（同調査補助員）、佐野木信義（同）
平成 31 年度
[事務局] 椿 真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田 諭（同総務課長）、守岡正司（同管理課長）
[調査担当者] 間野大丞（調査第三課長）、米田美江子（同調査補助員）、佐野木信義（同）
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、株式会社祥好建設に委託した。
5. 発掘調査にあたっては以下の方々から御指導いただいた。（職名は調査指導当時）
大橋康夫（島根大学法文学部教授）、勝部 昭（史跡出雲国府発掘調査指導委員会委員）
川上昭一（松江市まちづくり文化財課）、木本雅康（長崎外国語大学外国語学部教授）
6. 挿図中の方位は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系 X 軸方向を示し、座標系の XY 座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。
7. 本書で使用した第 2 図・第 32 図は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図（松江）を使用した。
8. 本書に掲載した遺構写真は間野が、遺物写真は廣江耕史（調査第三課文化財保護主任）が撮影した。
9. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成・浄書は調査員・臨時職員・遺物整理作業員が行つたほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
10. 本書の執筆は、第 2 章は米田、第 4 章第 3 節は間野と佐野木、その他を間野が行なった。
11. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）で保管している。

凡 例

1. 本文、図版、表に用いた遺構略号は次のとおりである。
SD：溝・溝状遺構、SX：その他の遺構、SK：土坑、P：ピット
2. 本文、挿図、写真図版中の遺物番号は一致する。
3. 遺物実測図の▲印は釉際を示す。
4. 須恵器および陶磁器に関しては下記の論文・報告書を参考にした。

島根県教育委員会『史跡出雲国府跡 - 9 総括編 -』2013年

九州近世陶磁器学会『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10周年記念 -』2000年

重根弘和「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論文集

近藤喬一先生退官記念事業会 2003年

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と歴史的環境	3
第3章 川原宮Ⅲ遺跡	
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構の調査	11
第3節 包含層の調査	29
第4章 総括	32
第1節 古代の川原宮Ⅲ遺跡	34
第2節 中世の川原宮Ⅲ遺跡	35
第3節 近世の川原宮Ⅲ遺跡	37
第4節 おわりに	39

表目次

第1表 国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧	1
第2表 遺物観察表	43

写真目次

写真1 川原宮Ⅱ・Ⅲ遺跡近景（2014年撮影上空：北西から）	34
--------------------------------	----

挿図目次

第1図 大庭バイパス建設に伴う発掘調査区位置図	2
第2図 川原宮Ⅲ遺跡と周辺の遺跡	4
第3図 川原宮Ⅲ遺跡調査区配置図	9
第4図 調査区全体図	10
第5図 調査区グリッド配置図	11
第6図 調査区北壁土層断面図	12
第7図 調査区西壁土層断面図	13
第8図 旧水田に伴う杭列・埋設桶実測図	13
第9図 埋設桶・攪乱土坑出土遺物実測図	14
第10図 柱穴群平面図	16
第11図 ピット土層断面図(1)	17
第12図 ピット土層断面図(2)	18
第13図 ピット土層断面図(3)	19
第14図 ピット土層断面図(4)	20
第15図 ピット土層断面図(5)	21
第16図 ピット内遺物出土状況図	21
第17図 ピット出土遺物実測図	22
第18図 SK01・SK02 平面図・土層断面図	22
第19図 SK01 出土遺物実測図	22
第20図 SD01 平面図・土層断面図	23
第21図 SD02・SD03 平面図・土層断面図	23
第22図 SD04 平面図	24
第23図 SD04 土層断面図	25
第24図 SD04 出土遺物実測図	26
第25図 SX01 平面図・土層断面図	27
第26図 SX01 出土遺物実測図	28
第27図 包含層遺物出土状況図	29
第28図 包含層出土遺物実測図(1)	30
第29図 包含層出土遺物実測図(2)	31
第30図 川原宮Ⅲ遺跡・川原宮Ⅱ遺跡遺構全体図	32
第31図 川原宮Ⅱ遺跡土層断面図	33
第32図 茶臼山南西麓の中世遺跡	35
第33図 黒田館跡平面図	36
第34図 大庭原ノ前遺跡平面図	36
第35図 松江城下町遺跡・北屋敷(殿町279番地外)胞衣埋納遺構	37
第36図 古曾志大谷1号墳・殿様道 土器埋納遺構	38

写真図版目次

- | | | |
|--------|--|--|
| 卷頭図版 1 | 1. 川原宮Ⅲ遺跡遠景(南西から)
2. 川原宮Ⅲ遺跡近景(北西から) | 図版 11 1. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物(第9図)
2. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物(第9図) |
| 卷頭図版 2 | 1. 調査区全景 調査終了後（南から）
2. SD04 完掘後（南から） | 図版 12 1. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物(第9図)
2. SK01 出土遺物 (第 19 図)
3. ピット出土遺物 (第 17 図) |
| 図版 1 | 1. 調査終了後（南から）
2. SD04 完掘後（南西から） | 図版 13 1. ピット出土遺物 (第 17 図)
2. ピット出土遺物 (第 17 図) |
| 図版 2 | 1. 調査区北壁土層堆積状況（南東から）
2. 調査区北壁土層堆積状況（南から） | 図版 14 1. SD04 出土遺物 (第 24 図)
2. SD04 出土遺物 (第 24 図) |
| 図版 3 | 1. A2・B2 グリッド遺構完掘状況（南から）
2. ピット 06 遺物出土状況（西から） | 図版 15 1. SD04 出土遺物 (第 24 図)
2. SD04 出土遺物 (第 24 図) |
| 図版 4 | 1. SK01 土層堆積状況（西から）
2. SK02 土層堆積状況（北から） | 図版 16 1. SX01 出土遺物 (第 26 図)
2. 包含層出土遺物 (第 29 図) |
| 図版 5 | 1. SD01 完掘状況（北から）
2. SD02 土層堆積状況（西から） | 図版 17 1. 包含層出土遺物 (第 28 図)
2. 包含層出土遺物 (第 28 図) |
| 図版 6 | 1. SD04 完掘状況（南から）
2. SD04:D ライン土層堆積状況（南東から） | 図版 18 1. 包含層出土遺物 (第 28 図)
2. 包含層出土遺物 (第 28 図) |
| 図版 7 | 1. SD04:A ライン土層堆積状況（西から）
2. SD04:C ライン土層堆積状況（南から） | |
| 図版 8 | 1. SD04 調査状況（北西から）
2. SX01 土層堆積状況（西から） | |
| 図版 9 | 1. 土師器皿出土状況 (第 29 図 3)
2. 旧水田に伴う杭列・埋設桶(北から) | |
| 図版 10 | 1. 木本雅康氏調査指導（平成 29 年 11 月 20 日）
2. 木本雅康氏調査指導（平成 29 年 11 月 20 日） | |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯（第1表・第1図）

国道432号は、広島県竹原市を起点として島根県松江市へ至る延長約210kmの路線であり、「しまねの新たな道づくりビジョン」において、広域幹線（県内外の都市間を連結し、県内の道路網の骨格となる一般国道）に位置づけられている。大庭バイパスは、現道の松江市古志原地内から同市大草町までの区間で、問題となっている慢性的な交通渋滞の解消を目的として計画された延長1.9kmの道路である。大庭地区の一部区間については、松江市の土地区画整理事業と連携して整備し、平成27年9月に供用開始されている。

島根県教育委員会は、島根県土木部松江県土整備事務所から埋蔵文化財の有無について照会を受け、平成20年度から試掘確認調査を実施している。周知の遺跡は存在しなかったが、試掘調査の結果、土地区画整理事業地内の道路用地では新たに柳堀遺跡を発見し、同事業地内の茶臼遺跡が当該部分まで広がることを確認した。また土地区画整理事業地（県道八重垣神社・竹矢線）南側の道路用地で川原宮II遺跡、国道432号の東側で団原III遺跡を新たに発見した。こうした試掘調査結果を受けて、平成23年度から平成26年度にかけて柳堀遺跡、茶臼遺跡、川原宮II遺跡の本調査を実施した。平成27年度に3遺跡の調査成果を収録した報告書を刊行している。

平成29年度は、用地買収が完了した延長30mの道路用地について、遺跡の有無を確認するため試掘確認調査を実施した。4ヶ所のトレンチを設定し、4月17日から28日まで行った（第1図・第3図）。調査では古代から中世の遺構および遺物包含層を確認した。調査結果に基づき、松江県土

第1表 国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

調査年度		調査対象		所在地	箇所数	面積(m ²)
平成20年	2008年	試掘確認調査	要注意箇所(団原・大庭鶴塚西)	松江市大庭町	7	
平成22年	2010年	試掘確認調査	要注意箇所(柳堀)	松江市大庭町	11	
平成23年	2011年	試掘確認調査	要注意箇所(柳堀)	松江市大庭町	7	
平成23年	2011年	本調査	柳堀遺跡(A～E区)	松江市大庭町		600
平成24年	2012年	試掘確認調査	要注意箇所(茶臼)	松江市大庭町	3	
平成24年	2012年	本調査	柳堀遺跡(F～H区)	松江市大庭町		1600
平成25年	2013年	試掘確認調査	要注意箇所(川原宮II)	松江市大庭町	7	
平成25年	2013年	本調査	茶臼遺跡	松江市大庭町		2000
平成26年	2014年	試掘確認調査	要注意箇所(川原宮II)	松江市大庭町	2	
平成26年	2014年	本調査	川原宮II遺跡	松江市大庭町		2500
平成26年	2014年	試掘確認調査	要注意箇所	松江市山代町	2	
平成27年	2015年	試掘確認調査	要注意箇所	松江市古志原町	2	
平成29年	2017年	試掘確認調査	要注意箇所(川原宮III)	松江市大庭町	4	
平成29年	2017年	本調査	川原宮III遺跡	松江市大庭町		370
平成30年	2018年	試掘確認調査	要注意箇所(下黒田II)	松江市大庭町	2	



第1図 大庭バイパス建設に伴う発掘調査区位置図

整備事務所から平成 29 年 6 月 19 日付け松整第 1793 号で「川原宮Ⅲ遺跡」の発見通知が提出された。これを受け島根県教育委員会では、同日付け島教文財第 134 号の 26 で松江県土整備事務所に対し本発掘調査を実施するよう勧告した。以上の法的手続きを基づいて、同年度に実施した本調査の成果をまとめたのが本書である。

第2節 調査の経過

川原宮Ⅲ遺跡の本調査は9月12日から12月12日まで実施した。調査の結果、室町時代の溝状遺構と建物の柱穴群、近世の土坑などを検出した。当教育委員会の調査と並行して、松江市教育委員会が調査区北側で発掘調査を実施し、古代の道路遺構を検出した。溝状遺構についても道路遺構の可能性が想定されたため、11月20日に木本雅康氏と勝部昭氏、28日に大橋康夫氏から調査指導を受けた。指導会では道路遺構として断定することは難しいとの評価がなされた。

こうした調査成果は『ほるる～と 432 大庭バイパス発掘通信』(2回発行)を通じて、地域住民への周知をはかった。また現地説明会を 12 月 16 日に開催し、約 40 名の参加があった。さらに、島根県立八雲立つ風土記の丘が開催した「平成 29 年度風土記の丘地内発掘調査速報展」において出土品の公開を行っている。

第2章 位置と歴史的環境

川原宮Ⅲ遺跡は、島根県松江市大庭町に所在する。字名「川原宮」は本遺跡から北、県道八重垣神社・竹矢線までの台地縁辺と西側の谷部にかけてみられる。字名からは神社の存在が想起されるが、川原宮遺跡と川原宮Ⅱ遺跡の調査で、関連する遺構・遺物は確認されていない。

遺跡のある一帯は意宇川の扇状地が広がり、古代から中世にかけて出雲地方の中心地にあたる。茶臼山（標高 171.5m）の裾に広がる乃木段丘上には、**大庭鶴塚古墳**および**山代二子塚古墳**、**出雲国山代郷遺跡群正倉跡**などの国史跡のほか県史跡に指定されている重要遺跡が分布している。

本遺跡は、茶臼山南西麓に立地し、遺跡の西側には谷地形が広がる。現在この谷地形の東には宇竜川が流れしており、宇竜川は北流して馬橋川に合流する。この宇竜川の旧河道が**茶臼遺跡・柳堀遺跡・川原宮Ⅱ遺跡**から検出されている。3 遺跡で検出した旧河道は弥生時代から形成される。**川原宮Ⅱ遺跡**は奈良時代頃まで、**茶臼遺跡・柳堀遺跡**は中世まで機能していたものと考えられている。

旧石器時代

中海・宍道湖周辺では、旧石器時代の遺跡は、本遺跡の所在する大庭・山代から乃木にかけて広がる台地（乃木段丘）を中心に分布している。松江市内では旧石器時代の遺跡はあまり知られていないが、下黒田遺跡で石器製作跡と考えられるユニットを確認し、玉髓製石核と剥片が出土している。また、市場遺跡で黒曜石製細石核、**山代郷北新造院跡**の造成土中から玉髓製ナイフ形石器が見つかっている。上立遺跡では北陸～東北地方から搬入された可能性のある頁岩製搔器が採集されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、前期の連続爪型文土器が出土した**竹矢小学校校庭遺跡**、条痕文土器が出土した**法華寺前遺跡**、後期の磨消縄文土器や石器が出土した**才塚遺跡**など、意宇平野北側周縁に沿って点在している。ほかに後期～晚期の土器が多く出土した**石台遺跡**、**上小紋遺跡**などが知られている。

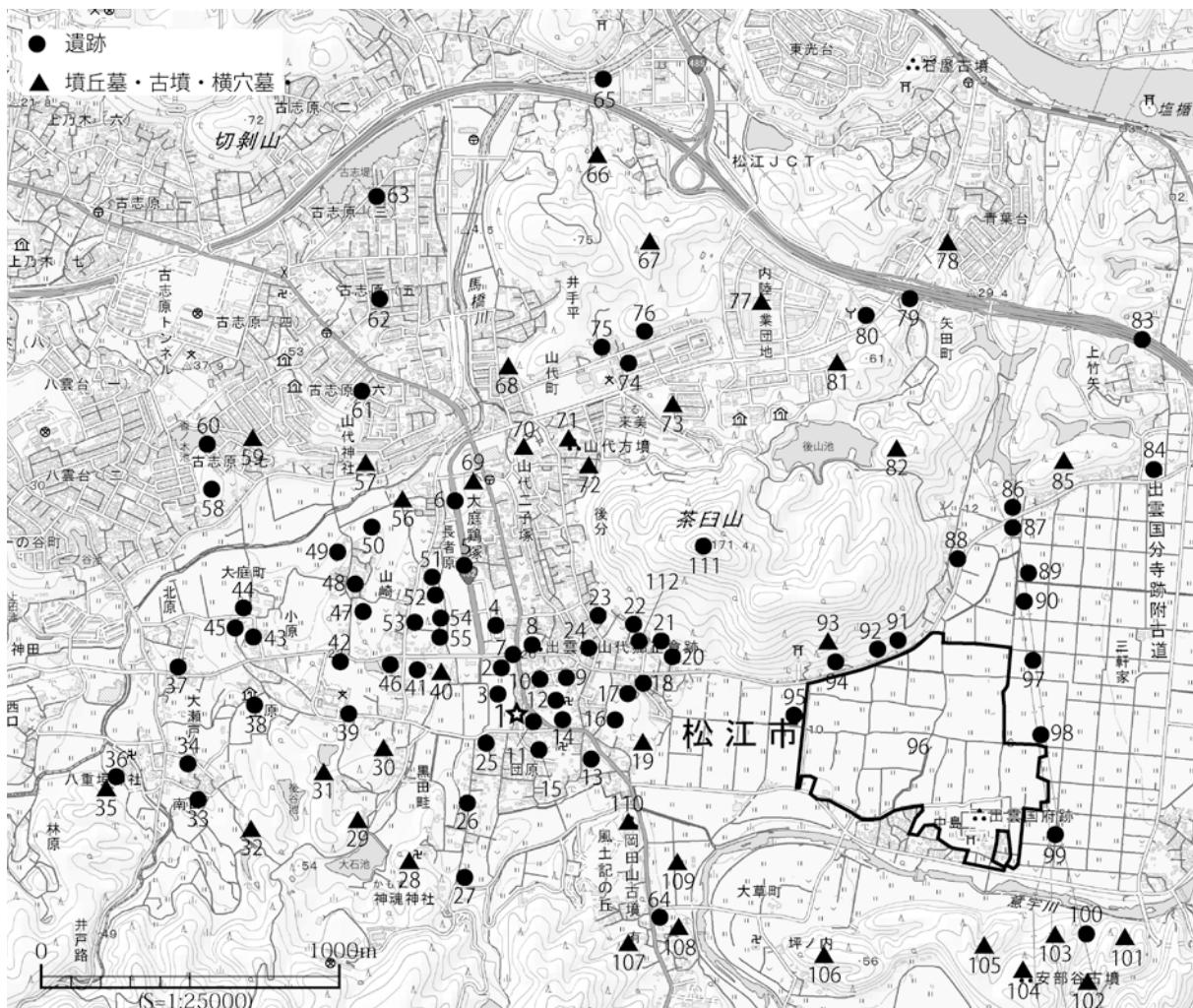
弥生時代

意宇平野中央部の**出雲国府跡**では前期の土坑や前期後半から中期前葉の土器が出土している。**布田遺跡**では前期から中期の溝や土坑を確認している。また同遺跡では貯木施設が見つかっており、農耕土木具の未成品も出土している。**上小紋遺跡・向小紋遺跡・夫敷遺跡**では水田が見つかっている。大庭小学校から北西に延びる微高地上に位置する**大庭小原遺跡**では中期の溝状遺構や貯蔵穴を検出し、砂口遺跡では柱穴を検出した。後期では、**出雲国造館跡**（黒田畦土居地区）から竪穴建物、**柳堀遺跡**から溝状遺構が検出されている。**柳堀遺跡**の本集落は西側の微高地上の可能性がある。

また四隅突出型墳丘墓としては、茶臼山北東丘陵部に来美墳墓や間内越墳墓群などが築かれる。意宇川を挟んだ南丘陵上には**東百塚山**20号墓が築かれ、同71号墳下層からは弥生時代後期の土器が確認されている。

古墳時代

集落遺跡としては、大庭小学校から北西に延びる微高地上に位置する**大庭小原遺跡**で前期の、砂口遺跡で中期の竪穴建物を検出した。また茶臼山裾に位置する**山代沖田遺跡**では古墳時代の竪穴建物を検出している。茶臼遺跡では前期の溝状遺構を、柳堀遺跡では後期の溝状遺構を検出している。意宇



1 川原宮Ⅲ遺跡	29 大石横穴墓群	57 向山1号墳	85 上竹矢古墳群
2 川原宮遺跡	30 平古墳群	58 向山西遺跡	86 間内遺跡
3 川原宮Ⅱ遺跡	31 万居堤古墳	59 向山西古墳群	87 大平遺跡
4 大庭原ノ前遺跡	32 (県)荒神谷・後谷古墳群	60 香ノ木池遺跡	88 才塚遺跡
5 柳堀遺跡	33 佐草宮ノ前遺跡	61 山代神社前遺跡	89 上小紋遺跡
6 茶臼遺跡	34 佐草井頭遺跡	62 練兵場I遺跡	90 向小紋遺跡
7 大庭植松遺跡	35 鏡の池裏山古墳群	63 練兵場II遺跡	91 大谷遺跡
8 (国)山代郷正倉跡	36 鏡池遺跡	64 上立遺跡	92 聖岩遺跡
9 黒田館跡	37 大庭北原遺跡	65 石台遺跡	93 大谷横穴墓群
10 下黒田遺跡	38 空原遺跡	66 上谷遺跡	94 真名井遺跡
11 下黒田Ⅱ遺跡	39 大庭廻田遺跡	67 南外古墳群	95 大坪遺跡
12 団原遺跡	40 東淵寺古墳	68 井出平山古墳群	96 (国)出雲國府跡
13 団原Ⅱ遺跡	41 外屋敷遺跡	69 (国)大庭鶏塚古墳	97 四配田遺跡
14 団原Ⅲ遺跡	42 大庭小学校校庭遺跡	70 (国)山代二子塚古墳	98 神田遺跡
15 黒田畦遺跡	43 砂口遺跡	71 (国)山代方墳	99 大屋敷・才台垣遺跡
16 小無田遺跡	44 大庭小原遺跡	72 永久宅後古墳	100 天満谷遺跡
17 (県)山代郷南新造院瓦窯跡(小無田Ⅱ遺跡)	45 B16遺跡	73 狐谷古墳・横穴墓群	101 (国)安部谷横穴墓群
18 寺の前遺跡	46 B3遺跡	74 来美南遺跡	102 (県)大草岩船古墳
19 団原古墳	47 B9遺跡	75 岩井谷遺跡	103 (県)古天神古墳
20 (県)山代郷南新造院跡(四王寺跡)	48 B10遺跡	76 (国)山代郷北新造院跡(来美廃寺)	104 (県)東百塚山古墳群
21 内堀石塔群	49 B12遺跡	77 来美墳墓	105 (県)西百塚山古墳群
22 市場遺跡	50 B11遺跡	78 間内越墳墓群	106 才光寺横穴墓群
23 山代沖田遺跡	51 B8遺跡	79 平所遺跡	107 小谷横穴墓群
24 光泉寺遺跡	52 B28遺跡	80 寺山小田遺跡	108 (県)御崎山古墳
25 神魂神社参道遺跡	53 B18遺跡	81 (県)十王免横穴墓群	109 (県)岩屋後古墳
26 出雲国造館跡	54 B21遺跡	82廻田古墳群	110 (国)岡田山古墳群
27 中西遺跡	55 土地田遺跡	83 才ノ峠遺跡	111 茶臼山城跡
28 大石古墳群	56 下ノ原古墳群	84 (国)出雲國分寺跡	112 三代宅角柱状石塔

第2図 川原宮Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 国史跡:(国)、県史跡:(県)

平野の中央部に当たる出雲国府跡の下層において、初期須恵器や筒形土製品など渡来系の要素が強い遺物が見つかっている。夫敷遺跡では初期須恵器が出土しており、古墳時代中期以降、対外交流を示す遺物が急増する。

本遺跡の南西部に位置する丘陵（神魂神社から八重垣神社の間）には、大石古墳群をはじめ大石横穴墓群などが築かれている。出雲国府跡から意宇川を挟んだ南の丘陵上には、古天神古墳をはじめ東・西百塚山古墳群、安部谷横穴墓群などが多く築かれている。意宇川を挟んだ西の低丘陵地には、御崎山古墳をはじめ銘文をもつ大刀が出土した岡田山1号墳、小谷横穴墓群などが築かれる。以上の3地域よりも北部の茶臼山裾に広がる丘陵上には、前期末の廻田1号墳をはじめ、後期の首長墳と想定される山代二子塚古墳や山代方墳、造り出し付方墳である大庭鶴塚古墳、永久宅後古墳、横穴墓では狐谷横穴墓群、十王免横穴墓群など多くの古墳・横穴墓が築かれる。馬橋川を挟んだ西側の丘陵上にも石棺式石室である向山1号墳、向山西古墳群が築かれる。

奈良・平安時代

官衙遺跡としては出雲国府跡、山代郷正倉跡がある。出雲国府跡は昭和43（1968）年から3ヶ年におよぶ発掘調査で位置が確認された。調査では大型建物跡や規則的に配置された掘立柱建物などの遺構および硯や木簡、墨書き土器などが出土している。さらに平成11（1999）年から再開された発掘調査により国司館や官営工房と考えられる遺構・遺物を検出するなど、実態解明が進んでいる。山代郷正倉跡は茶臼山南西の段丘上に位置している。発掘調査で、規格的に配置された総柱建物群が見つかっている。この山代郷正倉跡を囲む大溝が下黒田遺跡と黒田館跡で検出されている。下黒田遺跡は正倉跡の南100mに位置し、正倉跡の南辺を区画すると考えられる陸橋を伴う幅3～3.6mの東西大溝が検出されている。黒田館跡は正倉跡の東に位置し、東辺を区画すると考えられる南北大溝が検出されている。

黒田畦遺跡では東西方向に規則的に並んで、1.5～4mの大いびつな楕円形を呈する土坑を10基検出している。1基のみは完形の土器が纏まっており祭祀関係と考えられているが、土坑の多くは廃棄土坑と考えられる。墨書き土器「云石」、甕、製塙土器なども出土している。

寺院としては出雲国分寺跡、山代郷北新造院跡（来美廃寺）や山代郷南新造院跡（四王寺跡）などがある。出雲国分寺跡と山代郷南新造院跡（四王寺跡）の付近からは寺院に瓦を供給した窯跡も見つかっている。道路跡は川原宮Ⅲ遺跡、外屋敷遺跡で確認されている。

中世

意宇平野は古代から引き続き政治・文化の拠点であり、中世出雲府中に関わる遺跡が平野と周辺部に点在している。これまでの発掘調査において、国衙の屋敷跡や在庁官人に関わる遺跡が判明している。出雲府中は、文献史料によれば室町時代まで継続しているが、茶臼山周辺の遺跡は南北朝期まで存続したものが多い。中世出雲府中域は守護の支配を経て、戦国時代に尼子氏領となり、一部はその直属の家臣に与えられた。また、この地域には神魂神社・淨音寺をはじめ多くの社寺が存在しており、中世出雲国一宮である杵築大社の影響が強いことも重要な特徴である。

出雲国府跡では掘立柱建物や井戸のほか、12世紀の白磁や13世紀の青磁が纏まって出土している。その東に位置する大屋敷遺跡からも12～13世紀の遺構や遺物が出土しており、役所機能をもつ一連の遺跡と推定されている。国府跡から意宇川を挟んだ右岸の谷間に位置する天満谷遺跡では12～13世紀の建物や柵、白磁・青磁などの輸入陶磁器、国内産陶磁器も多く出土している。意宇平野北

東部の丘陵に位置する中竹矢遺跡では中国製陶磁器を出土する12世紀の建物、14世紀の火葬墓が検出されている。また茶臼山の北丘陵を下った馬橋川の下流付近に位置する石台遺跡でも北側の丘陵部から流れてきたと思われる12～13世紀の中国製陶磁器、国産陶器などが出土した。

黒田館跡では、方形の土壘とその外側をめぐる堀が検出されている。規模は北辺37.5m、南辺45m、東辺63.5m、西辺56mに復元され、幅1.6～2.5mの堀を廻らしている。掘立柱建物、井戸などの遺構や白磁、青磁、灰青沙器などの輸入陶磁器が出土し、15世紀後半～16世紀代が盛期とされる。黒田館跡から北西200mに位置する山代郷正倉跡で14～15世紀のものと考えられる天目茶碗・備前擂鉢・中国製青磁などを伴う建物群が検出されている。黒田館跡から南250mに位置する黒田畦遺跡では溝で囲まれた建物と柵列を検出し、その20m東には15～16世紀の土壙墓6基が長軸をそろえて墓域を造っている。その中には約100枚もの古銭が出土した木棺墓もある。

黒田畦遺跡から南西250mには出雲国造館跡が所在する。出雲国造館跡からは、北側に東西方向の14世紀に埋められた堀状の大溝、その120m南西に東西方向の近世の堀状の大溝が検出されており、中世から近世にかけて拡張されたものと考えられる。屋敷内には建物、廃棄土坑、井戸、輸入陶磁器が出土している。

山代郷南新造院跡（四王寺跡）から14～16世紀代のものと思われる中国製青磁・石硯・石鍋が出土し、南西に位置する寺の前遺跡では自然流路から12～16世紀の中国製の陶磁器が出土している。150m南に位置する小無田遺跡でも建物、土坑や14～15世紀代と考えられる中国製青磁、16世紀代の陶器が出土している。遺跡内の竹林には一部土壘が残存しており遺構との関連が想定される。小無田遺跡から350m北の茶臼山裾に位置する市場遺跡では、15～16世紀代の中国製青磁・染付や瀬戸・備前などの陶磁器が出土するとともに同時期の可能性のある建物も検出されている。茶臼山頂上に造られた茶臼山城跡は5つの郭をもち堀切、畝状空堀群を形成し、15～16世紀に機能した山城と考えられている。

川原宮II遺跡では、平安時代末から鎌倉時代を中心とする粘土採掘坑が多数検出されている。

近世

出雲国は、関ヶ原の戦いののち堀尾氏が領主となり富田城（安来市広瀬町）に入った。慶長12（1607）年から松江城と城下町の建設が始まり、慶長16（1611）年には富田城から松江城に移り、城下町の整備が進められた。

松江に城下町が建設されて以降、政治と文化の中心であった意宇平野は、農村へと姿を変え現在に至っている。川原宮II遺跡・大庭原ノ前遺跡・柳堀遺跡・大庭小原遺跡などで近世の遺構・遺物が検出されている。

【参考文献】

島根県教育委員会『团原遺跡発掘調査概報I－山代郷正倉跡－』1978

島根県教育委員会『团原遺跡発掘調査概報II－山代郷正倉推定地－』1980

島根県教育委員会『团原遺跡発掘調査概報III－松江市大庭町字薬師ノ前・字元鳥居・字長畑・字仁平屋敷所在遺跡－』1981

島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981

島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告I－松江市大庭町黒田畦字土居・字神主屋敷所在遺跡－』1982

島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告II－松江市大庭町字内屋敷、山代町字小門、字岡所在遺跡－』1983

- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅲ－小無田遺跡－』1984
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI－団原古墳・下黒田遺跡－』1989
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VII－茶臼山城跡・市場遺跡・内堀石塔群－』1990
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告IX－山代郷正倉跡・山代方墳－』1993
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13 来美廃寺「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』2002
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14 史跡出雲國府跡1』2003
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15 史跡出雲國府跡2』2004
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書16 史跡出雲國府跡3』2005
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書17 史跡出雲國府跡4』2006
- 島根県教育委員会『山代郷北新造院 史跡出雲國山代郷遺跡群北新造院（来美廃寺）発掘調査報告書』2007
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書18 史跡出雲國府跡5』2008
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書19 史跡出雲國府跡6』2009
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書20 史跡出雲國府跡7』2011
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書21 史跡出雲國府跡8』2013
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22 史跡出雲國府跡9』2013
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23 魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書－松江市東部における古墳の調査（2）－』2016
- 島根県教育委員会「柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮II遺跡」『国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』2016
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書24 上竹矢7号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書 松江市東部における古墳の調査（3）』2018
- 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書25 史跡出雲國府跡10』2019
- 松江市教育委員会『出雲國府発掘調査概報』1970
- 松江市教育委員会『出雲國造館跡発掘調査報告』1980
- 松江市教育委員会『黒田館跡』1984
- 松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』1988
- 松江市教育委員会『出雲國造館跡発掘調査報告書』『松江市文化財調査報告書 第52集』1993
- 松江市教育委員会『黒田畦遺跡発掘調査報告書』『松江市文化財調査報告書 第65集』1995
- 松江市教育委員会『山代沖田遺跡』『松江市文化財調査報告書 第151集 茶臼山団地開発に伴う発掘調査報告書』2012
- 松江市教育委員会『柳堀遺跡・大庭原ノ前遺跡』『松江市文化財調査報告書 第158集 松江市宇童谷土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』2014
- 松江市教育委員会『大庭小原遺跡』『松江市文化財調査報告書 第160集 小原団地造成工事に伴う発掘調査報告書』2014
- 松江市教育委員会『外屋敷遺跡』『松江市文化財調査報告書 第177集 大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書』2016
- 松江市教育委員会『大庭北原遺跡・東淵寺古墳・大庭植松遺跡』『松江市文化財調査報告書 第190集 一般県道八重垣神社竹矢線大庭工区社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』2018
- 松江市『松江市史 史料編2 考古資料』2012
- 西尾克己・廣江耕史「遺跡から見た出雲府中」『松江市歴史叢書8』2015 松江市
- 西尾克己「第4章第5節 考古資料からみた中世の松江地域」『松江市史 通史編2 中世』2016 松江市
- 原慶三「中世の意宇、出雲府中について」『平成24年度風土記の丘教室12月例会資料』2012
- 島根県立八雲立つ風土記の丘『平成30年度企画展 知られざる中世都市 出雲府中』2018
- 大庭公民館『おおばの歴史』1998

第3章 川原宮Ⅲ遺跡

第1節 調査の概要（第3図～第7図）

遺跡は茶臼山南西麓の縁辺部に位置している。南北に広がる谷地形に面しており、そのあいだは急な法面となっている。この法面に沿って南北方向には水路が流れている。調査前の標高は 21.7m で、北西 30m に位置する川原宮Ⅱ遺跡からは 4m 以上高い（第3図）。

調査対象面積 370m²で、平面はいびつな台形をしている。東辺の X = - 62730 ライン前後が西に突出しているのは、電線支柱から控えをとったためである（第4図）。

1. 調査の方法

調査は第Ⅲ座標軸系に基づく 10m 四方のグリッドを設定しておこなった。グリッドは X = - 62710、Y = 83570 の交点を基準に、東に向けてアルファベット順、南に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は北西隅をもって呼称した（第5図）。

表土および造成土は試掘確認調査の結果に基づき、バックフォー（バケットに平爪を装着）を用いて除去した。下層の遺物包含層はスコップ等を使用し、人力によって掘削をおこなった。その後、遺構検出作業は移植ゴテなどを使用して進めた。検出した遺構は土層観察用の畔を設定するか、半裁して埋土を掘削している。遺構の測量は株式会社 CUBIC の「遺構くん cubic」を用い、出力した図面を補正した。土層断面はオートレベルを使用して実測した。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは 6 × 7 版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）によりおこない、それ以外はデジタルカメラにより撮影した。また調査終了後、ラジコンヘリにより空中写真撮影も実施した。

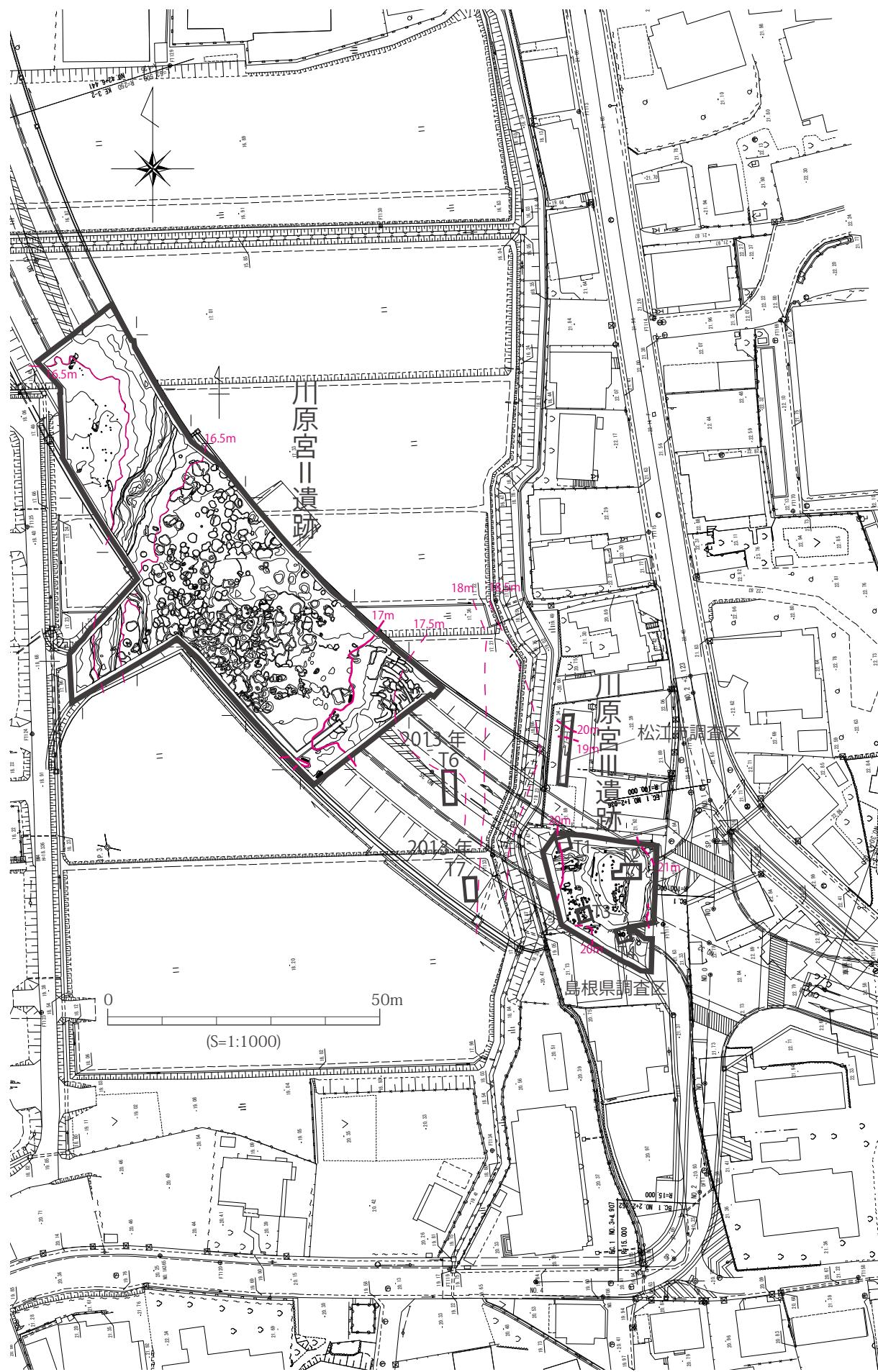
現地調査と並行して出土遺物の水洗い・注記をおこなった。現地調査の終了後、遺物の接合・復元作業を経て、分類作業をおこなった。遺構出土の資料は小片も含めて実測の対象とし、包含層出土の資料は出土例が少ないもの等を抽出した。

報告書の編集は DTP 方式を採用した。Adobe 社の IllustratorCC と PhotoshopCC を用いてトレース・画像処理をおこない、InDesignCC により編集した。

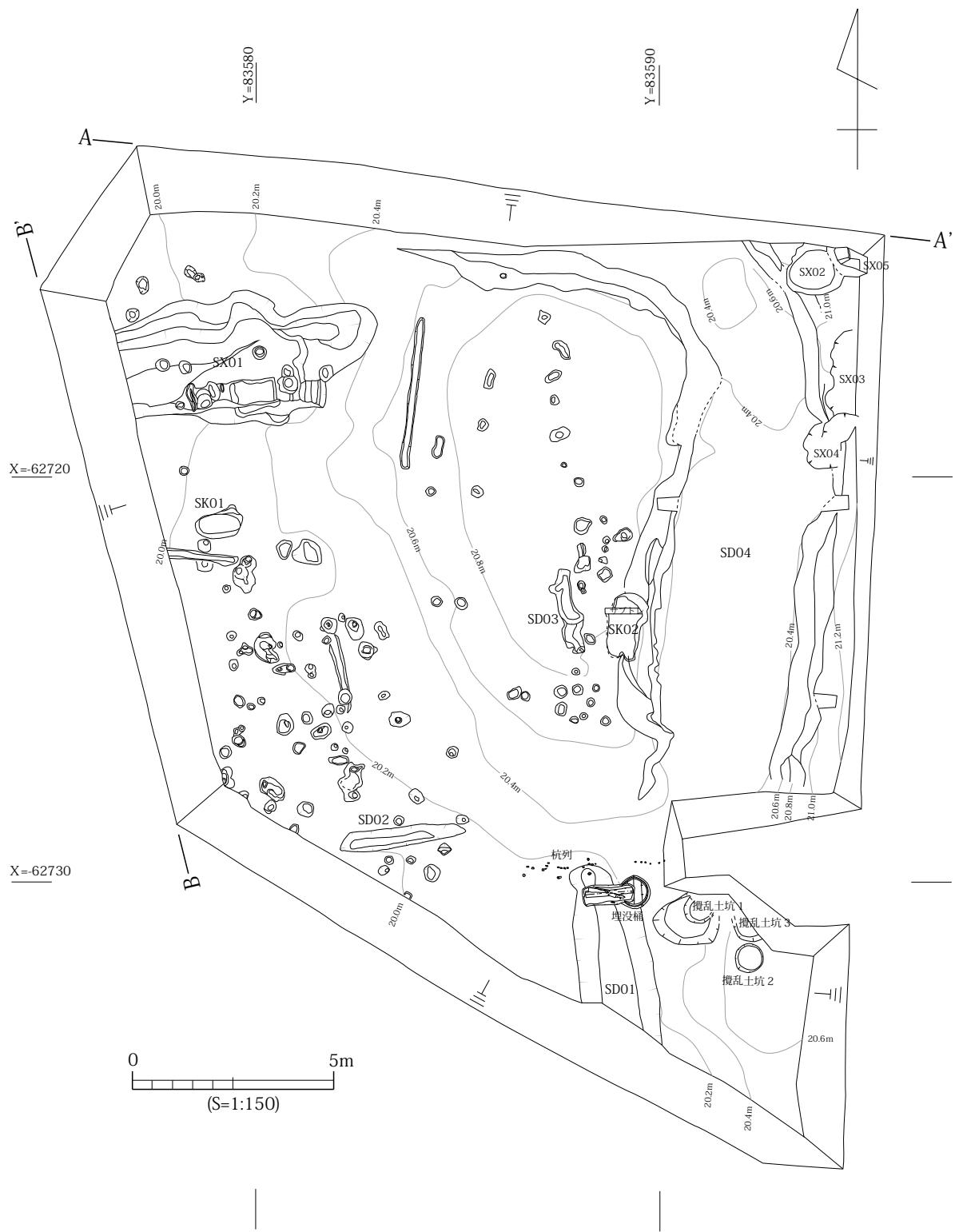
2. 基本層序および検出した遺構

調査前は宅地として利用されていた。地表面の直下には厚さ 50cm の盛り土が水平にみられる（第6図1・2層）。調査区西半ではさらに下層に厚さ 1.4m の盛り土があり、谷を埋めて敷地を広げたことがわかる（第6図3層・第7図2層）。また B3・C3 グリッドでは宅地として利用される以前の水田耕作土が確認されている。地山は大山松江降下軽石層である。地山を掘り込んだ遺構の一部が調査区壁でも確認できる。北壁では SD04 埋土（第6図8～15・24層）、西壁では SX01 埋土（第7図5～7層）である。また調査区北東隅には SD04 の東掘り形に重複する攪乱がみられた。

地山面の標高は調査区東辺で 21.2m。SD04（底面の標高 20.3～20.5m）の西に標高 20.8m の高まりがある。そこから谷に向けて下がっていき、調査区西壁で標高 20.0m になる。地山上には調査



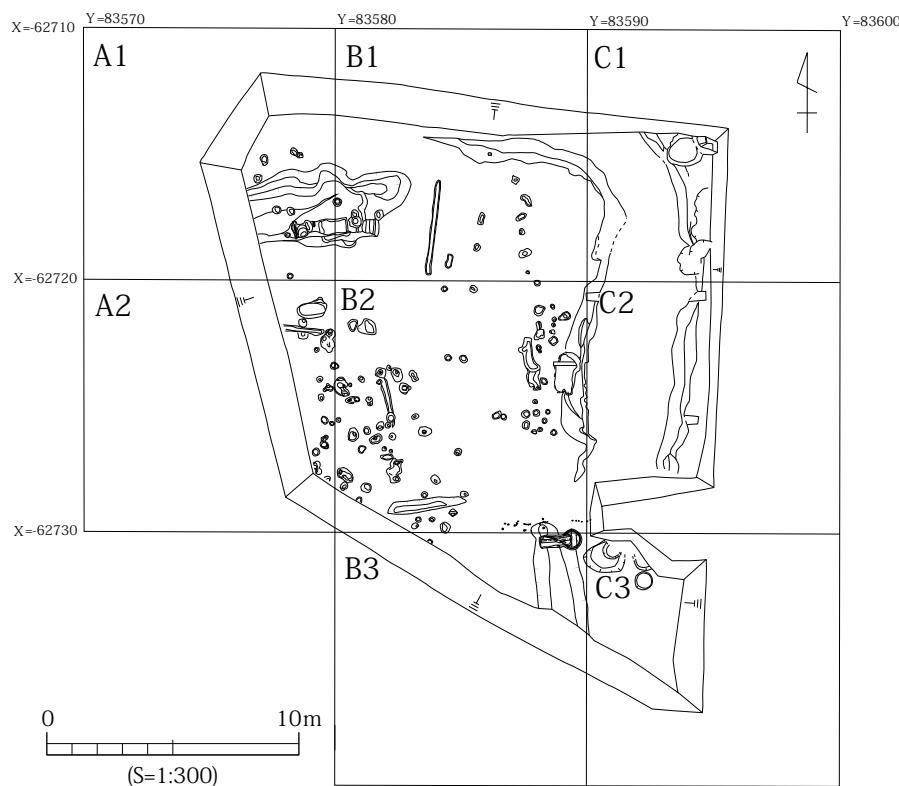
第3図 川原宮III遺跡調査区配置図



第4図 調査区全体図

区の東半を中心として、硬いマンガンバンドがみられた。

地山面で柱穴跡 100 基あまりと溝跡 4 条、土坑 2 基などを検出した（第4図）。地山面まで近現代の攪乱が及んでいるところもあり、遺物も近世・近代が主体であった。



第5図 調査区グリッド配置図

第2節 遺構の調査（第8図～第26図）

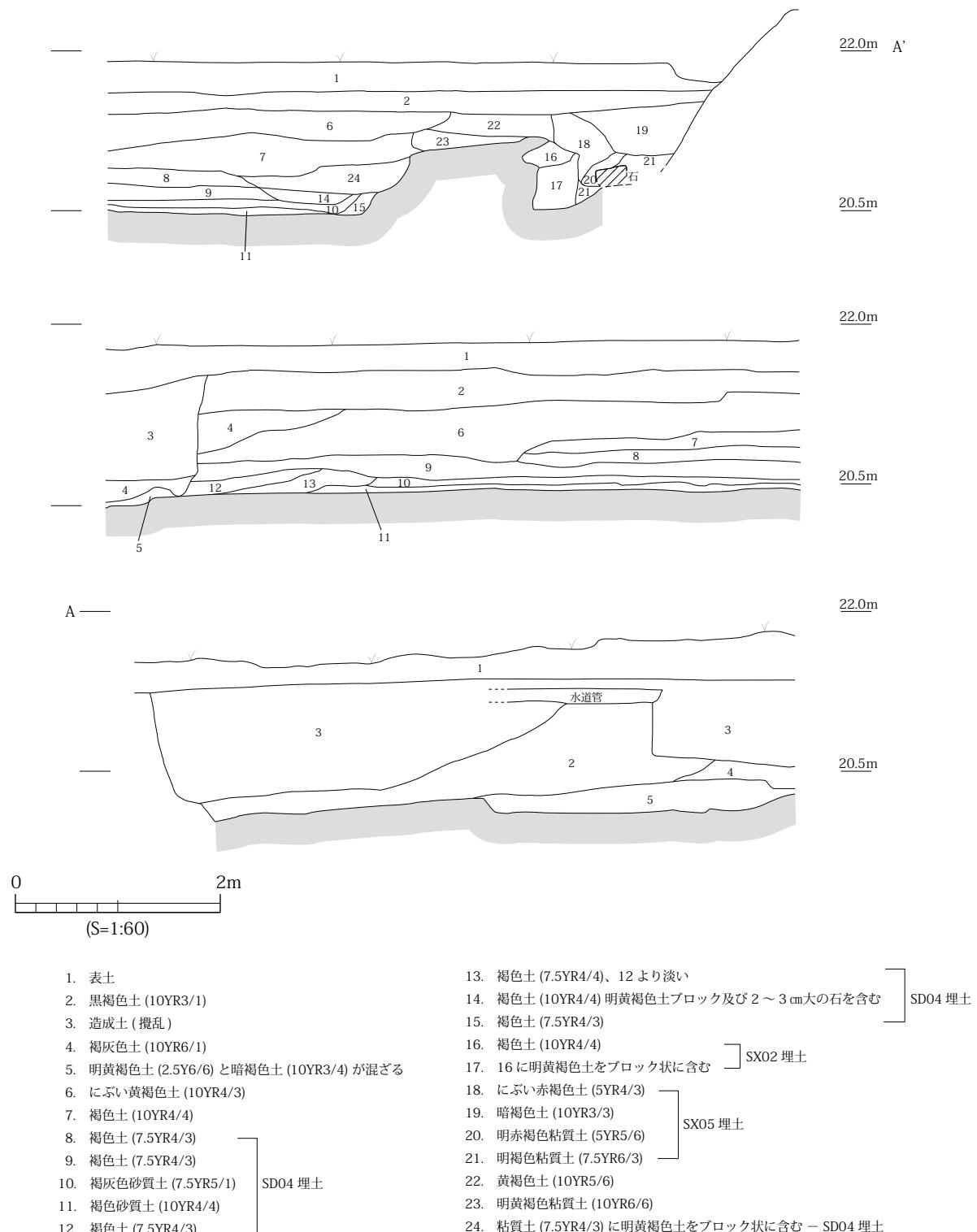
1. 旧水田に伴う遺構（第8図・第9図）

B2・B3・C2 グリッドで近代以降の水田耕作に伴う杭列と埋設桶を検出している。旧水田耕作土は杭列の南から B3 グリッドで確認された。水田は西側の谷部にむけて広がっていたものと考えられる。

杭列は 3～5cm 前後の角材・丸材計 25 本で構成される。杭列は東西方向に並び、長さは 3.5m である。あいだで 90cm ほど途切れており、その南に埋設桶がある。埋設桶は径 80cm、深さ 15cm 以上の土坑に埋設されている。西端は電線支柱を固定する丸太材の埋設坑により壊されている。桶の部材は側板 16 枚と底板が残っていた。底板は直径 70cm、厚さ 2.5cm。3 枚の板材を竹釘で結合している。側板は長さ 30cm 以上、幅 10cm、厚さ 1.5cm である。また桶の東側には近現代の開発とともになう攪乱土坑 3 基が掘りこまれていた。攪乱土坑 1 と攪乱土坑 3 は調査区外に続いている。埋土の様相から廃棄土坑と推定される。攪乱土坑 2 は径 60cm、深さ 45cm の円形をしている。井戸跡で底面には井側の痕跡も残されていた。

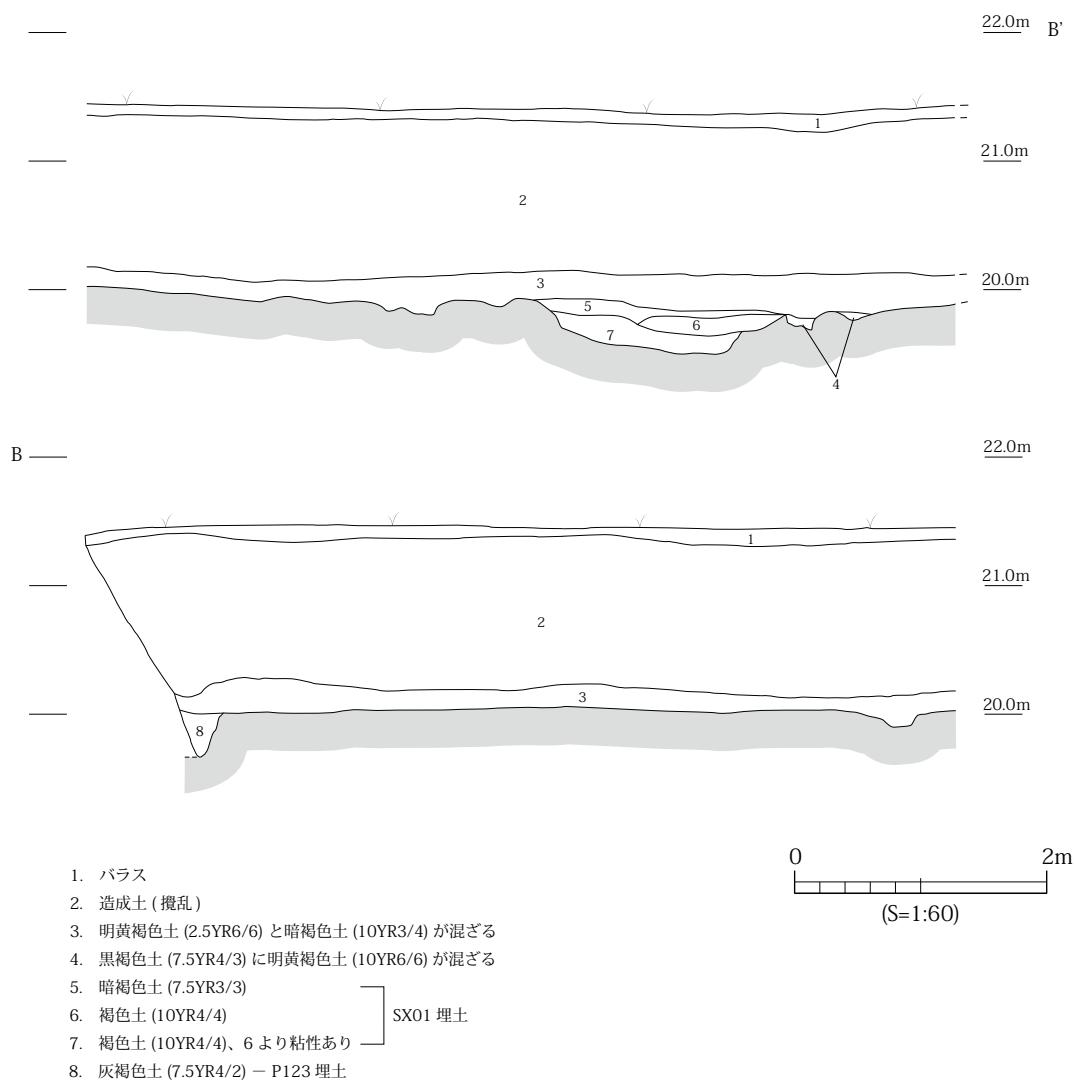
埋設桶・攪乱土坑出土遺物（第9図）

1～8 は埋設桶と電線支柱の埋設坑から出土した。1 は磁器碗。底部に上から時計回りで「巖か嶽」「木」「臺」「具」の四文字が墨書されている。時期は 19 世紀第 2 四半期である。2～8 は在地産の陶器。2～6 は布志名焼。2 は灰色釉の「ぼてぼて茶碗」で、江戸時代後期と思われる。3 は黄釉の筒形蓋物で、竹節の文様を表現している。底部に「 \otimes 」の刻印があり、空福島（又兵衛）窯の製品である。

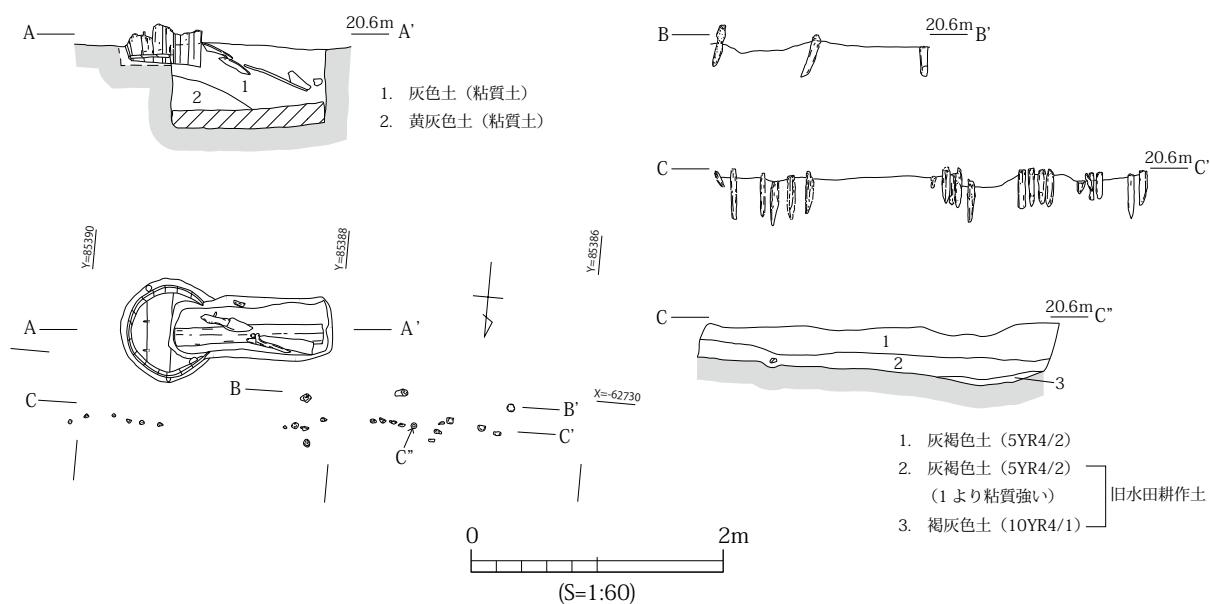


第6図 調査区北壁土層断面図

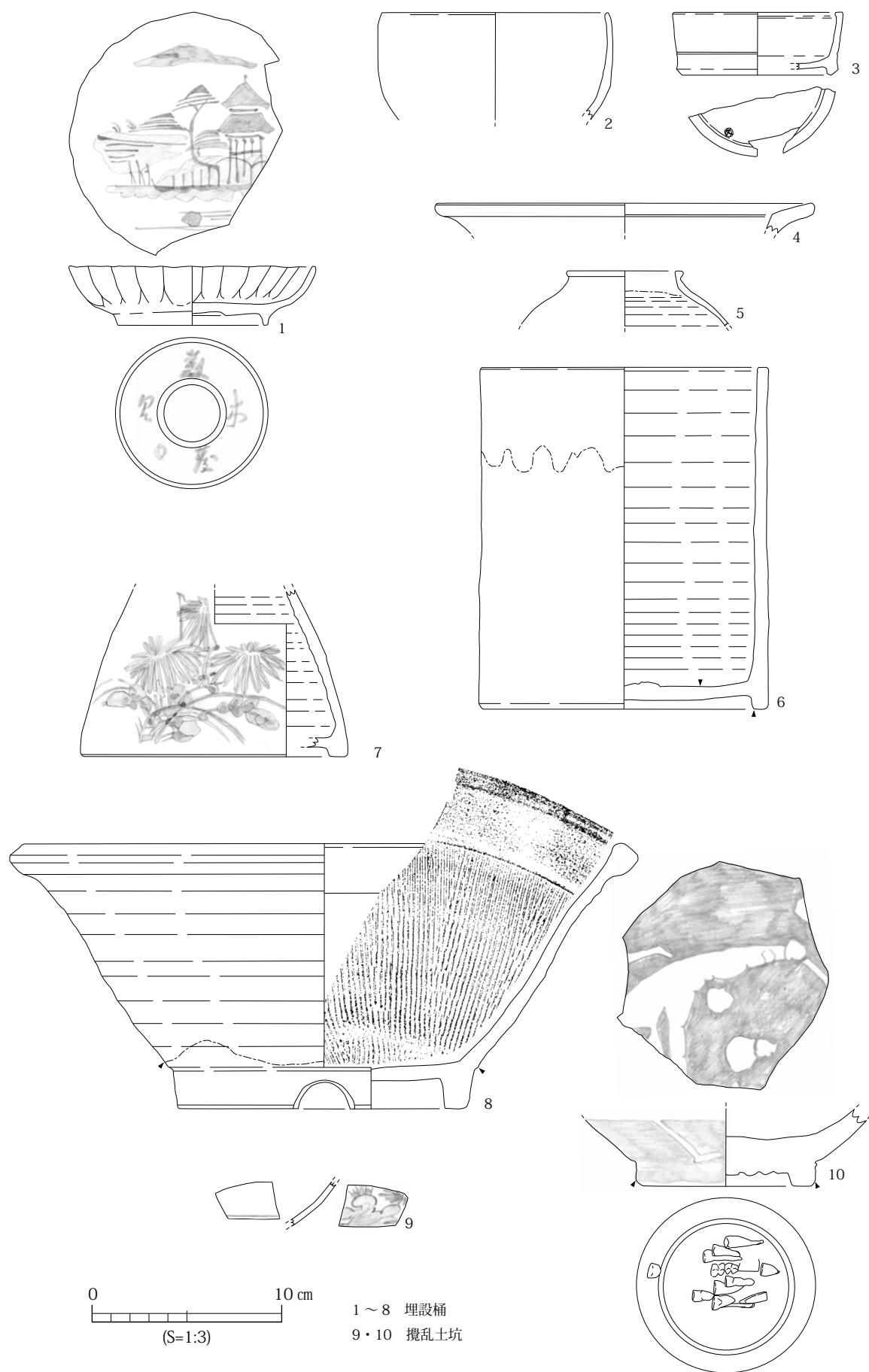
4は壺の口縁部で青磁釉が施されている。時期は明治時代初期で、永原窯の製品の可能性がある。5は土瓶で青磁釉を施す。6は鉢。内外面に黄釉を施し、口縁部に緑釉を流し掛けする。時期は明治時代後半である。7は瓶である。外面に草花が絵付けされる。出雲塩谷焼系で時期は明治時代前半である。8は石見焼の擂鉢。内外面を来待釉で施釉する。9が攪乱土坑2、10は攪乱土坑3から出土した。



第7図 調査区西壁土層断面図



第8図 旧水田に伴う杭列・埋設桶実測図



第9図 埋設桶・攪乱土坑出土遺物実測図

9は肥前系磁器で、外面に絵、内面に圈線が描かれる。10は肥前系の鉢。内外面に施された鉄釉のうえに白土がみられる。高台はケズリ調整する。

2. 柱穴群（第10図～第17図）

A1・A2・B1・B2 グリッドで柱穴を100基あまり検出した。柱穴の分布範囲は大きくふたつに分かれ。ひとつはSD04西側、標高20.6～20.8mの高まりに広がるものである。SD04に平行するように南北方向に並ぶ。小型で浅い柱穴が多い。いまひとつは、A1・A2 グリッドとB2 グリッドの西半、標高20.0～20.2 mの緩斜面に広がるものである。このなかには、南北方向に柱筋が通るものもみられる。建物跡は調査区の西側にむけて広がっていると考えられる。

柱穴の規模は直径30～40cm、深さは30～60cmである。なかにはピット13のように深いものもみられた（第11図）。埋土は黒褐色土系（第1・2層）と灰褐色土系（第3・4・9層）、黄褐色土系（第5～8・10層）に大別される。遺物が出土した柱穴の埋土から、灰褐色土・黄褐色土系が中世と考えられる。柱穴からは土師器、白磁、備前焼などが出土している（第16図・第17図）。

柱穴出土遺物（第17図）

1・2はピット06から出土した土師器壺である。2は体部が逆ハ字に開く。3・4はピット17から出土した。3は白磁碗で16世紀代、4は土師器の壺である。5はピット70から出土した土師器壺である。6はピット36から出土した土師器壺。7はピット80から出土した柱状高台付きの皿。8はピット19から出土した備前焼の甕である。9はピット78から出土した須恵器である。このほかピット98から磁器片が1点出土している（観察表No.1）。

3. 土坑（第18図・第19図）

SK01（第18図） A2 グリッドに位置する。平面は橢円形をしている。規模は東西1.2m、南北0.6m、深さ65cm前後である。埋土は二層に分かれ。埋土から土師器と肥前系磁器の小片が出土している。

SK01出土遺物（第19図） 1は肥前系磁器である。口縁内面に圈線を二条施し、外面には草花文が染付されている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。

SK02（第18図） B2 グリッドに位置する。SD04の西掘り方と重複し、SD04より新しい（第22図）。平面は長方形をしている。規模は南北1.8m、東西0.9m、深さ36～46cmである。底面は平坦で、西掘り方は抉れている。埋土から土師器の小片が1点出土した。

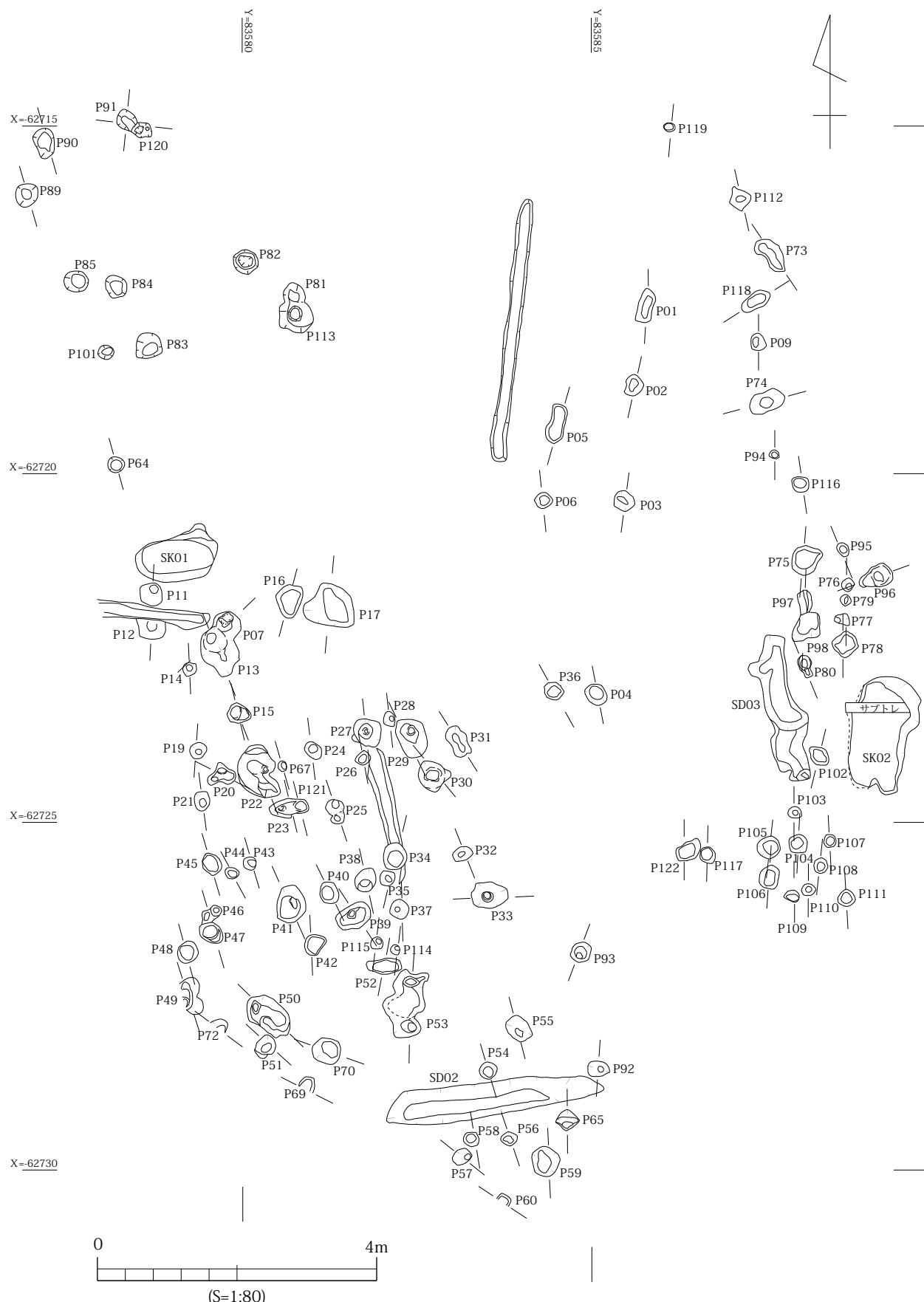
3. 溝状遺構（第20図～第24図）

溝状遺構は4条検出した。このほかにも近代以降の開発に伴う溝が複数みられた。

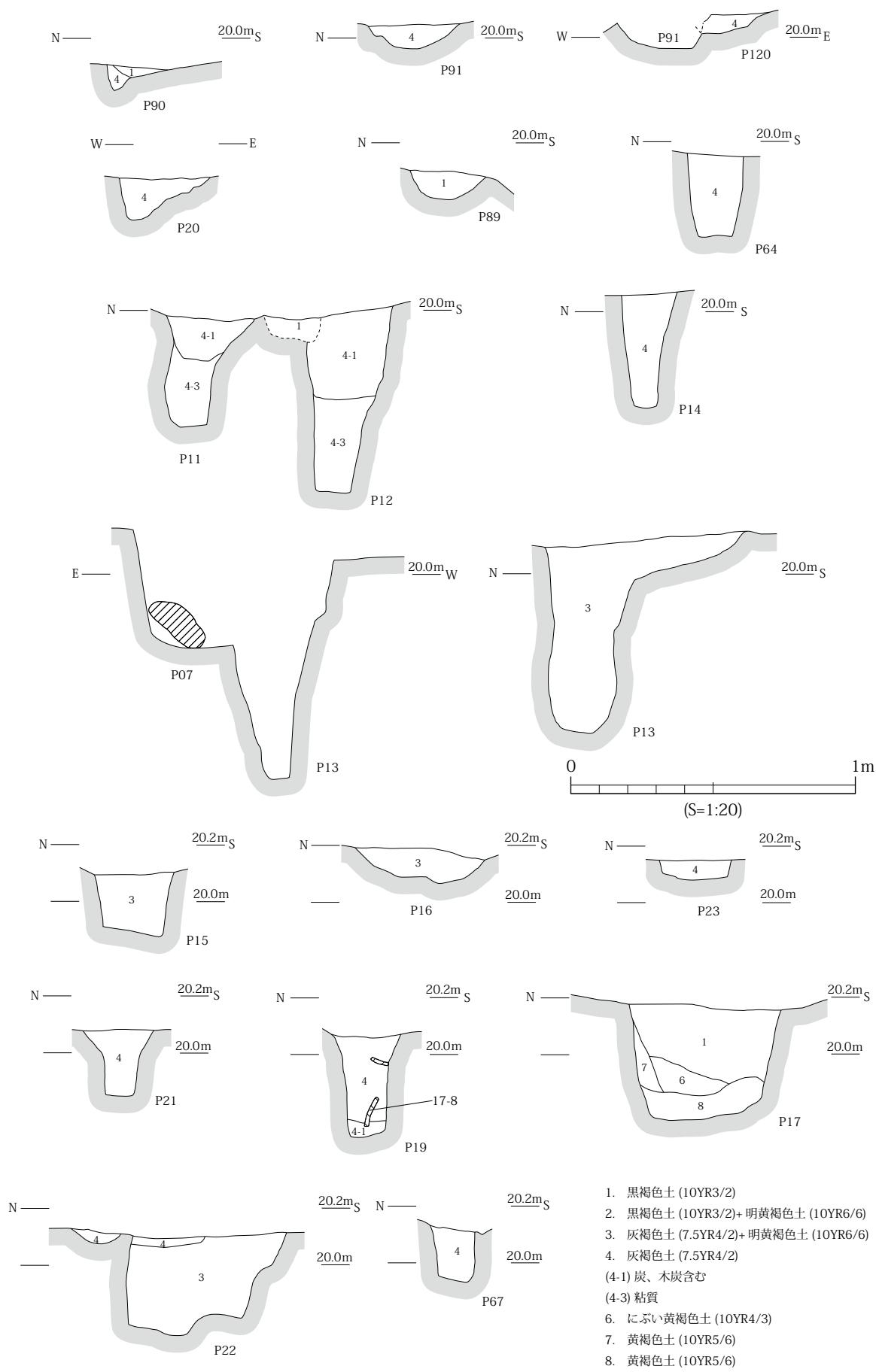
SD01（第20図） B2・B3 グリッドに位置する。等高線と直交して南北方向に主軸をもつ。B3 グリッドの3ラインあたりが北端である。南端は調査区南辺でさらに南に延びている。北端は近代の桶・電線支柱埋設坑と重複する。長さ4.2m以上、最大幅1.95m、深さ52cmである。横断面は箱形をしている。底面は北から南にむけて傾斜している。埋土は二層からなり、遺物は出土していない。

SD02（第21図） B2 グリッドに位置する。東西方向に主軸をもつ。長さ3.0m、幅40～48cm、深さは3～8cmである。

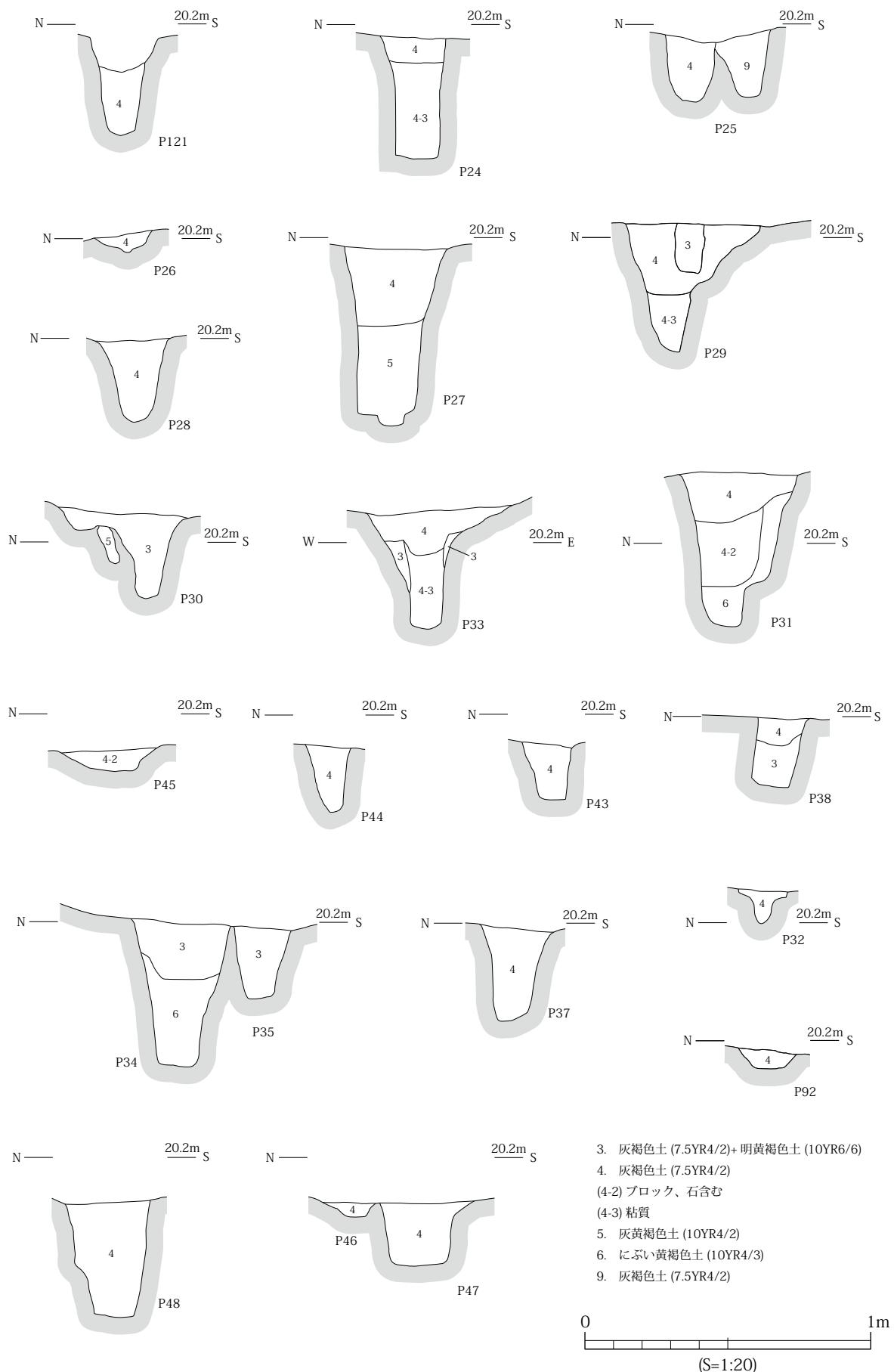
SD03（第21図） B2 グリッドに位置し、SK02・SD04の西側にある。南北方向に主軸をもつ。長



第 10 図 柱穴群平面図



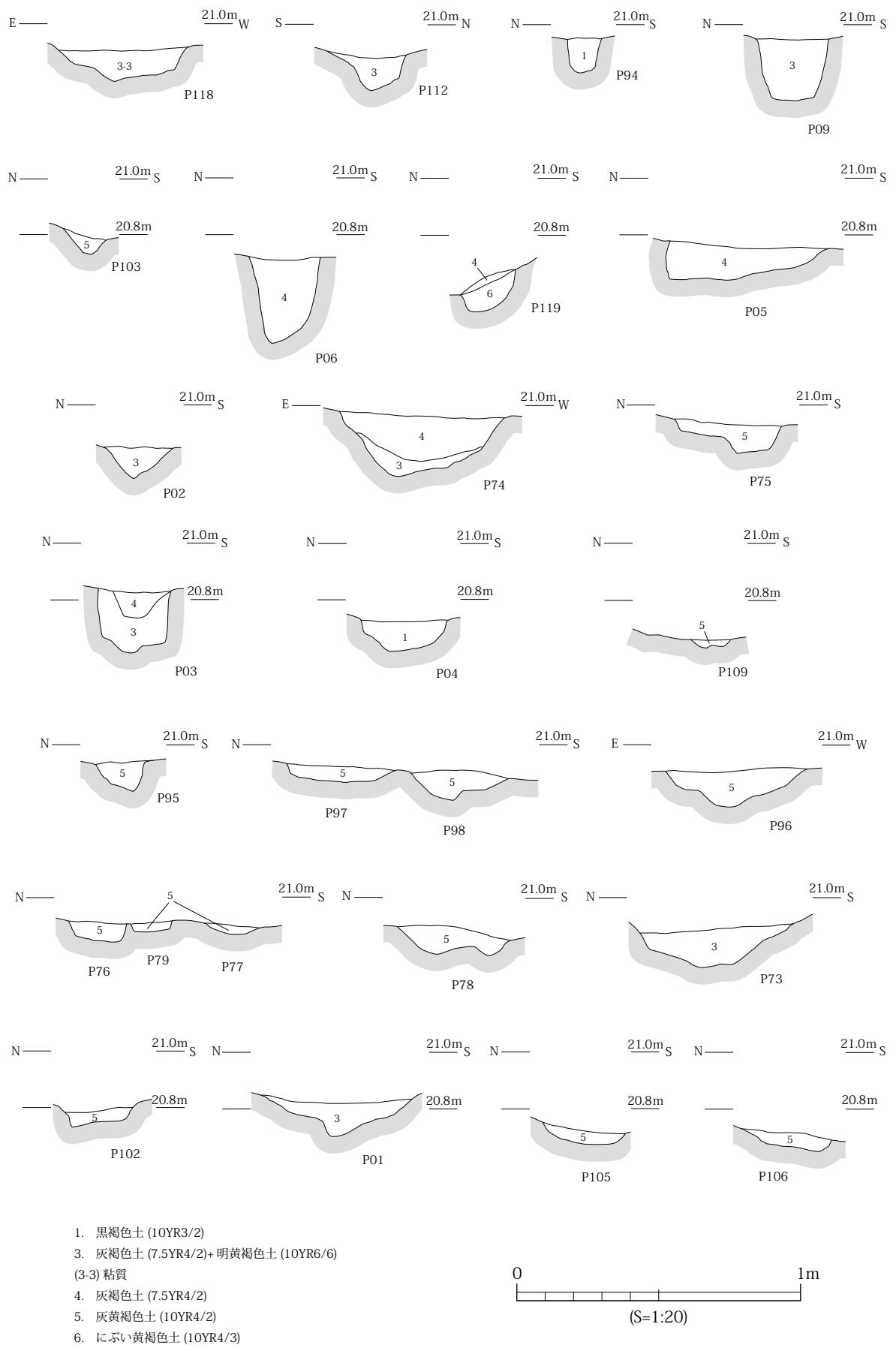
第11図 ピット土層断面図（1）



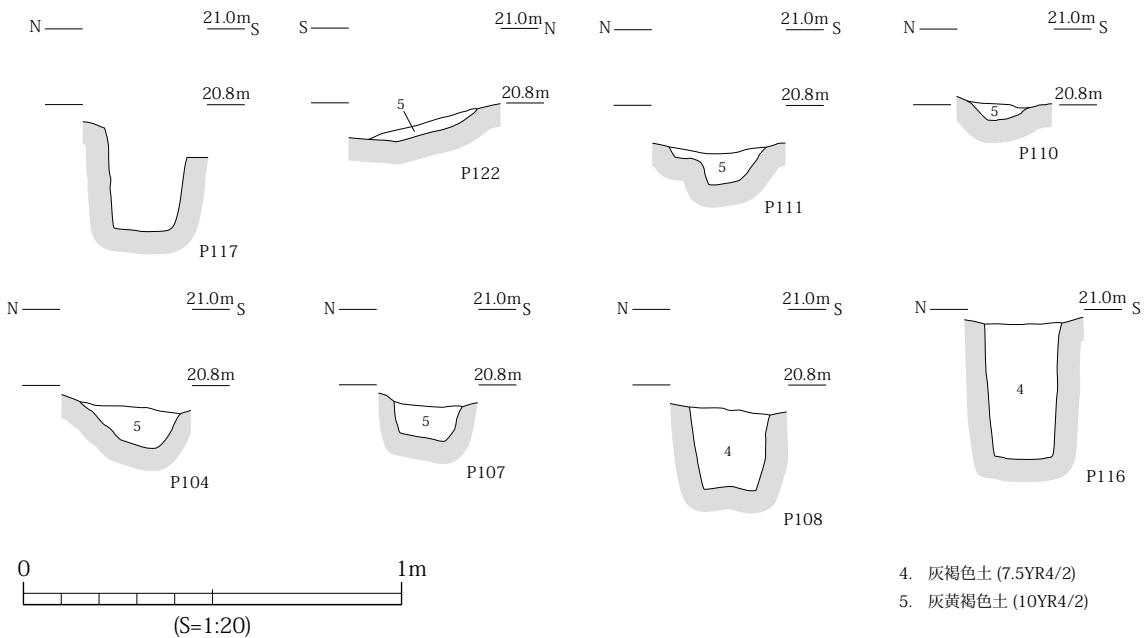
第12図 ピット土層断面図 (2)



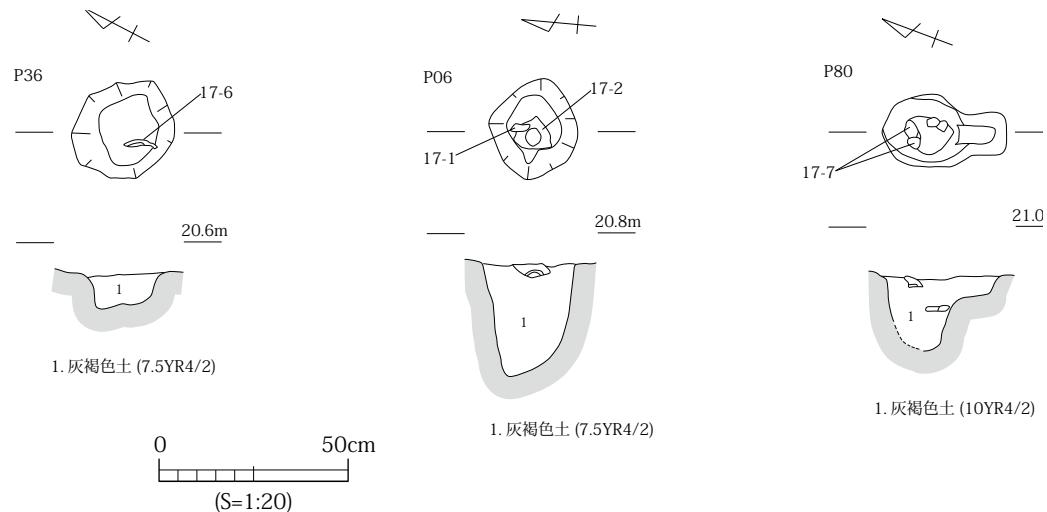
第13図 ピット土層断面図（3）



第14図 ピット土層断面図 (4)



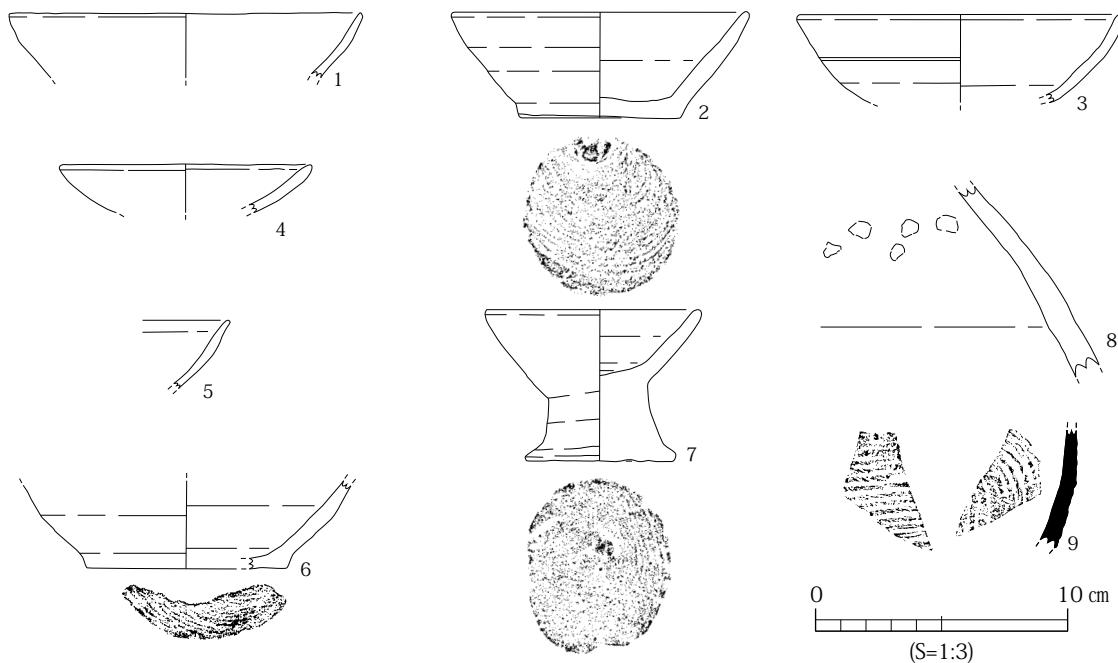
第15図 ピット土層断面図（5）



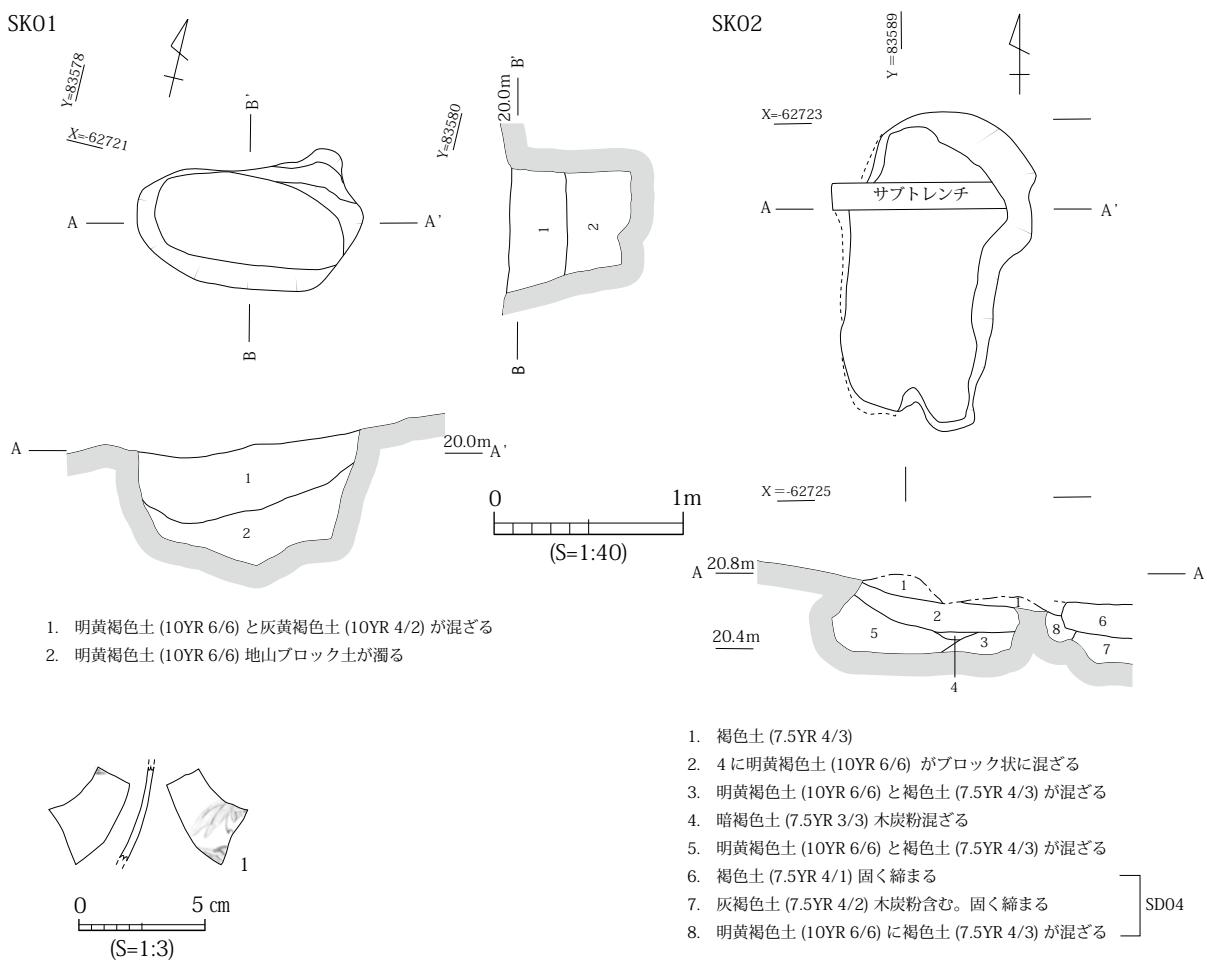
第16図 ピット内遺物出土状況図

さ 2.1m、幅 40～50cm、深さは 10cm 前後である。平面形がいびつで、底面は凸凹していることから、耕作等に伴う攪乱の可能性もある。

SD04（第22図～第24図） B1・C1・B2・C2 グリッドに位置する。溝の平面は鍵形をしている。西掘り形の南端は X = - 62728あたりから始まっている。東掘り形はさらに南に延びているが、電線支柱のため調査できなかった。約 3m 南にある攪乱土坑 1～3 の上面が溝の底面よりも高いことから、これより南に延びることはない。南端はおよそ X = - 62730 までの間と推定される。溝は調査区に沿って北に延び、X = - 62717 あたりで西に折れ曲がる。東掘り形は調査区外へと続くが（第6図）、西掘り形は標高 20.4 m付近で無くなる（第4図）。ここから西は緩やかな斜面となっている。



第17図 ピット出土遺物実測図



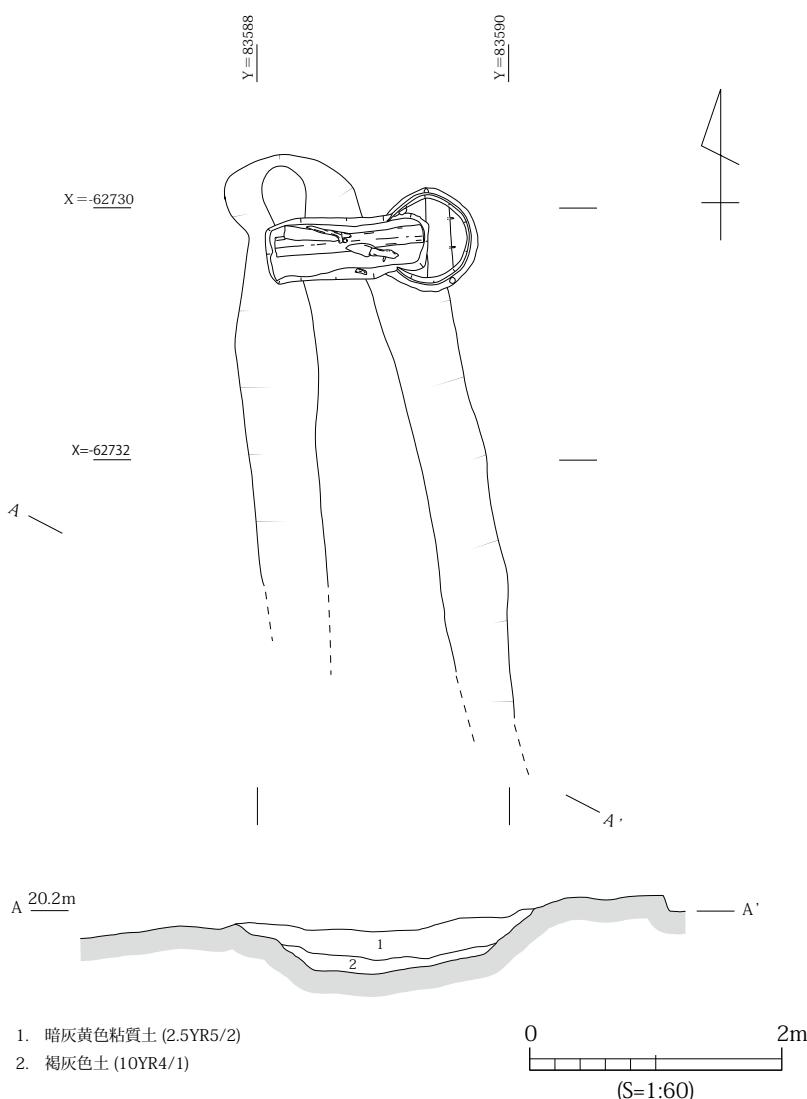
第19図 SK01
出土遺物実測図

第18図 SK01・SK02 平面図・土層断面図

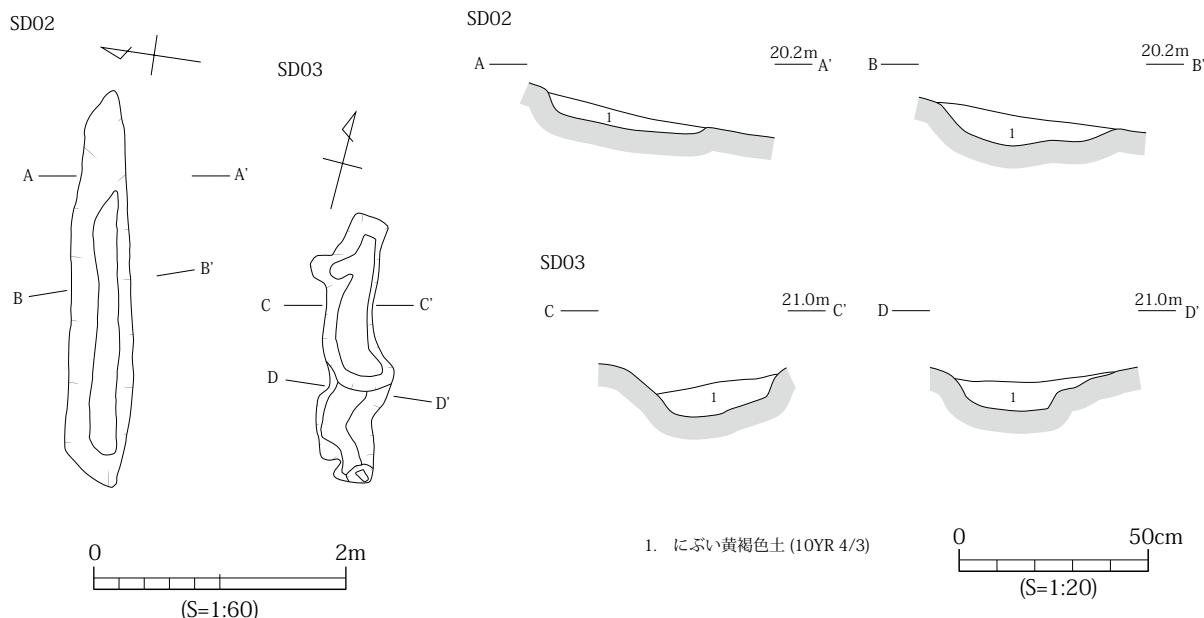
溝は谷地形へ自然に取りついていたものと推定される。

溝の延長距離は約19mである。規模は中央（第23図Cライン）で上端幅約4.5m、下面幅3.77m、深さ75cmである。西（谷）側に折れ曲がるあたりから狭くなり、上面幅3.18m、下面幅2.0m、深さ50cmになる。横断面は箱形から浅いU字形をしている。底面には堅いマンガンバンドが広がる。底面の標高は20.3～20.5mである。

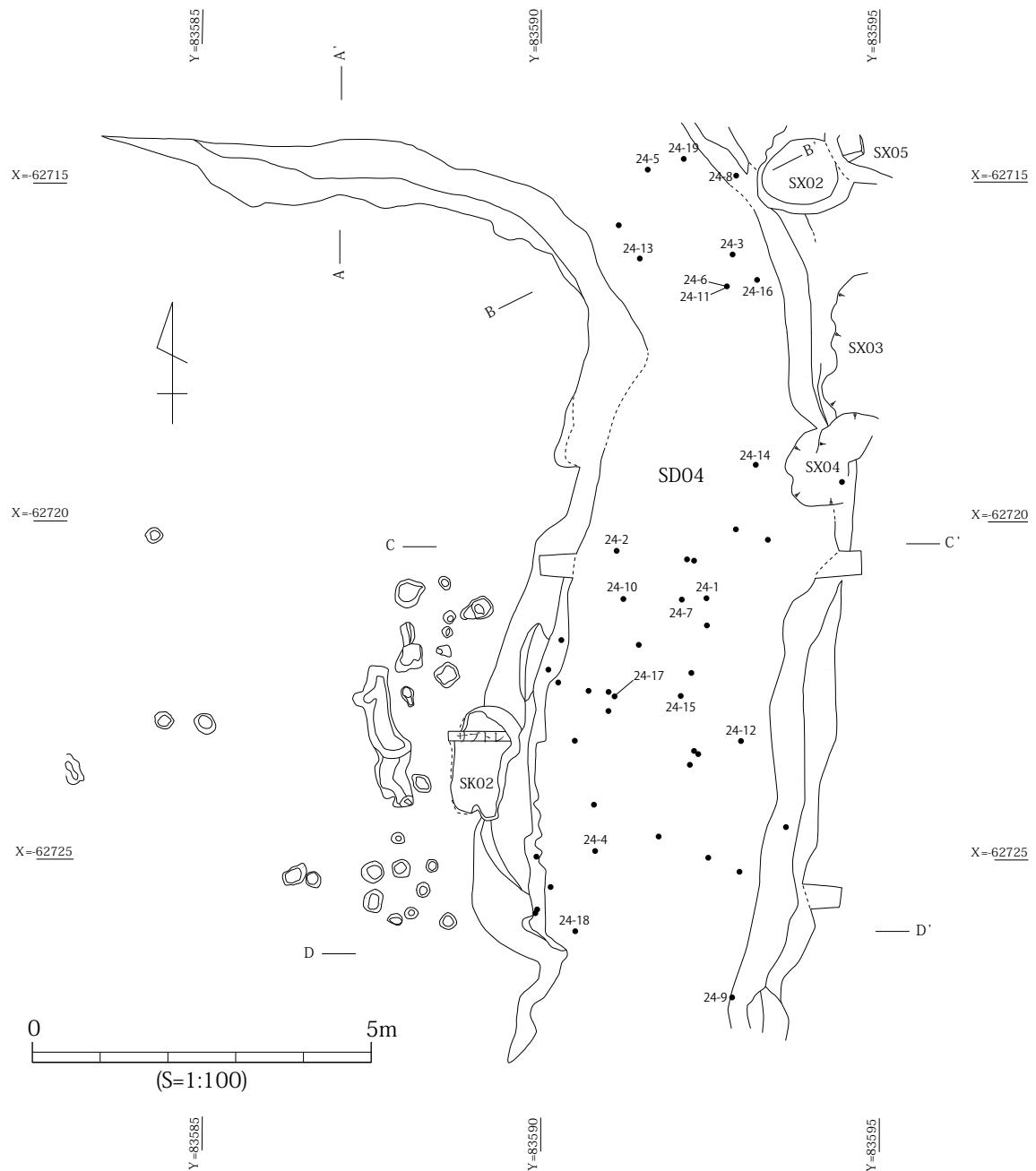
埋土は次のように大別される（第23図Cライン）。上層から①皿状に堆積する黒褐色土系（4・5・7層等）、②西から東に傾斜する褐色土系（8～10層）、③西掘り形沿いにみられる堅く



第20図 SD01 平面図・土層断面図



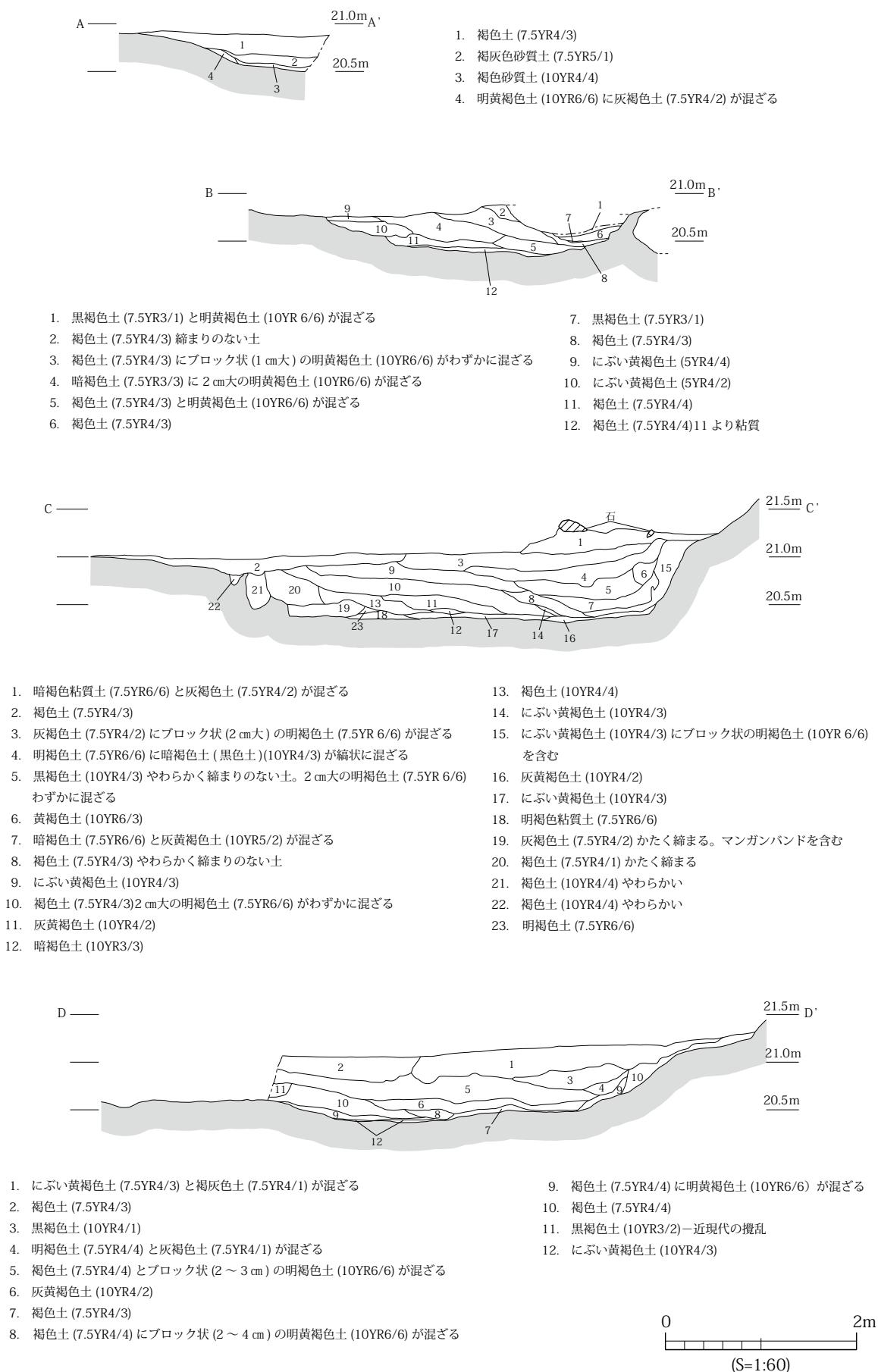
第21図 SD02・SD03 平面図・土層断面図



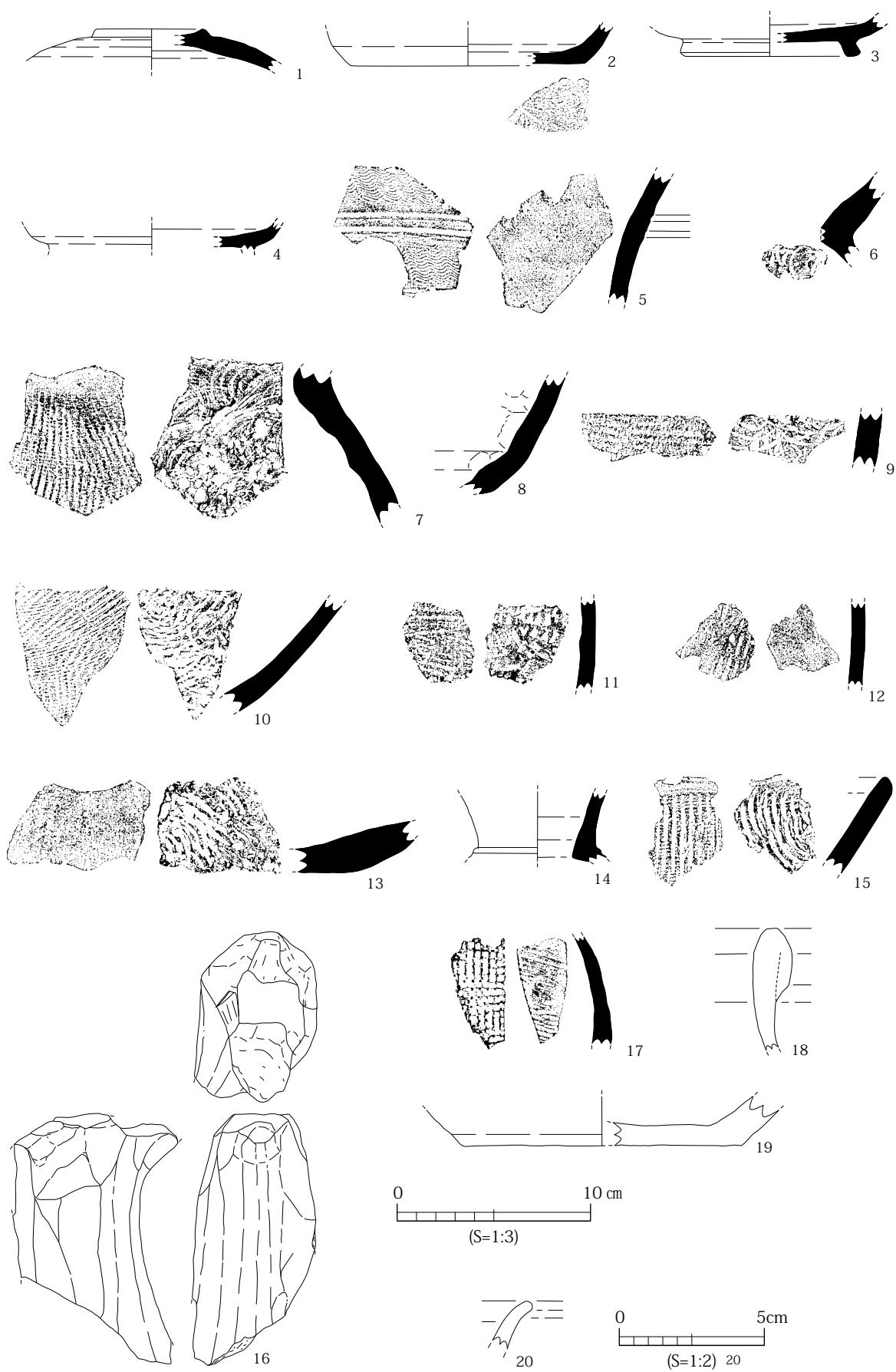
第22図 SD04 平面図

締まった層（19・20層等）、④底面を覆う薄い水平堆積層（16・17層）、である。①は東掘り形に沿つて南北方向に広がっていた。SD04 最終段階の埋土と思われる。SD04 は②によって埋められ、幅 1.1 ~ 1.3m の小溝として使われたと考えられる。③は C ラインから D ラインの間で、西掘り形に沿つてみられた。②と同様に人為的に溝を埋めたものだが、②に較べて③はひじょうに堅くしまっていた。19・20層の上面が SD04 中段階の掘り形であった可能性も考えられる。

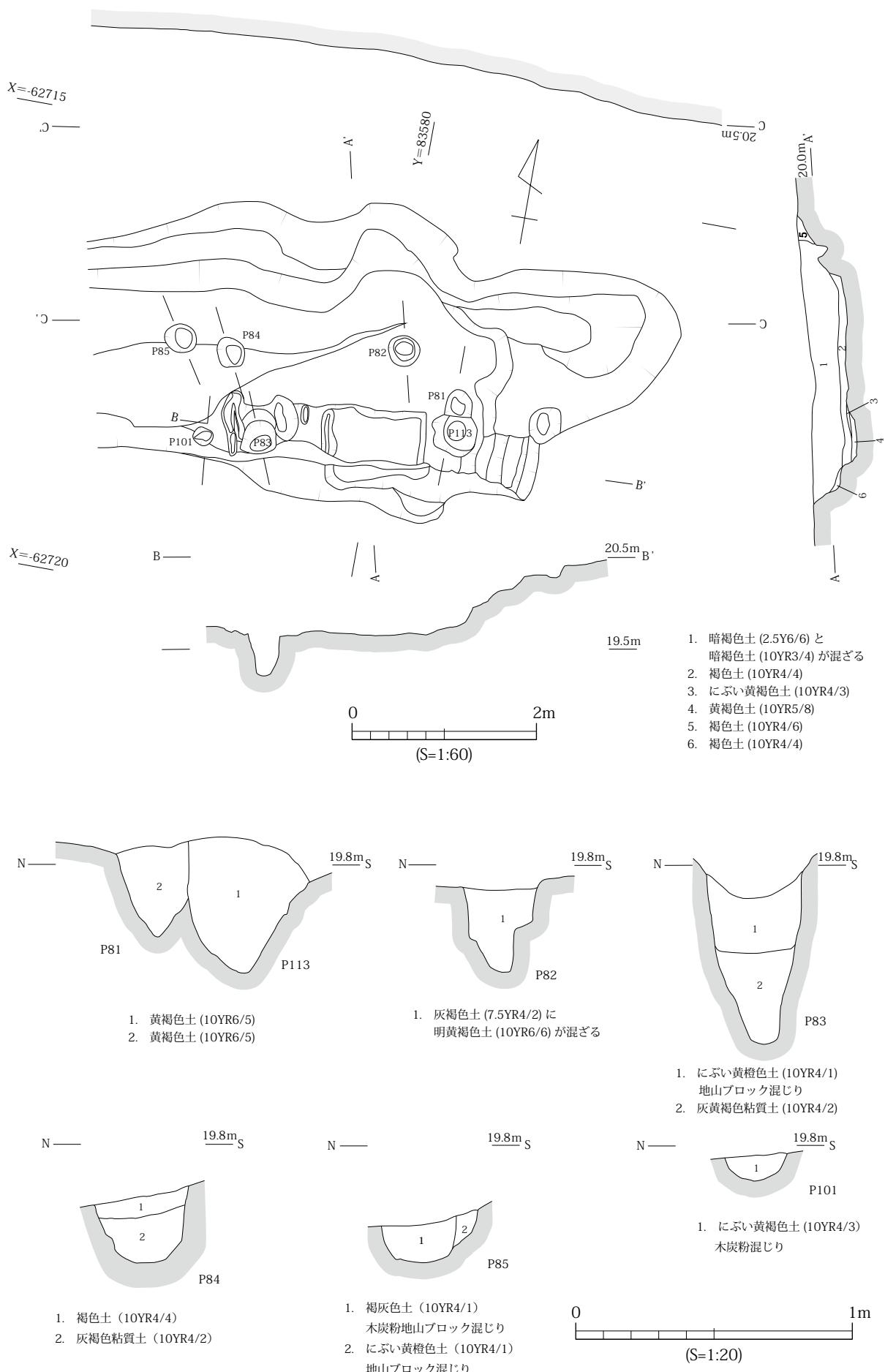
遺物の出土状況は第22図のとおりである。古墳時代・奈良時代の須恵器や土製支脚のほか、中世の陶磁器類が出土している。このうち中世土器が出土した層位は次のとおりである。B ライン 8 層から鉢（第24図19）、C ライン 13 層から中世須恵器（第24図17）、20 層から備前焼（観察表No.2）



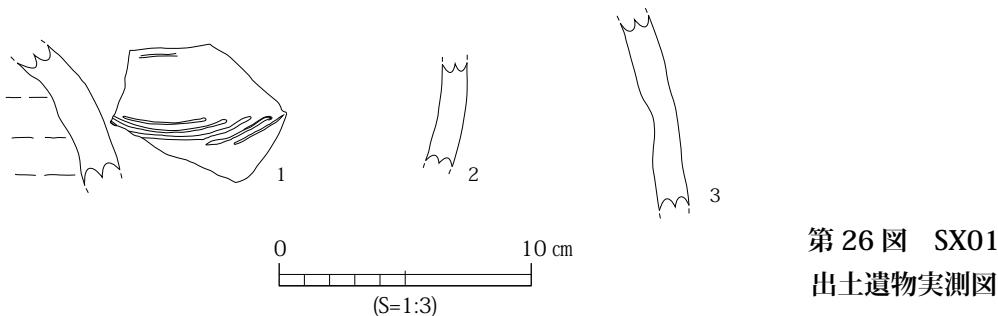
第23図 SD04 土層断面図



第24図 SD04 出土遺物実測図



第25図 SX01 平面図・土層断面図



第26図 SX01
出土遺物実測図

が出土している。またCライン19層から青磁（第24図20）、C-D間の埋土④から白磁皿（観察表No.4）が出土している。さらにDライン10層から備前焼甕（観察表No.3）、同12層から備前焼甕（第24図18）が出土している。

SD04 出土遺物（第24図） 1～15は須恵器である。1は輪状つまみの付く坏蓋。2～4は坏身で、3・4は高台がつく。4は内面が摩耗しており、転用硯と思われる。5～14は壺甕類である。5は甕の口縁部で沈線二条と波状文を有する。15は鉢の口縁部である。16は土製支脚で三方に突起が付く。17～19は中世土器である。17は中世須恵器で外面に格子タタキ、内面をハケ調整する。18は備前焼の甕で、口縁端部を折り曲げ肥厚させている。備前焼はほかに2点出土している（観察表No.2・No.3）。19は土師質をした産地不明の鉢。内面は使用により摩耗している。20は青磁碗の口縁部。時期は14～15世紀。このほかに白磁皿E群の破片が出土している（観察表No.4）。

出土遺物の様相からSD04は15～16世紀代に相当すると考えられる。遺構の性格は明確でないが、西側に当該期の柱穴群が展開することから、敷地の区画を目的とした溝と推定される。

4. そのほかの遺構（第22図・第25図・第26図）

SX01（第25図） 調査区北西端、A1・B1グリッドに位置する。平面は不整な長楕円形をしている。SD01と形態がよく似ているが、階段状の遺構を伴うことから溝ではなく性格不明とした。等高線と直交して東西方向に主軸をもつ。西端は調査区外へ延びている。規模は長さ6.46m、幅2.2～3.5m、深さ50cm前後である。底面は東から西に向けて緩やかに傾斜する。南掘り方に沿って幅60cm前後の階段状の削り出しがある。埋土は大きく二層からなり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土中からは備前焼・土師器の小片が出土している。第1層がSK01と同じで、地山のマンガンバンドを壊して掘りこまれていることからも、近世後期から近代の遺構と推定される。

SX01 出土遺物（第26図） 1～3は備前焼である。1は外面に櫛目波状文があがる。備前焼はもう1点出土している（観察表No.5）。

SX02～05（第22図） C1グリッドのSD04東掘り形と重複して、攪乱と思われる土坑4基を検出している。いずれも遺物が出土していないため時期は不明である。

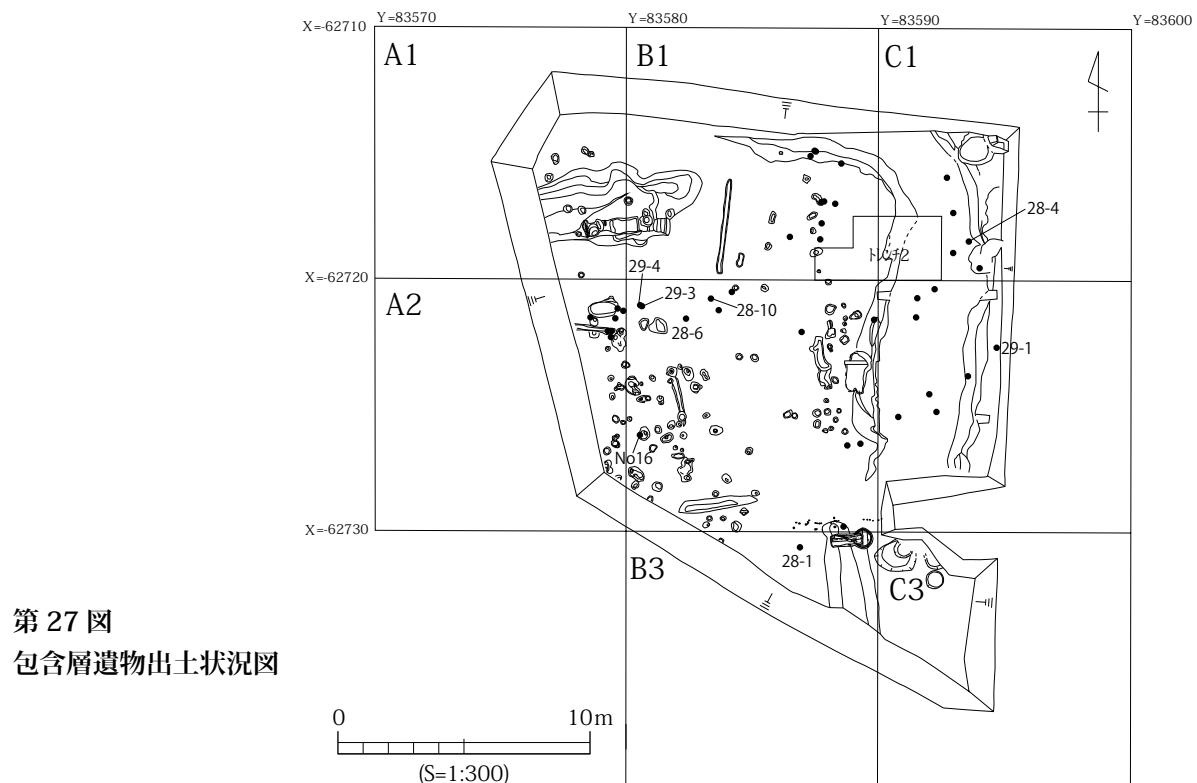
第3節 包含層の調査

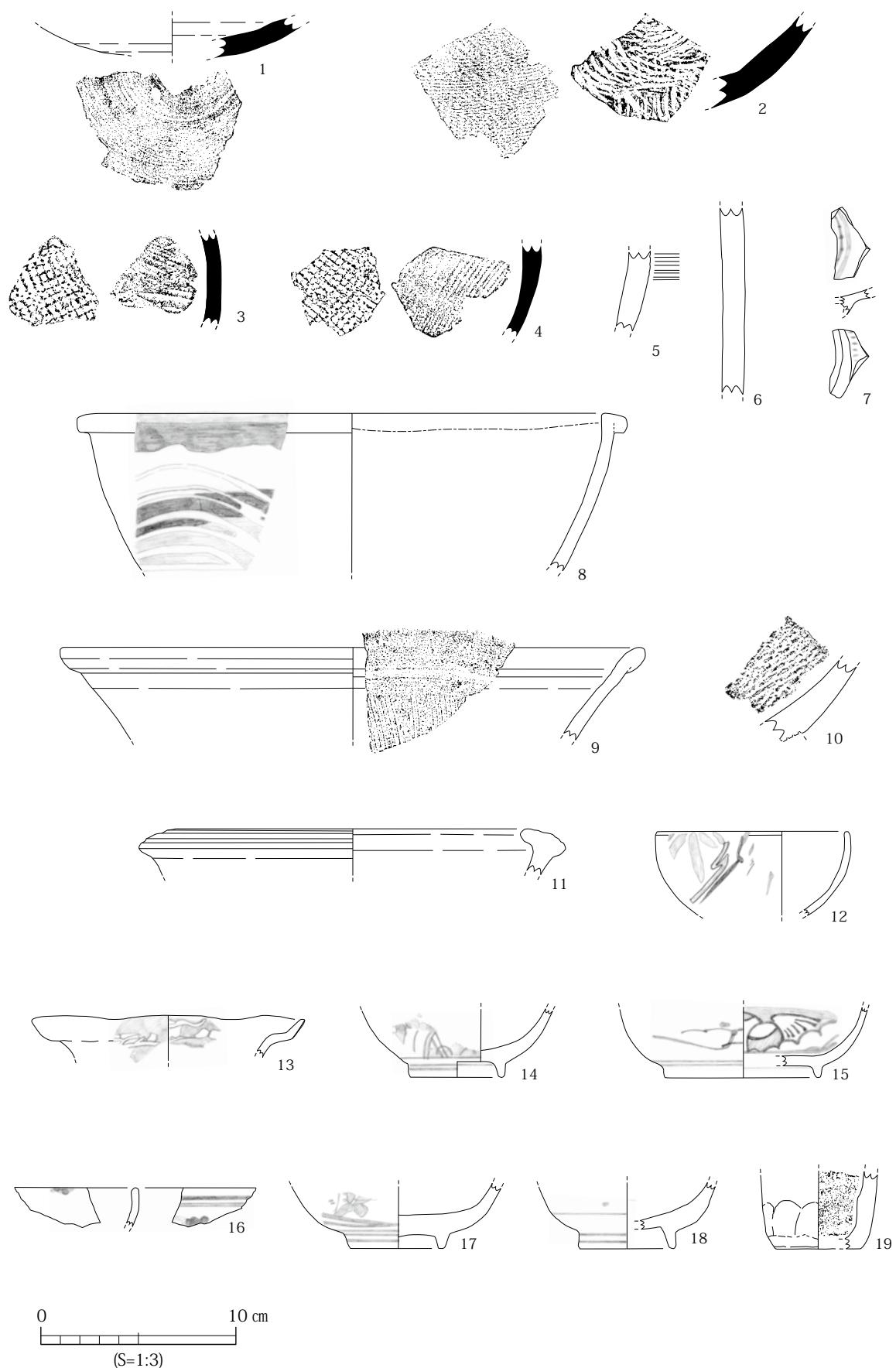
古代から近現代の遺物が、調査区西半の造成土などから混在して出土している。ここでは、トレント2で出土した遺物を含め、遺構に伴わない遺物を取り上げる（第27図）。

包含層出土遺物（第28図～第29図）

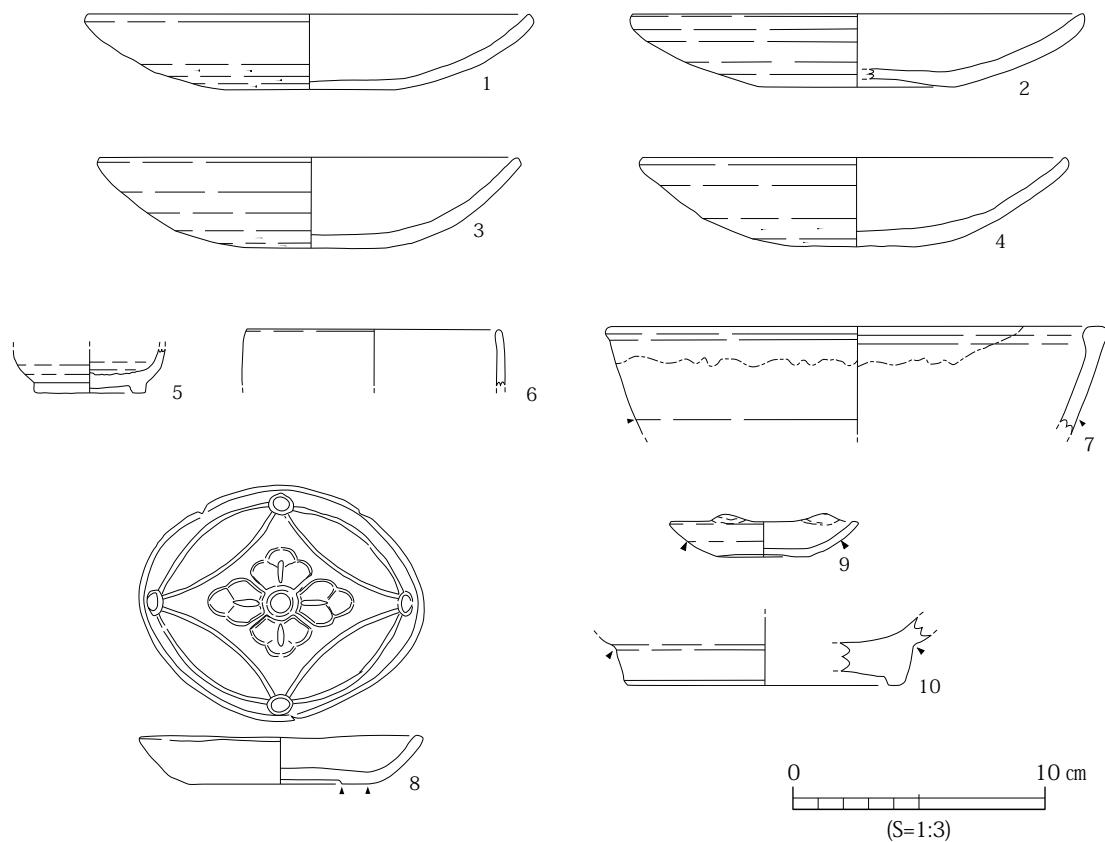
第28図1・2は須恵器で、1は高環、2は甕である。3・4は中世須恵器で、いずれも外面に格子タタキ、内面をハケ調整する。ほかにも中世須恵器は2点出土している（観察表No.6・No.7）。5・6は備前焼の甕。5は外面に凹線をめぐらす。このほかに備前焼は7点出土している（観察表No.8～No.13・No.15）。7は中国青花の碗C群である。貿易陶磁は龍泉窯系青磁皿D類（観察表No.16）、白磁坏蓋D群（同No.17）、白磁皿（同No.14）も出土している。8～11は肥前系陶器である。8は片口鉢。口縁部は「く」字状に外反する。内外面に鉄釉、外面には白化粧を施している。時期は17世紀後半から18世紀前半である。12は京都・信楽系の丸形碗。内外面とも施釉され、外面には文様が描かれている。13は萩焼のびらかけの鉢である。14・15は肥前系磁器である。14は碗で、外面に草花文が描かれ、その直下に一条の圈線が施されている。高台外面に二条、内面に一条の圈線が施される。15は皿で、内外面に絵付け、高台に二条、高台内に一条の圈線が施される。16～18は陶胎染付である。19は焼塩壺である。B2グリッドの造成土中から出土した。口縁部から胴部上半を欠く。底径4.4cm、胴部径6.7cmである。内面には型押し時の布目痕がみられる。

第29図1～5は土師器である。1～4は皿で、大きさは口径16.6～17.8cm、器高2.9～3.6cmである。底部外面をヘラケズリする。法量と形態的特徴が共通している。出土地点も1の付近から2が、





第28図 包含層出土遺物実測図（1）

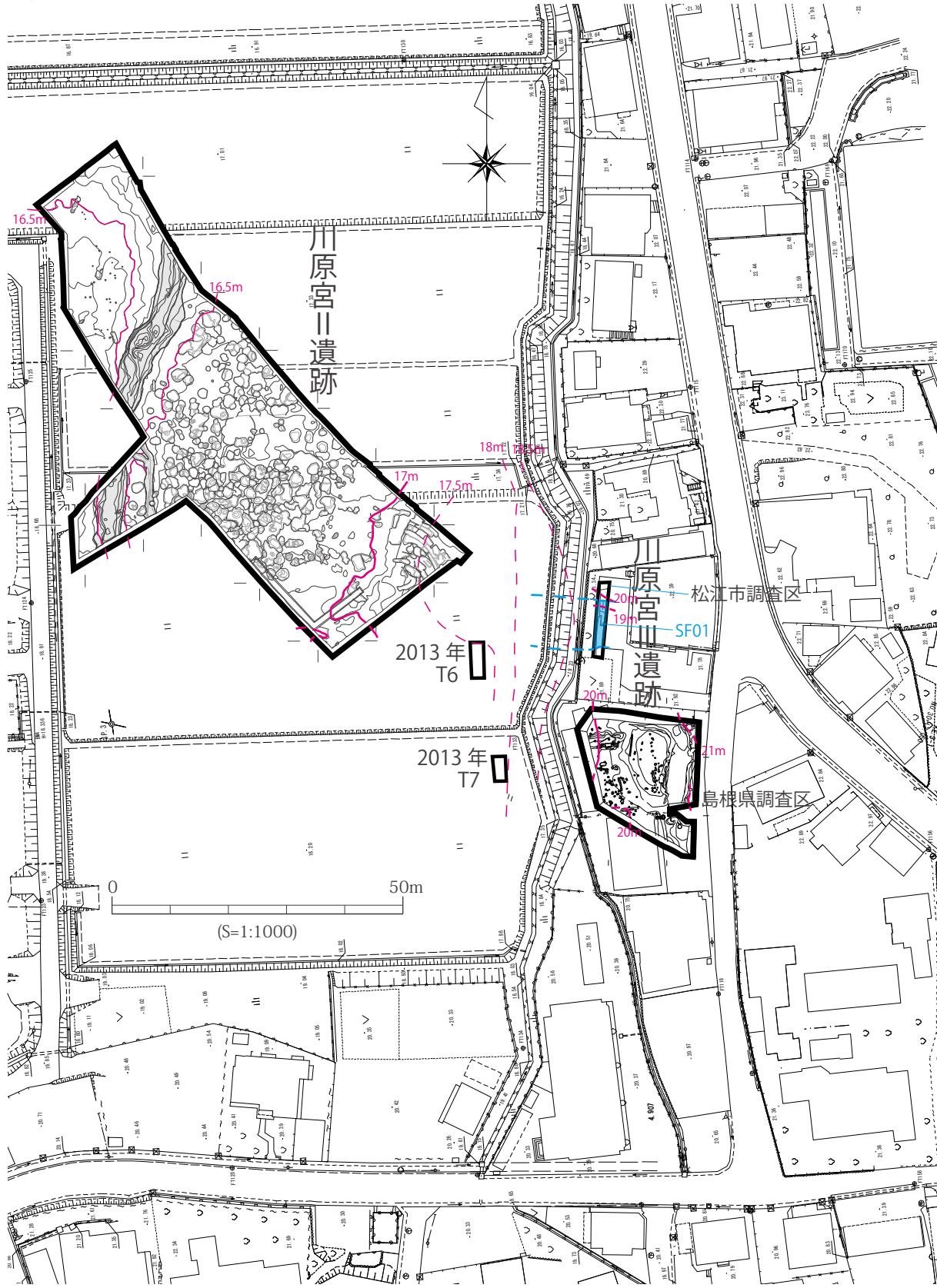


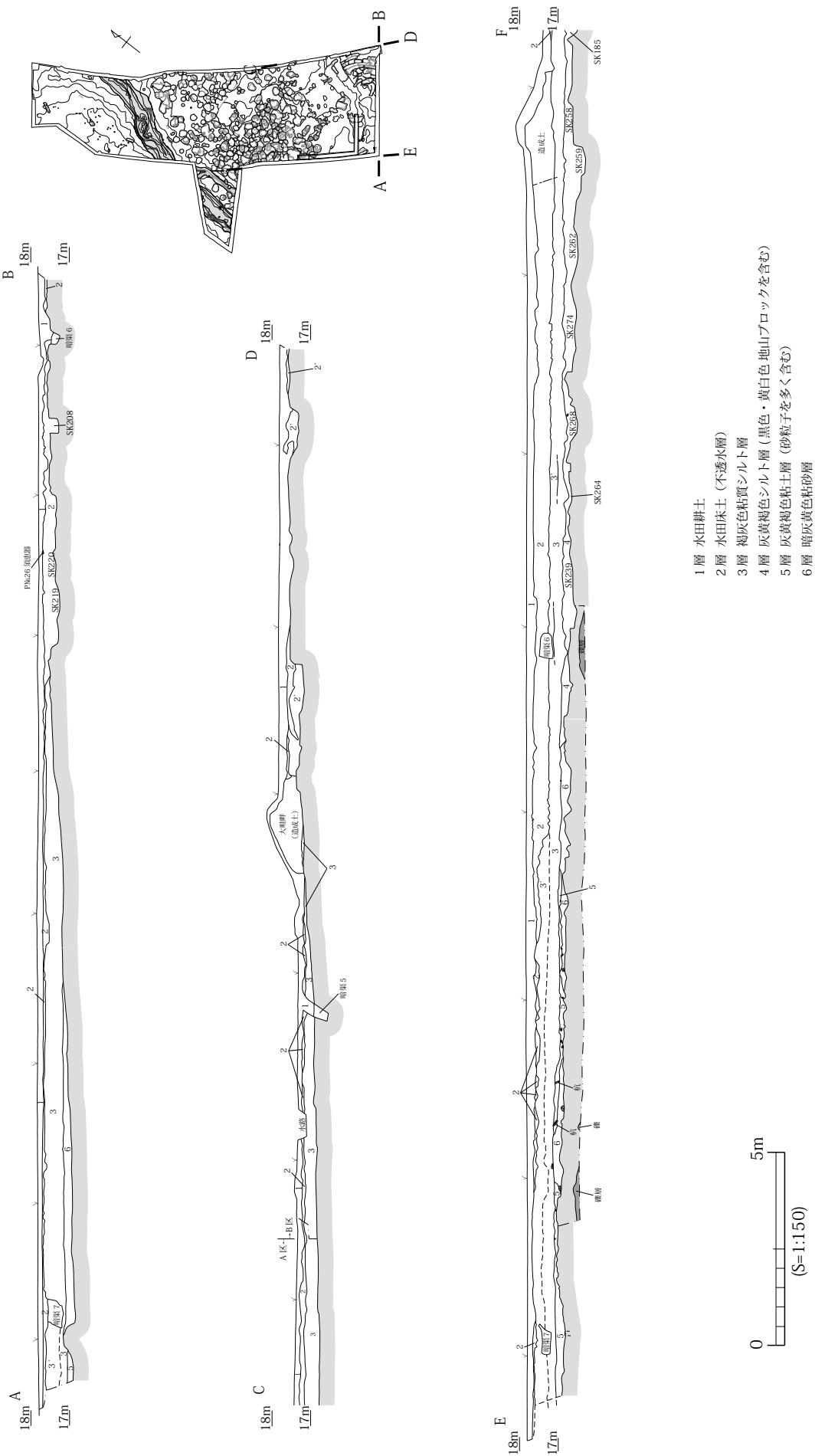
第29図 包含層出土遺物実測図（2）

3の直下から4が出土している（第27図）。1と2、3と4はそれぞれセット関係にあり、合わせ口にして用いられたものと考えられる。5は高台付きの椀である。6～9は布志名焼の陶器である。6は「ぼてぼて茶碗」で灰釉が施釉されている。江戸時代末から明治時代初頭である。7はトレンチ2から出土している。鉢で口縁部に白釉が流し掛けられている。時期は19世紀前半である。8・9は皿である。8は押型成形で、内面に文様が表現されている。時期は明治時代前半である。10は鉢の底部で在地産かと思われる。

第4章 総括

発掘調査の結果、15～16世紀の溝状遺構と柱穴群や18世紀後半から19世紀前半の土坑など、中近世の集落跡を確認することができた。古代の遺構は検出されず、若干の遺物が出土したのみである。





第31図 川原宮II遺跡土層断面図

最初に、今回の調査と川原宮II遺跡、試掘確認調査の成果をもとに、遺跡の立地を確認しておきたい。

川原宮III遺跡は南北に広がる谷地形に面している。現在は、谷地形とのあいだが急な法面となり、法面の裾に沿って南北方向に水路が流れている。今回の調査では、遺構面は1.4m以上におよぶ盛り土下で検出された。現地形は、宅地造成にともなう盛り土（嵩上げ）と谷の埋め立てによるもので、もともとは台地裾に向けてなだらかな斜面が続いていたことがわかる（第30図）。

つぎに各時代の様相を整理しておきたい。

第1節 古代の川原宮III遺跡（第30・31図）

当該期の遺構は検出されていない。須恵器の転用硯が1点出土しており、周辺に官衙施設が存在したと推定される。松江市調査区から古代の道路遺構（SF01）が検出されている（第30図）¹。道路遺構は切り通し状の東西道で、下端幅は約5.0mある。路床からは波板状凹凸面が検出されている。この道路遺構を西側に延長すると、川原宮II遺跡の南端あたりを通る（第30図）。同遺跡では、平安時代末から鎌倉時代を中心とする粘土採掘坑が300基ほど確認された。こうした著しい改変により、道路遺構は壊されたものと推測される（第31図）²。



写真1 川原宮II・III遺跡近景（2014年撮影上空：北西から）

第2節 中世の川原宮Ⅲ遺跡（第32～34図）

15～16世紀の溝状遺構SD04と柱穴群が検出されており、集落(屋敷)が営まれていたようである。

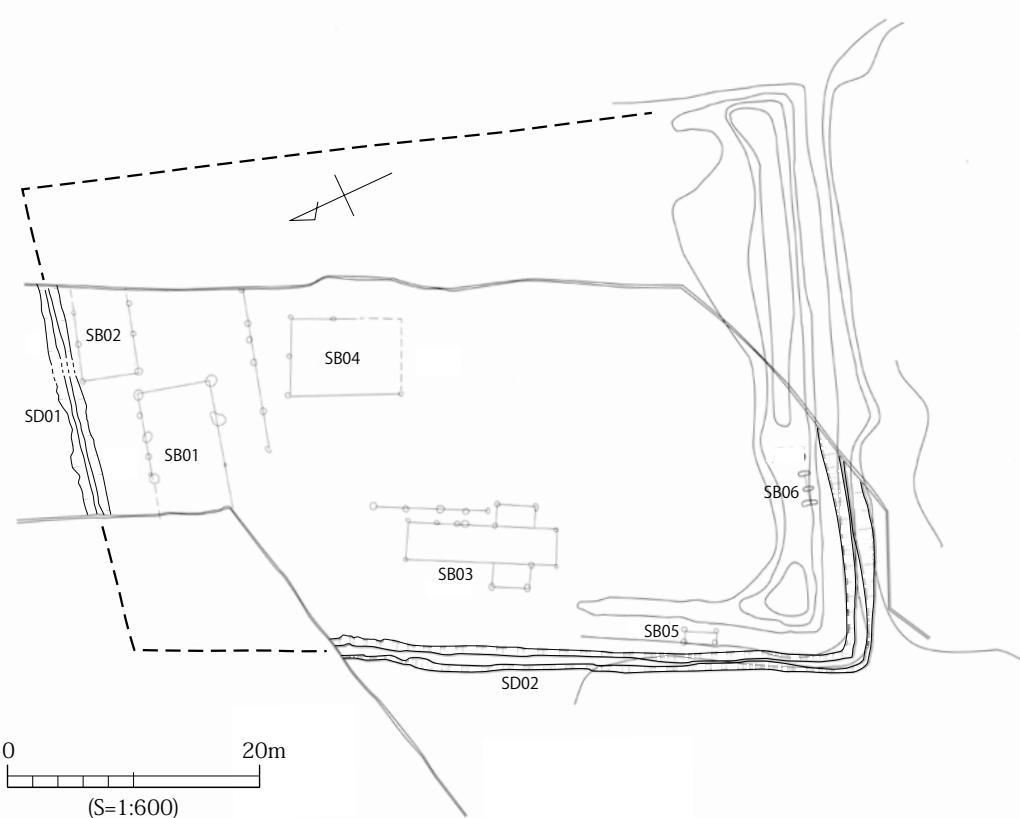
1. 遺跡周辺の中世遺跡

茶臼山南西麓には、中世の遺跡が数多く分布している（第32図）。茶臼山には、室町時代の山城である茶臼山城跡が築かれている（第32図111）。その南西麓からは、市場遺跡（同22）、山代郷南新造院跡（同20）、寺の前遺跡（同18）で集落跡が確認されている。これらの遺跡から250m西には、四方を堀と土塁で囲んだ黒田館跡（同9）がある。そのほか内堀石塔群（同21）、三代宅角柱状石塔（同112）の中世石造物も所在している。台地の縁辺部では、山代郷正倉跡（同8）・同1992年調査区（同8-2）、大庭原ノ前遺跡（同4）が知られていたが、あらたに本遺跡にも当該期の集落が営まれていたことが確認された。いずれの調査も限定的だが、中世集落が台地上にひろく展開していたことをうかがい知ることができる³。



1 川原宮Ⅲ遺跡	7 大庭植松遺跡	14 団原Ⅲ遺跡	21 内堀石塔群	111 茶臼山城跡
3 川原宮Ⅱ遺跡	8 山代郷正倉跡	15 黒田畦遺跡	22 市場遺跡	112 三代宅角柱状石塔
4 大庭原ノ前遺跡	8-2 // 平成4年度調査区	16 小無田遺跡	24 光泉寺遺跡	
5 柳堀遺跡	8-3 // 第15・16調査区	18 寺の前遺跡	26 出雲国造館跡	
6 茶臼遺跡	9 黒田館跡	20 山代郷南新造院跡(四王寺跡)	41 外屋敷遺跡	

第32図 茶臼山南西麓の中世遺跡



第33図 黒田館跡平面図 (『黒田館跡』の附図を改変)



第34図 大庭原ノ前遺跡平面図 (『大庭原ノ前遺跡』の第38図調査区平面実測図を改変)

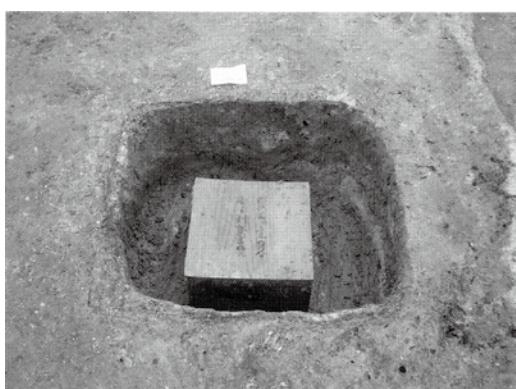
2. SD04 の機能

本遺跡の遺構でもっとも注目されるのが溝状遺構 SD04 である。周辺では、黒田館跡から同規模の溝跡が検出されている（第33図）。黒田館跡は北辺37.5m、南辺45m、東辺63.5m、西辺56mの規模を有する。堀（空堀）の規模は、上端1.6～2.5m、深さは0.9～1.3mある。SD04 も同程度の規模を有しているが、平面形は鍵状となっており、敷地全体を区画していない。SD04 の機能を考えるうえで時代は遡るが、大庭原ノ前遺跡（第32図4）の奈良・平安時代の溝 SD01 が注意される（第34図）。SD01 は、台地から緩斜面への傾斜変換に造られており、敷地の背面を仕切る排水溝と推定されている⁴。本遺跡も谷地形に面した台地の縁辺に位置しており、集落の背面を区画する溝（排水溝）の可能性も想定される。しかし、遺跡の西には谷地形が迫っており、広い敷地を確保することは難しい。主要施設が遺跡の東側に存在する可能性も考えられ、溝の性格は今後の課題といえる。

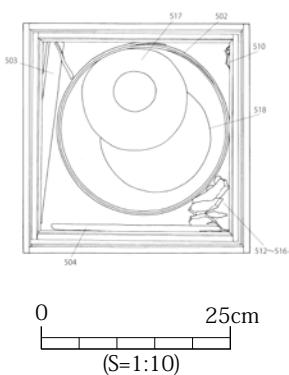
第3節 近世の川原宮III遺跡（第35・36図）

18世紀後半から19世紀前半の土坑1基SK01と性格不明の遺構SX01を検出している。柱穴群のなかには、当該期のものも含まれているものと思われる⁵。遺跡一帯は、ひきつづき屋敷地（一部は水田）として利用されていたものと推定される。遺物のなかで注目されるのが、土師器大皿⁶と焼

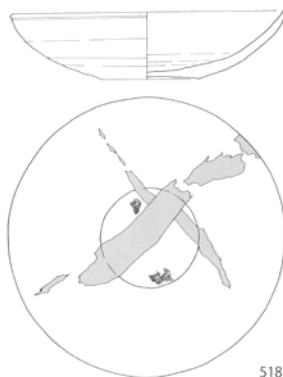
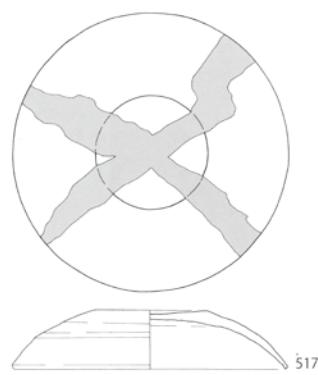
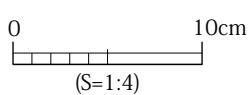
胞衣箱埋納坑（SK04）



胞衣箱内遺物出土状況図

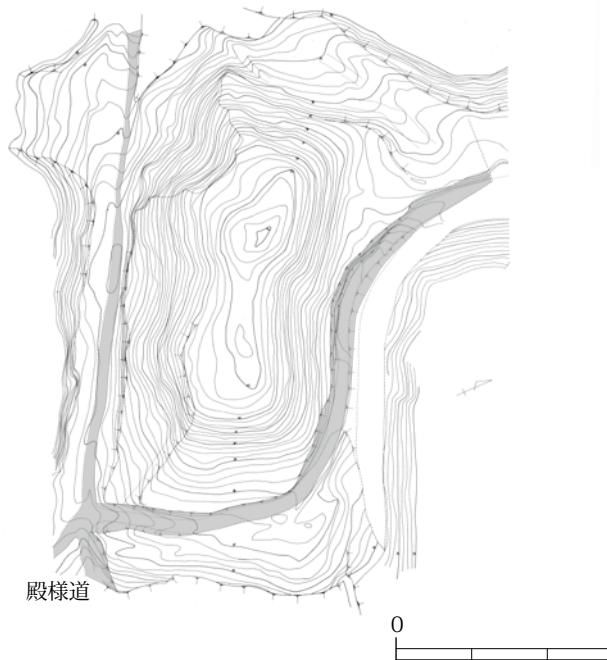


胞衣箱内出土遺物実測図



第35図 松江城下町遺跡・北屋敷（殿町279番地外）胞衣埋納遺構
（『松江城下町遺跡・北屋敷（殿町279番地外）』の第116図写真・第120図・第123図を改変）

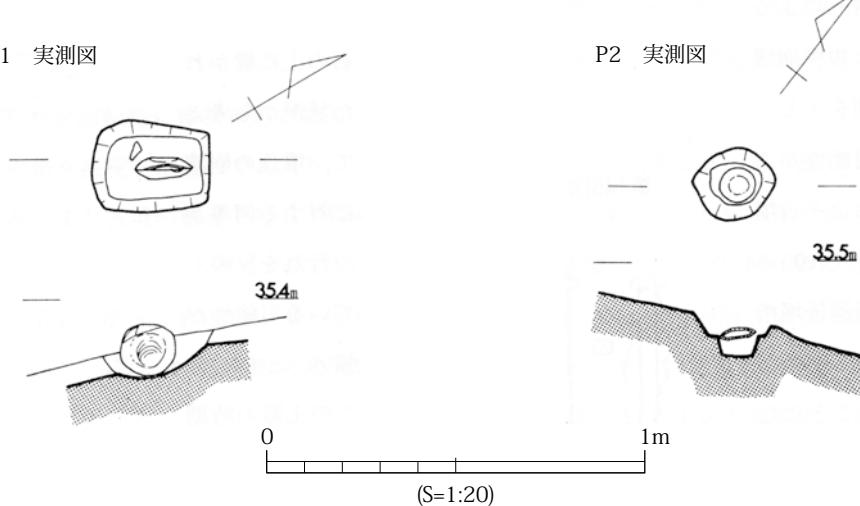
調査前地形測量図



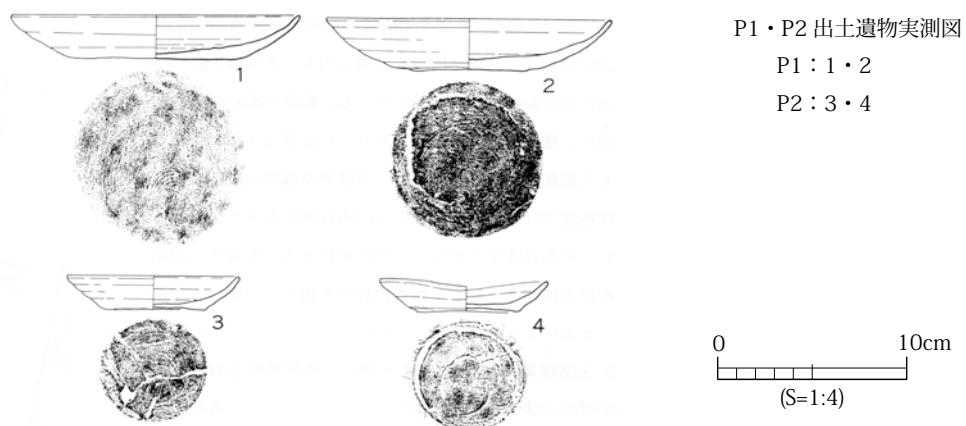
墳丘測量図及びP1・P2 検出地点



P1 実測図



P2 実測図



第36図 古曾志大谷1号墳・殿様道 土器埋納遺構

(『古曾志遺跡群』の第99図・第100図・第145図・第146図を改変)

塩壺である。

1. 土師器大皿（第29図1～4）

第29図1と2が道の近く、3と4は道から奥まった地点から出土した⁷。本遺跡の資料と似た特徴を持つものが、松江城下町遺跡（松江市殿町）⁸と古曾志大谷1号墳の通称「殿様道」（松江市古曾志町）⁹から出土している。前者は胞衣の埋納（胞衣皿）、後者は道の造成にかかわる祭祀に使用されている。

松江城下町遺跡の土師器大皿 家老屋敷跡から3組6点出土している。家老屋敷跡は、敷地が南北に分かれている。このうち北屋敷（殿町279番地外）で、10代藩主松平定安の八女、^{あきこ}鑑子の胞衣埋納遺構が検出されている（第35図）。一辺約70cmの方形土坑のなかに、明治3年（1870）の墨書がある胞衣箱（外箱）が納めてある。この箱のなかに内箱があり、胞衣皿は内箱のなかに入った曲物容器のなかに納めてあった。胞衣皿は蓋と身を合わせ口にし、布または紐状のもので縛っていたと考えられている。同じ北屋敷（殿町287番地）SX02では、合わせ口にした胞衣皿が押しつぶされた状態で出土し、ミニチュアの壺が共伴している（報告書第37図46～48）。このほかにも、北屋敷（殿町279番地外）の包含層から2点出土している（報告書第193図1005・1006）。以上の胞衣皿は口径14.4～18.6cm、底径5.3～9.1cmで、器高3.1～4.3cmである¹⁰。

古曾志大谷1号墳「殿様道」の土師器大皿 「殿様道」が古墳前方部の南東隅で交差する地点に埋設されていた。出土状況から道の造成にかかわる祭祀遺構と推定されている。土器埋設ピットは二つ見つかっており、それぞれ約2.5m離れた位置にある（第36図）。P1からは、土師器皿2枚が口縁部を重ね合わせ、垂直に立てた状態で出土している。皿は口径15.0cm、底径6.0～8.7cm、器高2.3～2.5cmである。皿の内部は細かい砂が充満していた（報告書図版116）。P2は小型の皿2枚が口縁部を重ね合わせ、水平にした状態で出土している。皿は口径9.0cm、底径5.4cm、器高1.5cmの小型品である¹¹。

本遺跡の資料も出土状況と形態的特徴から、二遺跡と同じように合わせ口にして、2枚1組として使用されたものと思われる。その性格は明確にできないが、胞衣の埋納・地鎮など何らかの祭祀に用いられたと考えられる¹²。近世松江の農村部における祭祀・儀礼を考えるうえで貴重である¹³。

2. 焼塩壺（第28図19）

焼塩壺とは高級食卓塩「焼塩」の製造・流通を兼ねた容器である¹⁴。松江市内では松江城下町遺跡の北屋敷・南屋敷（殿町279番地外）から蓋9点、身8点が出土している。口径に対して器高が大きいコップ型で、内側に型押し時の布目痕がある。外径6.3～8.7cmである。本遺跡の出土品と形態的特徴・規格、ともによく似ている。松江城下町遺跡出土の焼塩壺と同様に、蓋部が逆凹型、身部口縁に蓋受けの段差があるものと推測される。松江城下町遺跡の出土品は、17世紀前半～18世紀後半とされており、本例も同時期と推定される。農村部におけるひとびとの暮らしと商品流通を考えるうえで、注目される資料といえる。

第4節 おわりに

以上、各時代の様相を特徴的な遺構・遺物を中心に概観した。おわりに、本遺跡と中世出雲府中との関連について、触れておきたい。

第2章で述べたように、本遺跡のある大庭周辺から意宇平野の一帯には、中世出雲府中に関わる遺跡が点在している。本遺跡からは、平安時代後期から南北朝時代の遺構は確認されなかったが、川原宮II遺跡で当該期の遺構・遺物が検出されている。なかでも注目されるのが、平安時代末から鎌倉時代の粘土採掘坑である。検出された採掘坑は300基あまりで、調査区外にも広がっている。これらは、土器の原料となる粘土の採掘坑であり¹⁵、府中域で消費する土器の生産にともなうものと推定される。中世出雲府中における手工業生産の様相を考えるうえでも重要である。

中世出雲府中については、その領域をはじめ、諸官衙や屋敷地、市場や津などの具体的な配置がほとんどわかっていない¹⁶。本遺跡のある茶臼山周辺では、島根県が昭和48（1973）年から実施している「風土記の丘地内遺跡」調査と開発事業に伴う発掘調査によって、資料が蓄積されてきた。さらに2010年代にはいり、国道432号大庭バイパス建設事業と松江市宇竜谷土地区画整理事業による発掘調査によって、台地縁辺から谷部にかけての様相も明らかになってきた。今後はこうした調査成果を総合化し、中世出雲府中の景観復元にあらためて取り組む必要がある。

【註】

1. 松江市まちづくり文化財課が平成29年10月に実施した発掘調査の成果による。

2. 報告書の土層図①～⑩と第31図A-Fの対応は以下のとおりである。

A-B：第50図③ C-D（新規） E-F：第54図⑩

島根県教育委員会 2016『柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮II遺跡』

3. 茶臼山南西麓には、内堀・市場・鍛冶屋・光泉寺・光徳庵など、館・市・手工業生産・寺院などを意味する字が一体となって存在する。

報告書では、中世から近世初頭にかけて、この一帯に在地権力の存在やこれを背景にしたまとまりある政治的経済的宗教活動の領域があつたのではないかと指摘している。

島根県教育委員会 1990『風土記の丘地内遺跡発掘調査VII 茶臼山城跡・市場遺跡・内堀石塔群』

4. 大庭原ノ前遺跡の北に位置する山代郷正倉跡第15・16調査区（第32図8-3）でも等高線と平行する南北溝SD05（上端幅3.5m、深さ1.0m）が検出されている。溝の検出面からは、中世土師器が多数出土している。なお、報告書第42図第15調査区の平面図は、原図の座標と一致しておらず、注意を要する（ト部吉博氏の御教示による）。

島根県教育委員会 1981『史跡出雲国山代郷正倉跡』

5. 大庭小原遺跡（第2図44）で当該期の掘立柱建物跡が調査されている。松江城下では礎石建物に変遷している時期だが、城下周辺の建物構造は変化しなかったと考えられている。

松江市教育委員会 公益財團法人松江市スポーツ振興財團 2014『大庭小原遺跡』

6. 松江城下町遺跡の分類（大皿：口径14cm以上、中皿：11～13cm、小皿：10cm台以下）による。

松江市教育委員会 財團法人松江教育文化振興事業団 2011『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』

7. 遺跡の東側を通る道は、明治8（1875）年作成の旧大庭村切り図にも記されている。

8. 松江市教育委員会 財團法人松江教育文化振興事業団 2011『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』

9. 島根県教育委員会 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』

10. このほか松江城下町遺跡第3ブロック3-1区（殿町345-1外）からも、胞衣皿と考えられる土師器大皿2枚が出土している（報告書第40図1・2）。本資料とは形態的特徴が異なり、年代も明治時代以降と考えられている。

松江市教育委員会 財團法人松江市教育文化振興事業団 2013『松江北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書2』

江城下町遺跡 第1ブロック(西側)第3ブロック第4ブロック』

11. 土師器小皿を2枚合わせ口にし埋納した資料が、松江城下町遺跡で2例確認されている。母衣町68番地東区の井戸SE02では、梵字「ボロン」と墨書きされた木箱のなかに収められ、井戸埋め立てに伴う祈祷具として使用されていた(松江市2012第20図80・81)。また、第3ブロック3-2b区(殿町344外)では、2枚(うち1枚の底面に「南」の墨書き)が口合わせにして埋めてあり、地鎮に使用されたと考えられている(松江市2013第66図1・2)。

松江市教育委員会 財團法人松江市教育文化振興事業団 2012『松江北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書1 松

江城下町遺跡(母衣町68)・(南田町77-1外)・(南田町52-32外)・(南田町52-7外)・(南田町52-1)』

同 2013『松江北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書2 松江城下町遺跡第1ブロック(西側)第3ブロック第4ブロック』

12. 全国的に胞衣埋納遺構は、18世紀中頃から19世紀に位置づけられる例が大部分とされる。また胞衣の埋納遺構は、屋敷地内の事例のほか道路跡で見つかっている。

小野望 2001「胞衣処理2 遺構と遺物」「胞衣処理3 各地の遺構と遺物」『図説江戸考古学研究事典』柏書房

13. 胞衣の埋納にかかる松江市域の民俗事例には、「人に踏んでもらった方がよい例」と「人に踏まれない方がよい例」がある。

山崎節枝 2015「第4章第2節誕生儀礼 3後産の始末」『松江市史 別編2民俗』松江市

14. 小野望 2001「焼塩壺」『図説江戸考古学研究事典』柏書房

15. ほとんどの採掘坑は灰白色粘土層をねらったもので、採掘後にすぐに埋め立てられている。

島根県教育委員会 2016『柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮III遺跡』

16. 井上寛司 1999「出雲府中と中世出雲府中」『季刊文化財第92号』島根県文化財愛護協会

同 2018「中世出雲府中の実態解明への期待」『平成30年度企画展 知られざる中世都市 出雲府中』島根県立八雲立つ風土記の丘

第2表 遺物観察表

Fig	遺物番号	写真図版	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	調整・備考
9	1	11	埋設桶	灰色土	磁器	碗	13.0	3.1	8.0	(釉薬)白色 N9/	0.5mm以下の砂粒を含む(灰白色 10Y8/1)	良好	外:施釉 高台内無釉 墨書「巌か嶽」「木」「臺」 「具」 内:施釉 染付 19世紀第2四半期
9	2	11	埋設桶	灰色土	陶器 (布志名焼)	碗	12.0			(釉薬)灰白色 7.5Y7/2	細粒を含む(灰白色 2.5Y7/1)	良好	外:施釉 内:施釉 「ぼてぼて茶碗」 江戸後期?
9	3	11	埋設桶	灰色土	陶器 (布志名焼)	筒形蓋物	8.6	3.2	7.8	(釉薬)黄橙色 10YR7/6	1mmの砂粒を少 し含む(灰白色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 口端平坦面 のみ無釉 竹節文様 底面に「」の刻印(空 福島又兵衛窯) 内:施釉
9	4	11	埋設桶	灰色土	陶器 (布志名焼)	壺	20.0			外:(釉薬)緑灰色 内:(釉薬)緑灰色 10GY5/1 10GY6/1	0.5~1mmの砂 粒を含む(灰黄色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 内:施釉 永原窯の可能性あり 明治初頭
9	5	11	埋設桶	灰色土	陶器 (布志名焼)	土瓶	6.0			外:(釉薬)緑灰色 ~暗緑灰色 内:(釉薬)緑灰色 (釉なし)灰白色 10GY5/1 ~ 10GY4/1 10GY5/1 2.5Y7/1	0.5mm以下の砂粒 を少し含む(灰白色 2.5Y7/1)	良好	外:施釉 内:頸部施釉 体部無 釉 明治初頭
9	6	12	埋設桶	灰色土	陶器 (布志名焼)	鉢	15.0	18.0	14.8	外:(釉薬)黄色 (素地)灰白色 内:(釉薬)黄橙色 2.5Y8/6 2.5Y8/1 7.5YR8/8	1mm以下の砂粒を 少し含む(灰白色 2.5Y8/1)	良好	外:施釉 底部回転糸 切り 内:施釉 回転ナデ 明治後半
9	7	11	埋設桶	灰色土	陶器 (塩谷焼系)	瓶			13.8	外:(釉薬)灰白色 内:(釉薬)にぶい 赤褐色 2.5Y8/2 2.5YR5/4	0.5mm以下の砂 粒を含む(赤褐色 10R5/4)	良好	外:施釉 絵付け 内:施釉 船徳利 明治前半
9	8	12	埋設桶	灰色土	陶器 (石見焼)	擂鉢	31.5	14.0	14.8	(釉薬)暗赤褐色 (素地)にぶい赤褐 色 2.5YR3/3 7.5R5/3	2mmの砂粒を少 し含む(灰赤色 2.5YR5/2)	良好	外:施釉 高台内無釉 内:施釉
9	9	11	攪乱土坑2	黒褐色土	磁器 (肥前系)	碗				(釉薬)白色 N9/	密(灰白色 5Y8/1)	良好	外:施釉 染付 内:施釉 染付
9	10	11	攪乱土坑3	黒褐色土	陶器 (肥前系)	鉢			8.8	(釉薬)暗赤褐色 2.5YR3/2	1~4mmの砂 粒を含む(橙色 2.5YR6/6)	良好	外:施釉 高台内ケズ り 内:施釉
17	1	13	P06	灰褐色土	土師器	坏	14.0			浅黄橙色 7.5YR8/6	1~4mmの砂粒を 多く含む	普通	外:風化磨滅 内:風化磨滅
17	2	12	P06	褐色土	土師器	坏	11.8	4.3	6.4	浅黄橙色 7.5YR8/4	2mm位の砂粒を多 く含む(最大4mm)	良好	外:回転ナデ 回転糸 切り 内:回転ナデ
17	3	13	P17	灰褐色土 +明黄褐色土	白磁	碗	12.8			灰白色 2.5CY8/1	1mm位の砂粒を含 む(灰白色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 内:施釉 16世紀代
17	4	13	P17	褐色土	土師器	坏	10.0			外:にぶい橙色 内:にぶい橙色 7.5YR7/4 5YR7/4	1mm以下の砂粒を 含む	普通	外:風化磨滅 内:風化磨滅
17	5	13	P70	灰褐色土 +明黄褐色土	土師器	坏				浅黄橙色 10YR8/3	1~2mmの砂粒を 多く含む	普通	外:風化磨滅 内:風化磨滅
17	6	13	P36	灰褐色土	土師器	坏			8.0	橙色 7.5YR7/6	2~4mmの砂粒を 含む	良好	外:回転ナデ 回転糸 切り 内:回転ナデ
17	7	12	P80	灰黄褐色土	土師器	柱状高台付 皿	8.3	6.0	5.7 ~ 6.5	浅黄橙色 7.5YR8/4	1~2mmの砂粒を 含む	良好	外:ナデ 底部回転糸 切り 内:回転ナデ
17	8	13	P19	灰褐色土	備前焼	甕				赤灰色 2.5YR4/1	3~5mmの砂粒 を含む(灰赤色 2.5YR4/2)	良好	外:ナデ 内:ナデ
17	9	13	P78	灰黄褐色土	須恵器	甕				外:灰色 内:灰色 7.5YR5/1 7.5YR6/1	1mm位の砂粒を 少し含む(黄灰色 2.5Y5/1)	良好	外:平行タタキ 内:同心円当具痕
19	1	12	SKO1	明黄褐色 土+灰黄褐色土	磁器 (肥前系)	碗				(釉薬)白色 N9/	密(灰白色 2.5Y8/1)	良好	外:施釉 吾須で染付 内:施釉 吾須で染付 18世紀後半~19世紀 前半
24	1	14	SD04	灰黄褐色土	須恵器	坏蓋	(つま み) 5.6			灰白色 7.5Y7/1	2~3mmの砂粒を 含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ
24	2	14	SD04	にぶい黄褐色土	須恵器	坏身			12.0	灰色 5Y5/1	1mm以下の砂粒 を含む(黄灰色 2.5Y6/1)	良好	外:回転ナデ 回転糸 切り 内:回転ナデ
24	3	14	SD04	灰褐色土	須恵器	高台付坏			8.6	灰色 5Y6/1	1~2mmの砂粒を 含む(にぶい橙色 2.5YR7/3)	良好	外:回転ナデ 回転糸 切り 内:ナデ
24	4	14	SD04	褐色土	須恵器	高台付坏				外:灰色 灰黄色 内:灰色 5Y5/1 2.5Y6/2 5Y5/1	1mm位の砂粒を 多く含む(灰黄色 2.5Y6/2)	良好	転用硯
24	5	14	SD04	灰褐色土	須恵器	甕				外:灰褐色 内:灰褐色 7.5Y6/2 7.5Y5/2	4mmの礫を含 む(にぶい黄橙色 10YR6/4)	良好	外:回転ナデ 沈線 波状文 内:回転ナデ

遺物観察表

Fig	遺物番号	写真図版	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	調整・備考
24	6	14	SD04	褐色土	須恵器	甕				灰色	10Y5/1	1~2mmの砂粒を多く含む(灰褐色7.5YR6/2)	良好 外:回転ナデ 内:回転ナデ
24	7	14	SD04	灰黄褐色土	須恵器	甕				灰色	7.5Y6/1	1mm位の砂粒を多く含む(灰白色2.5Y7/1)	良好 外:平行タタキのちカキメ 内:同心円当具痕
24	8	14	SD04	灰褐色土	須恵器	壺				外:黄灰色 内:灰色	2.5Y5/1 5Y6/1	4mm位の礫を含む(浅黄色2.5Y7/3)	良好 外:ナデ 内:ナデ 指オサエ
24	9	14	SD04	灰黄褐色土	須恵器	甕				灰色	5Y5/1	2mmの砂粒を少し含む(灰赤色2.5YR5/2)	良好 外:平行タタキ 内:同心円当具痕
24	10	14	SD04	褐色土	須恵器	甕				外:灰色 内:灰色	7.5Y6/1 7.5Y5/1	1mm位の砂粒を含む(灰白色2.5Y7/2)	良好 外:平行タタキのちカキメ 内:同心円当具痕
24	11	14	SD04	褐色土+暗褐色土	須恵器	甕				黄灰色	2.5Y6/1	2mm位の砂粒を含む(灰黄色2.5Y7/2)	良好 外:平行タタキのちカキメ 内:同心円当具痕
24	12	14	SD04	黒褐色土+暗褐色土	須恵器	甕				黄灰色	2.5Y6/1	1~2mmの砂粒を多く含む(灰黄色2.5Y7/2)	良好 外:平行タタキのちナデ 内:ナデ
24	13	15	SD04	灰褐色土	須恵器	甕				黄灰色	2.5Y6/1	1~2mmの砂粒を含む(にぶい黄橙色10YR7/2)	良好 外:ナデ 内:同心円当具痕
24	14	15	SD04	灰褐色土	須恵器	壺				外:灰色 内:灰黄色	N5/ 2.5Y7/2 N5/	1mm以下の砂粒を含む	良好 外:回転ナデ 内:回転ナデ
24	15	15	SD04	にぶい黄褐色土	須恵器	鉢				外:灰色 内:灰色	7.5Y5/1 7.5Y4/1	1~2mmの砂粒を含む(黄灰色2.5Y6/1)	良好 外:平行タタキのちカキメ 内:同心円当具痕
24	16	15	SD04	黒褐色土	土製品	支脚				外:橙色 内:にぶい浅黄橙色~橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/4~8/6	7mm位の小石を含む	良好 三方向に突起
24	17	15	SD04	褐色土	中世須恵器	甕				外:黄灰色 内:黄灰色	2.5Y5/1 2.5Y6/1	2mm以下の砂粒を含む(灰黄色2.5Y7/2)	良好 外:格子状タタキ 内:ハケメ
24	18	15	SD04	にぶい黄褐色土	備前焼	甕				外:赤灰色 内:赤灰色(口唇)浅黄色	2.5YR4/1 2.5YR4/1 5Y8/4	2~3mmの砂粒を含む(灰赤色2.5YR5/2)	良好 外:ナデ 内:ナデ
24	19	15	SD04	褐色土	土師器	鉢			14.4	外:浅黄橙色 内:橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/6 5YR6/6 7.5YR8/6	2mm位の砂粒を含む(浅黄橙色7.5YR8/4)	良好 外:回転ナデ 内:回転ナデ 磨耗
24	20	15	SD04	灰褐色土	青磁	碗				(釉薬)オリーブ灰色	10Y6/2	1mm以下の砂粒を少し含む(灰白色5Y8/1)	良好 外:施釉 内:施釉 14~15世紀
26	1	16	SX01	明黄褐色土+暗褐色土	備前焼	壺				外:灰オリーブ色 内:灰赤色	5Y4/2 2.5YR5/2	2mm位の砂粒を多く含む(最大4mm)(灰赤色5YR5/2)	良好 外:波状文 内:ナデ
26	2	16	SX01	明黄褐色土+暗褐色土	備前焼	甕				外:オリーブ黒色 内:灰褐色	5Y3/1 5YR5/2	1~3mmの砂粒を含む(赤灰色2.5YR5/1)	良好 外:ナデ 内:ナデ
26	3	16	SX01	褐色土	備前焼	甕				外:にぶい赤褐色 内:灰褐色~褐灰色	2.5YR5/3 7.5YR6/2~10YR6/1	1~3mm大的砂粒を含む(灰褐色7.5YR6/2)	良好 外:ナデ 内:ナデ
28	1	17	B3	灰褐色土	須恵器	高环				褐灰色	7.5YR5/1	2mm位の砂粒を含む(黄灰色2.5Y5/1)	良好 外:ケズリのちナデ 内:ナデ
28	2	17		排土中	須恵器	甕				外:灰色 内:灰色	5Y5/1 5Y6/1	3mm位の砂粒を含む(黄灰色2.5Y5/1)	良好 外:平行タタキのちカキメ 内:同心円当具痕
28	3	17	C1	褐色土	中世須恵器	甕				灰色	5Y5/1	1mm以下の砂粒を含む(灰白色2.5Y7/1)	良好 外:格子状タタキ 内:ハケメのちナデ
28	4	17	C1	褐色土	中世須恵器	甕				外:灰色 内:灰黄褐色 褐灰色	7.5Y5/1 10YR5/2 10YR6/1	1~2mmの砂粒を少し含む	良好 外:格子状タタキ 内:ハケメのちナデ
28	5	17	B2	褐色土	備前焼	甕				外:オリーブ黒色 内:にぶい褐色	5Y3/2 7.5YR5/3	1~3mmの砂粒を多く含む(にぶい褐色7.5YR6/3)	良好 外:四線自然釉 内:ナデ
28	6	17	B2	灰色土	備前焼	甕				外:にぶい赤褐色 内:にぶい赤褐色	2.5YR5/4 2.5YR5/3	2~3mmの砂粒を含む(にぶい赤褐色2.5YR5/4)	良好 外:ナデ 内:ナデ
28	7	17	B3	黑色土	磁器(中国青花)	碗				(釉薬)明緑灰色	7.5GY8/1	0.5mm以下の砂粒を少し含む(灰白色5Y8/1)	良好 外:施釉染付 内:施釉染付 中国青花碗C群
28	8	17	B3	灰白色土	陶器(肥前系)	片口鉢	28.0			(釉薬)暗赤褐色 (化粧土)灰白色	2.5YR3/2 7.5YR8/1	1~2mmの砂粒を少し含む(赤褐色10R5/4)	良好 外:施釉 内:施釉 17世紀後半~18世紀前半
28	9	18	B3	黑色土	陶器(肥前系)	擂鉢	30.0			(釉薬)にぶい赤褐色	2.5YR4/3	2mm位の砂粒を多く含む(最大4mm)(にぶい橙色5YR7/4)	良好 外:回転ナデ 内:スリメ

Fig	遺物番号	写真図版	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	調整・備考	
28	10	17	B2	灰色土	陶器(肥前系)	擂鉢				外:灰褐色 内:灰褐色	7.5YR6/2 7.5YR4/2	1mm以下の砂粒を少し含む(灰褐色 7.5YR6/2)	良好	外:施釉 内:スリメ 使用痕
28	11	18	C2	褐色土	陶器(肥前系)	甕	22.0			外:灰褐色 内:灰褐色	7.5YR5/2 7.5YR6/2	0.5~1mmの砂粒を多く含む(にぶい 赤褐色 5YR5/4)	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ
28	12	18	B2	造成土	陶器(京信系)	丸形碗	9.8			(釉薬)灰白色	2.5Y7/1	0.5mm以下の砂粒を少し含む(灰白色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 絵付け 内:施釉
28	13	18	B3	灰白色土	陶器(萩焼)	鉢	14.0			(釉薬)黒色 白色 (釉なし)にぶい橙色	N1.5/ N9/ 7.5YR7/4	細粒を含む(灰黄色 2.5Y7/2)	良好	外:施釉 内:施釉
28	14	18	B3	黑色土	磁器(肥前系)	碗			4.6	(釉薬)白色	N9/	1mmの砂粒を少し含む(白色 N9/)	良好	外:施釉 染付 内:施釉 17世紀後半~18世紀
28	15	18	B3	灰白色土	磁器(肥前系)	皿			8.0	(釉薬)灰白色	5GY8/1	細粒を含む(白色 N9/)	良好	外:施釉 染付 内:施釉 染付 18世紀第1四半期
28	16	18	B3	黑色土	陶器(陶胎染付)	碗				(釉薬)灰白色	10Y7/1	0.5mm以下の砂粒を少し含む(灰白色 2.5Y8/1)	良好	外:施釉 染付 内:施釉 染付
28	17	18	B3	灰白色土	陶器(陶胎染付)	碗			4.8	(釉薬)明オリーブ 灰色	2.5GY7/1	1~2mmの砂粒を含む(灰白色 2.5Y7/1)	良好	外:施釉 染付 内:施釉
28	18	18	B3	黑色土	陶器(陶胎染付)	碗			4.8	外:(釉薬)灰白色 内:(釉薬)灰白色	10Y7/1 10Y7/1	1mm以下の砂粒を含む(灰白色 2.5Y7/1)	良好	外:施釉 染付 内:施釉
28	19	18	B2	造成土	土師器	焼塙壺			4.4	橙色	5YR7/6	0.5~2mmの砂粒を多く含む	良好	内:布目痕
29	1	16	C2	黑色土	土師器	皿	17.2	3.0	6.6	浅黄橙色	7.5YR8/6	1mm位の砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 底部へ ラケズリ 内:回転ナデ
29	2	16	トゾ2- 南壁付近	黑色土	土師器	皿	17.8	2.9	7.6	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/6	1~2mmの砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 底部へ ラケズリ 内:回転ナデ
29	3	9 16	B2	灰色土	土師器	皿	16.6	3.6	5.6	外:にぶい橙色 内:浅黄橙色	7.5YR7/4 7.5YR8/4	2mm位の砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 底部へ ラケズリ 内:回転ナデ
29	4	16	B2	灰色土	土師器	皿	16.8	3.5	5.2	外:浅黄橙色 内:浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/3	1~2mmの砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 底部へ ラケズリ 内:回転ナデ
29	5	16	B1	黑色土	土師器	高台付椀			4.4	外:灰白色 内:灰黄色	5Y8/1 2.5Y7/2	1mmの砂粒を含む	良好	外:回転ナデ 内:回転ナデ
29	6	16	B3	黑色土	陶器(布志名焼)	碗	10.0			(釉薬)浅黄色	5Y7/3	密(灰白色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 内:施釉 「ぼてぼて茶碗」 江戸末期~明治初頭
29	7	16	トゾ2	黄色土	陶器(布志名焼)	鉢	19.6			口縁:灰白色 (釉薬)オリーブ黄色 素地:にぶい黄橙色	2.5GY8/1 5Y6/3 10YR6/3	0.5mm以下の砂粒を少し含む(にぶい 黄色 2.5Y6/3)	良好	外:施釉 内:施釉 江戸(19世紀前半第1四半期)
29	8	16	B2	灰色土	陶器(布志名焼)	皿	9.4 ~ 11.2	1.8	7.2	外:浅黄色 内:浅黄色	2.5Y7/3 2.5Y7/3	密(浅黄色 2.5Y7/3)	良好	外:施釉 型押成形文 内:施釉 明治前半
29	9	16	B3	黑色土	陶器(布志名焼)	皿	7.6	1.6	3.6	(釉薬)明黄褐色 (釉なし)橙色	2.5Y7/6 7.5YR7/6	0.5mm位の砂粒を少し含む(淡黄色 2.5Y8/3)	良好	外:口縁~体部上半 施釉 体部下半・底部無釉 内:施釉 明治前半
29	10	16	B2	造成土	陶器	鉢			11.0	外:(釉なし)灰黄色 内:(釉薬)灰白色	5Y8/1 2.5Y7/2	1~3mmの砂粒を含む(灰白色 2.5Y8/2)	良好	外:施釉 内:回転ナデ 在地産か
No1		P98	灰黄褐色土	青磁	碗					(釉薬)にぶい黄色	2.5YR6/3	密(灰黄色 2.5Y7/2)	良好	外:施釉 内:施釉
No2		SD04	褐色土	備前焼	甕					外:灰褐色 内:褐灰色	5YR4/2 5YR4/1	1~3mmの砂粒を含む(褐灰色 5YR5/1)	良好	外:ナデ 内:ナデ
No3		SD04	褐色土	備前焼	甕					外:赤灰色 内:褐灰色	2.5YR4/1 5YR4/1	1~4mmの砂粒を多く含む(赤灰色 2.5YR5/1)	良好	外:ナデ 内:ナデ
No4		SD04	にぶい黄褐色土	白磁	皿					(釉薬)灰白色	N8/	密(灰白色 2.5Y8/1)	良好	外:施釉 内:施釉 白磁皿E群
No5		SX01	明黄褐色土+暗褐色土	備前焼	甕					黄灰色	2.5Y4/1	1~2mmの砂粒を多く含む(黄灰色 2.5Y6/1)	良好	外:ナデ 内:ナデ
No6		C1	褐色土	中世須恵器	甕					灰色	5Y5/1	2mm位の砂粒を少し含む(浅黄色 2.5Y7/3)	良好	外:格子状タタキ 内:ナデ

遺物観察表

Fig	遺物番号	写真図版	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	調整・備考
No7		C1	黒色土+黄色土	中世須恵器	甕					灰色	5Y5/1	1mm以下の砂粒を含む(浅黄色2.5Y7/3)	良好 外:格子状タタキ 内:ナデ
No8		B2 レンチ2付近		備前焼	甕か壺					外:にぶい赤褐色 内:赤灰色	2.5YR5/3 2.5YR5/2	1~2mmの砂粒を多く含む(灰赤色2.5YR4/2)	良好 外:ナデ 内:ナデ
No9		B2	褐色土	備前焼	甕か壺					外:灰褐色 内:灰褐色	5YR4/2 5YR5/2	1~2mmの砂粒を多く含む(赤灰色2.5YR4/1)	良好 外:ナデ 内:ナデ
No10		B2	褐色土	備前焼	甕か壺					外:暗赤褐色 内:灰褐色	5YR3/2 5YR5/2	1~2mmの砂粒を多く含む(赤灰色2.5YR4/1)	良好 外:ナデ 内:ナデ
No11		B2	褐色土	備前焼	甕か壺					外:灰褐色 内:灰褐色 灰白色	5YR4/2 5YR5/2 2.5Y8/2	3mm位の砂粒を多く含む(灰褐色5YR5/2)	良好 外:自然釉 内:ナデ
No12		B2	褐色土	備前焼	甕か壺					外:黄灰色 内:褐灰色	2.5Y4/1 5YR4/1	2mm位の砂粒を多く含む(赤灰色2.5YR4/1)	良好 外:ナデ 内:ナデ
No13		B2	褐色土	備前焼	甕か壺					外:黄灰色 内:褐灰色	2.5Y4/1 5YR4/1	1~5mmの砂粒を多く含む(褐灰色5YR4/1)	良好 外:ナデ 内:ナデ
No14		B2	造成土	白磁	皿					(釉薬)浅黄色 (釉なし)灰白色	2.5Y7/3 2.5Y7/1	1mm以下の砂粒を少し含む(灰白色2.5Y7/1)	良好 外:無釉 内:施釉 中国白磁広東系 中世前半
No15		B3	黄灰色土	備前焼	甕					灰褐色	5YR4/2	1mm位の砂粒を多く含む(灰褐色5YR5/2)	良好 外:自然釉 内:ナデ
No16		B2	地山直上	青磁	皿					(釉薬)オリーブ灰色	10Y5/2	1mm以下の砂粒を少し含む(灰褐色7.5YR6/2)	良好 外:施釉 内:施釉 龍泉窯系青磁皿D類
No17		B3	灰色土	白磁	坏蓋					(釉薬)白色	N9/	細粒を含む(灰白色10Y8/1)	良好 外:施釉 内:施釉 白磁坏蓋D群

写真図版



1. 調査終了後（南から）



2. SD04 完掘後（南西から）

図版 2



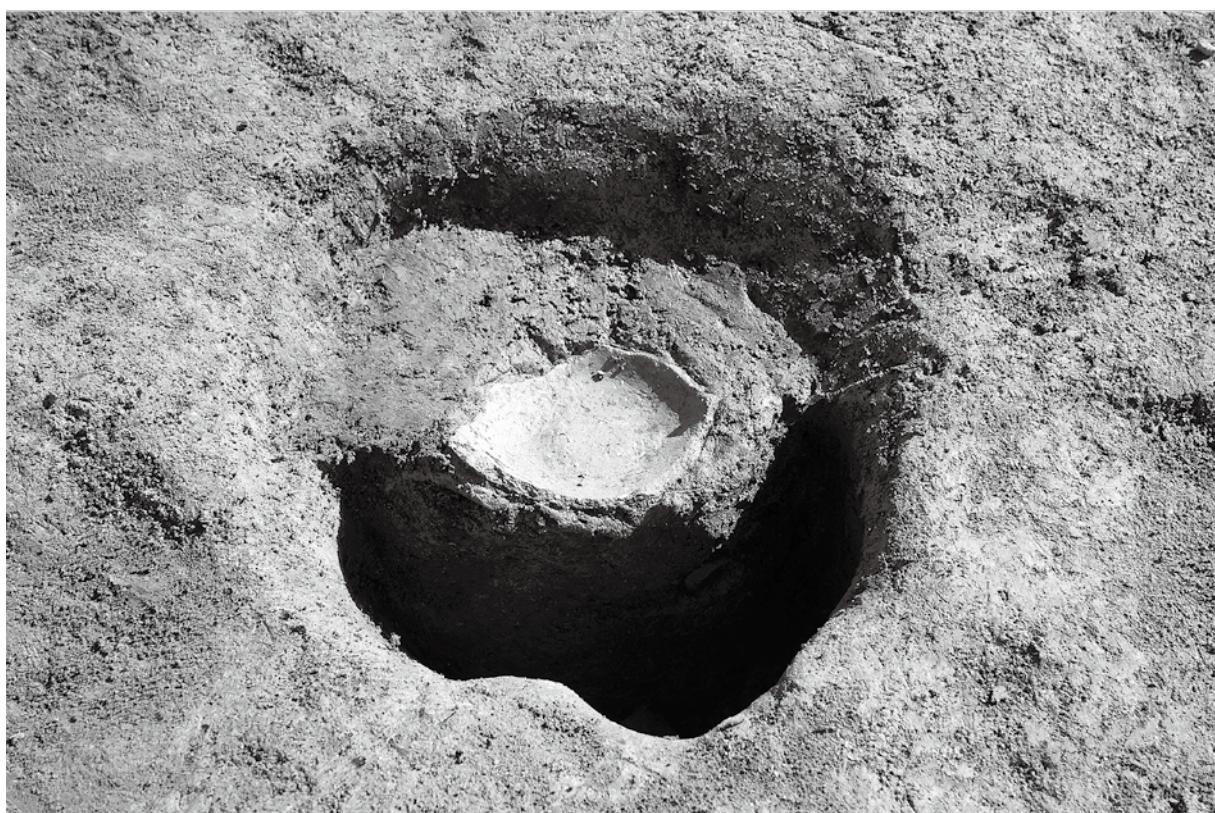
1. 調査区北壁土層堆積状況（南東から）



2. 調査区北壁土層堆積状況（南から）



1. A2・B2 グリッド遺構完掘状況（南から）



2. ピット 06 遺物出土状況（西から）

図版 4



1. SK01 土層堆積状況（西から）



2. SK02 土層堆積状況（北から）



1. SD01 完掘状況（北から）



2. SD02 土層堆積状況（西から）

図版 6



1. SD04 完掘状況（南から）



2. SD04 : D ライン土層堆積状況（南東から）



1. SD04 : A ライン土層堆積状況（西から）



2. SD04 : C ライン土層堆積状況（南から）

図版 8



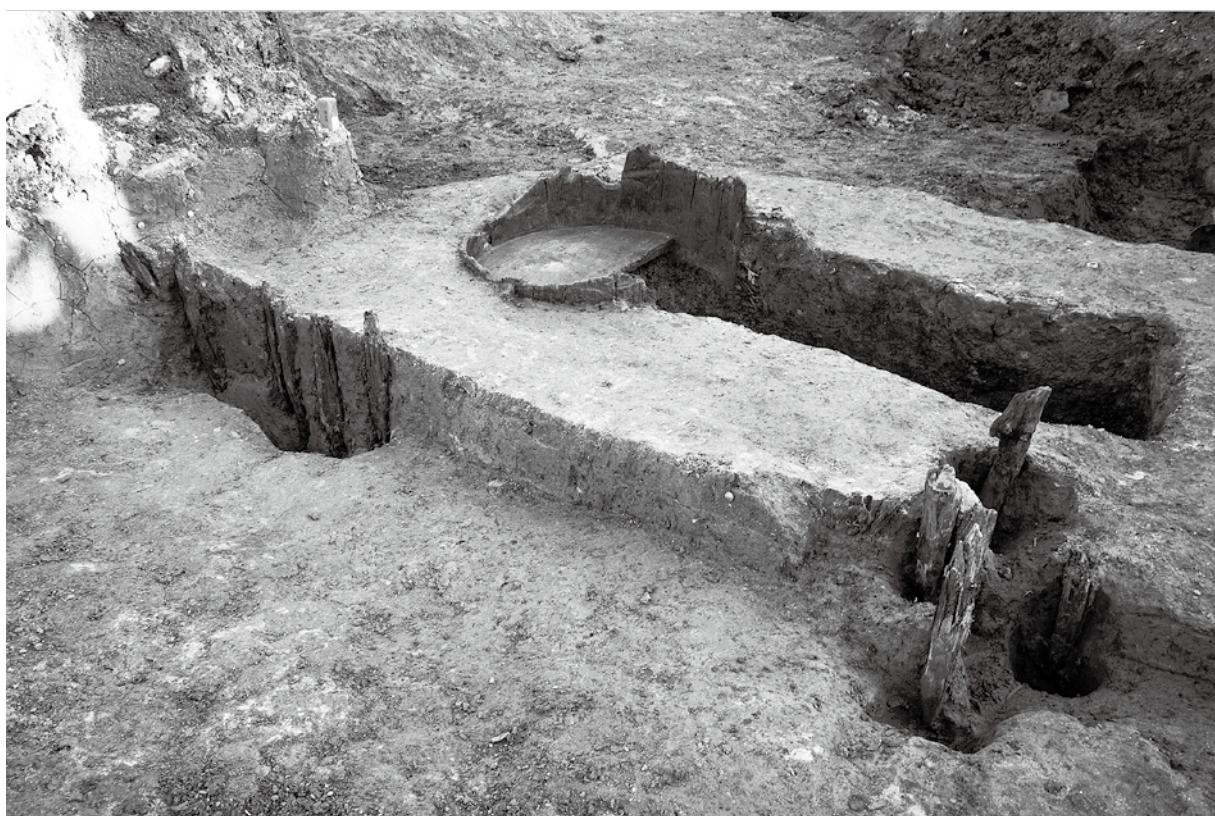
1. SD04 調査状況（北西から）



2. SX01 土層堆積状況（西から）



1. 土師器皿出土状況（第 29 図 3）



2. 旧水田に伴う杭列・埋設桶（北から）

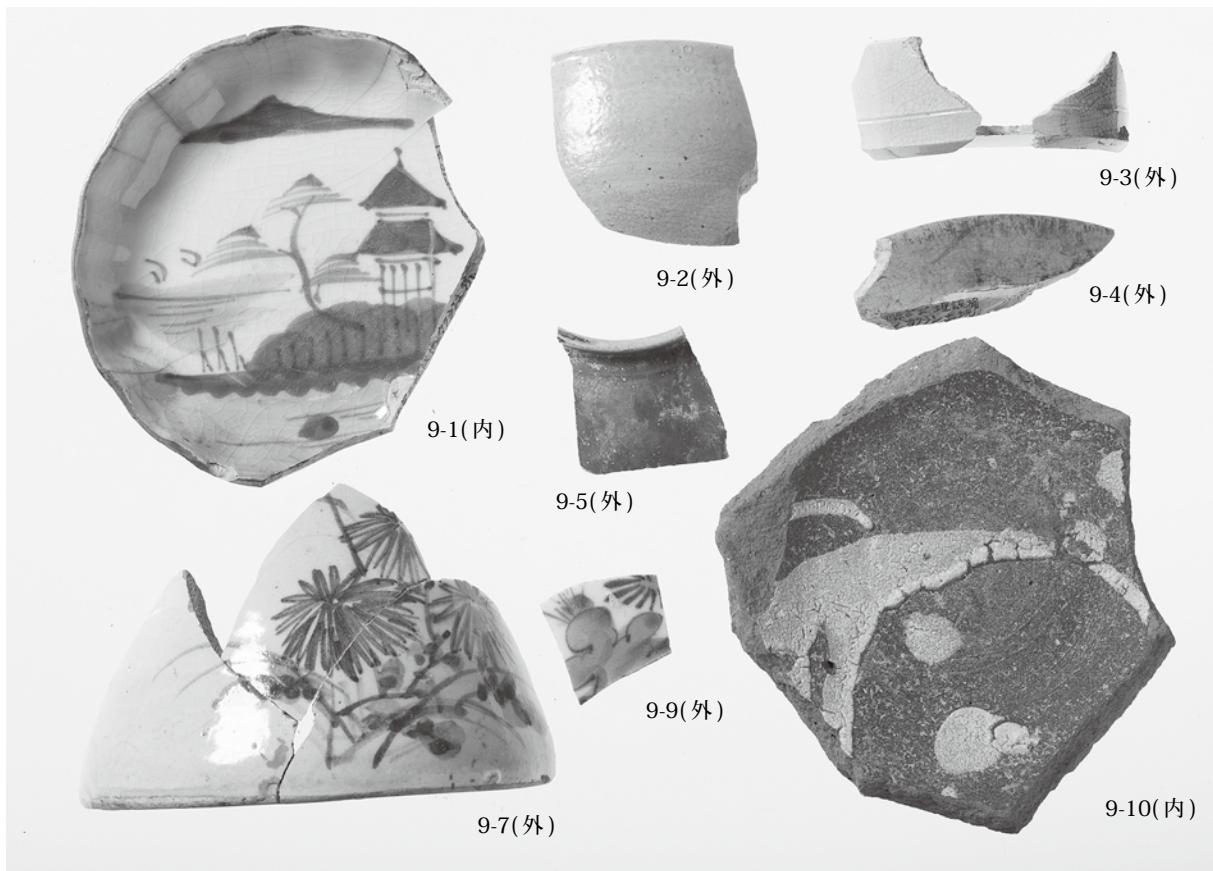
図版 10



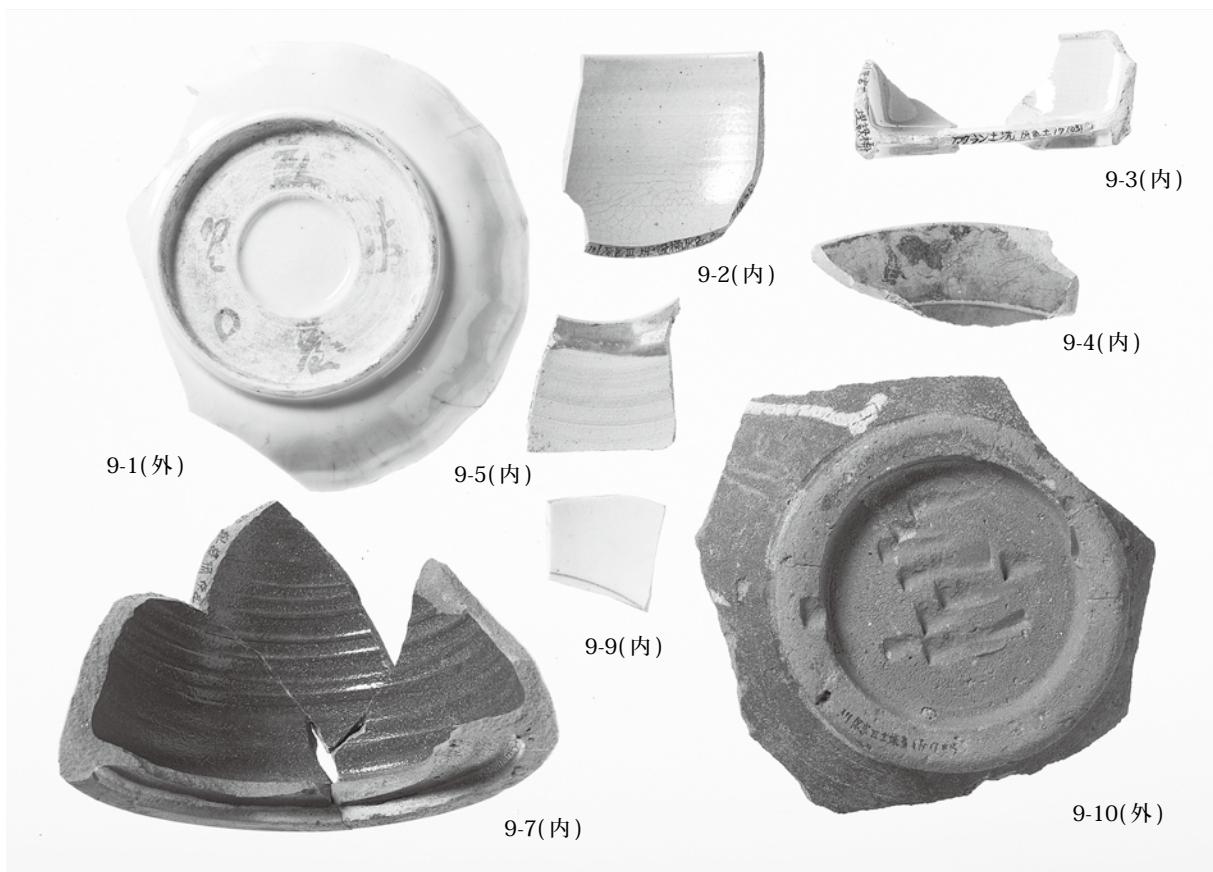
1. 木本雅康氏調査指導（平成 29 年 11 月 20 日）



2. 木本雅康氏調査指導（平成 29 年 11 月 20 日）

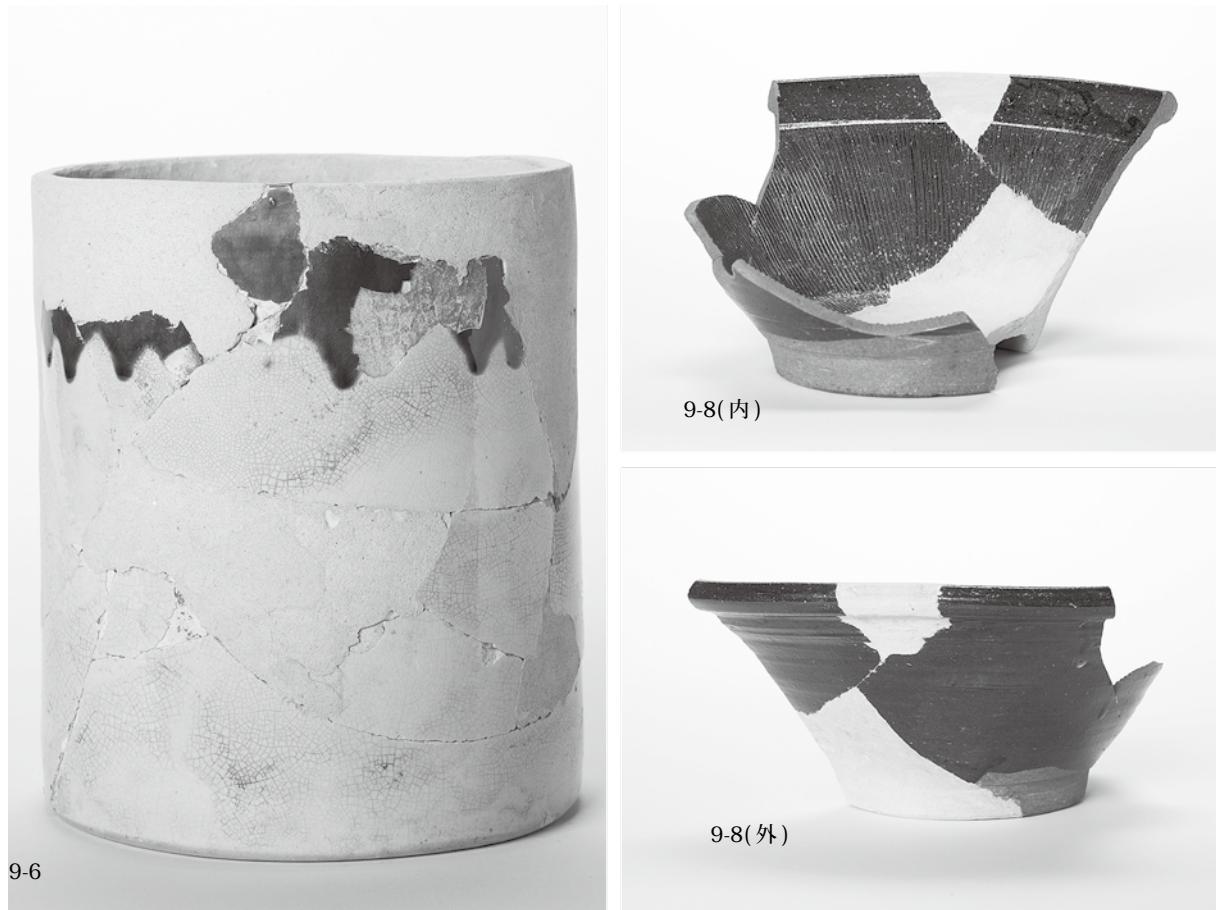


1. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物（第9図）

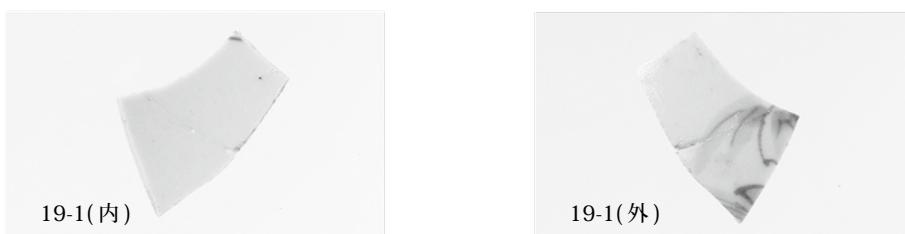


2. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物（第9図）

図版 12



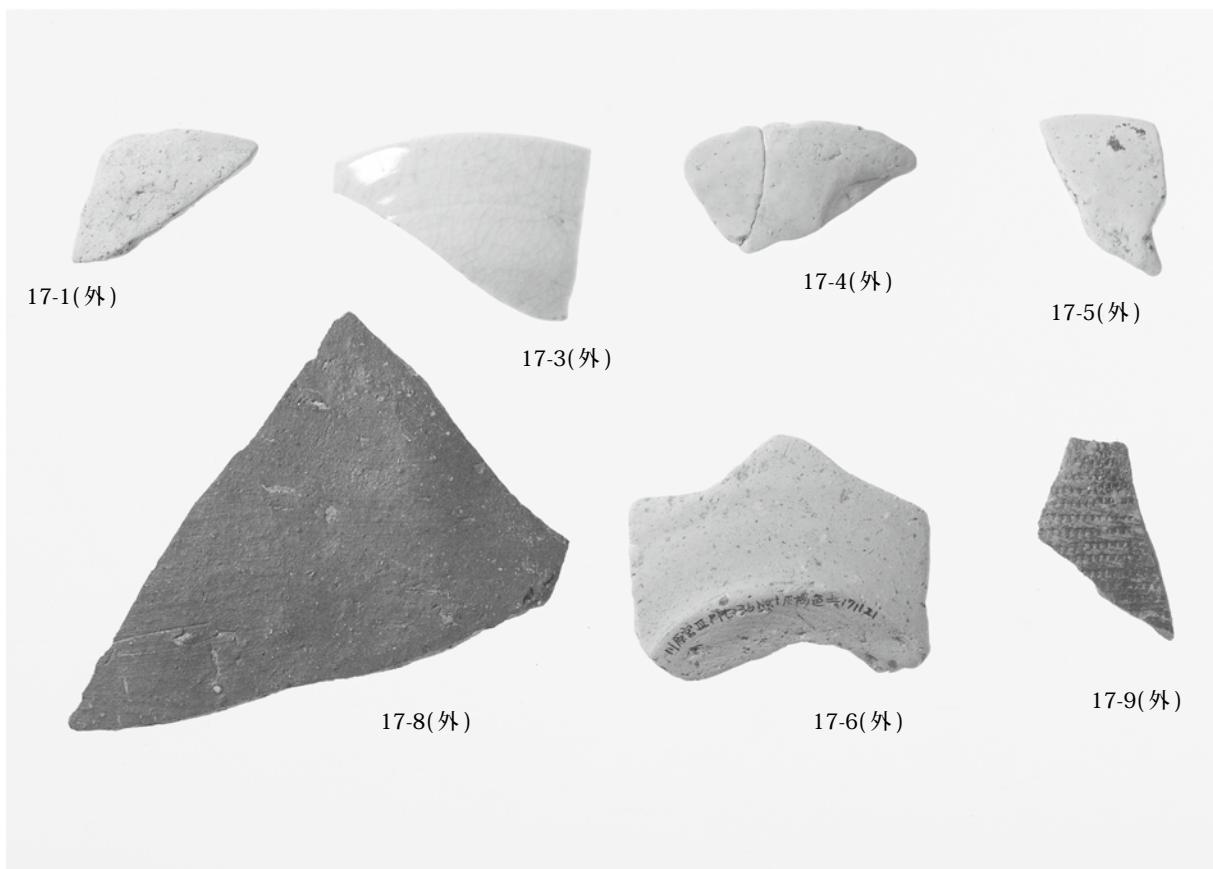
1. 埋設桶・攪乱土坑出土遺物（第 9 図）



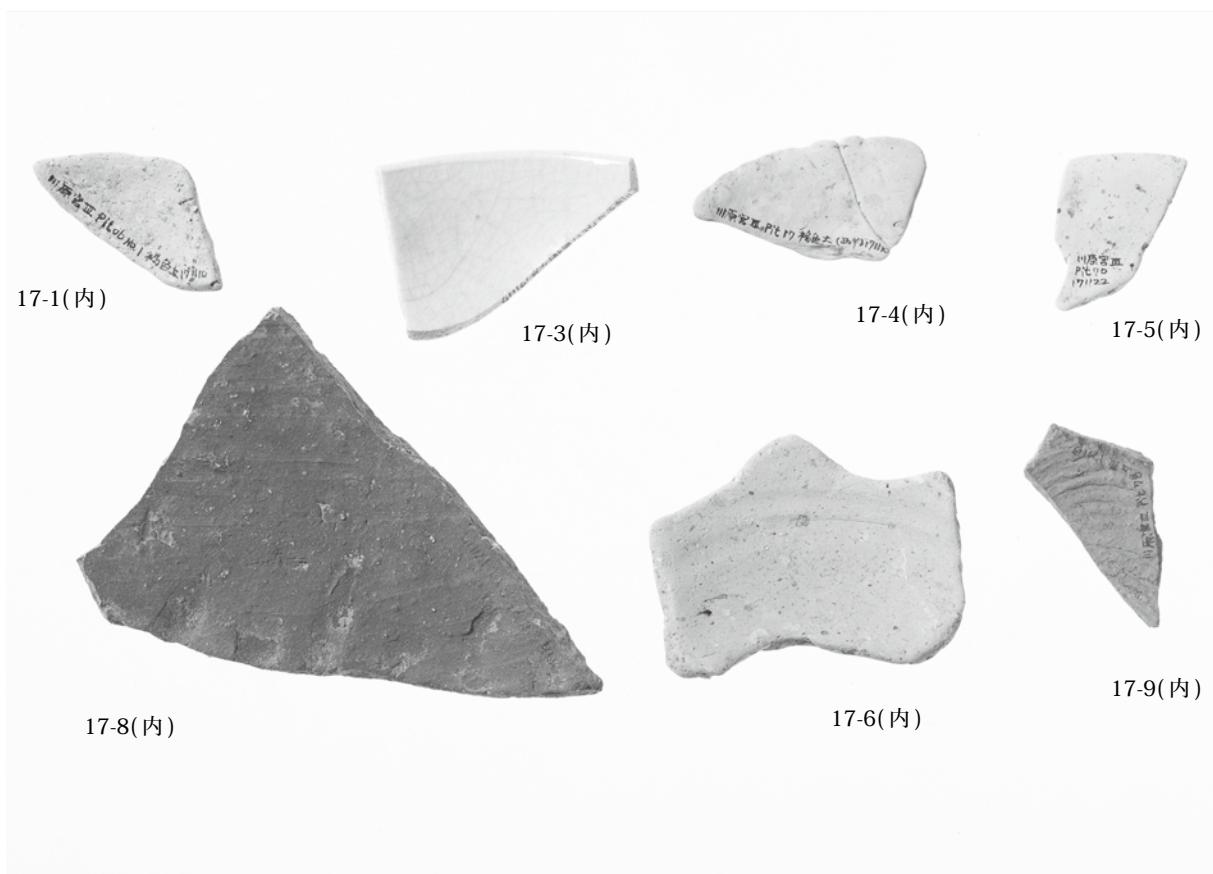
2. SK01 出土遺物（第 19 図）



3. ピット出土遺物（第 17 図）

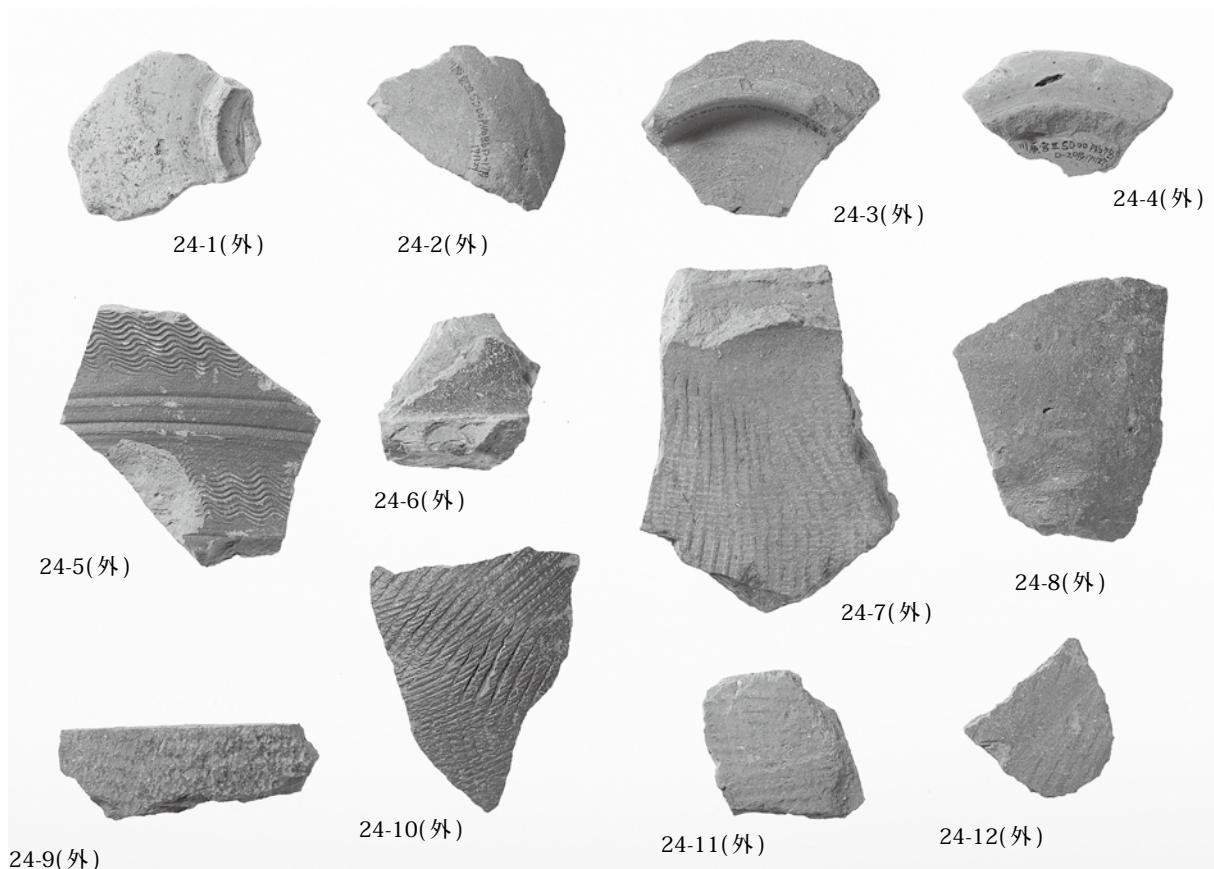


1. ピット出土遺物（第17図）

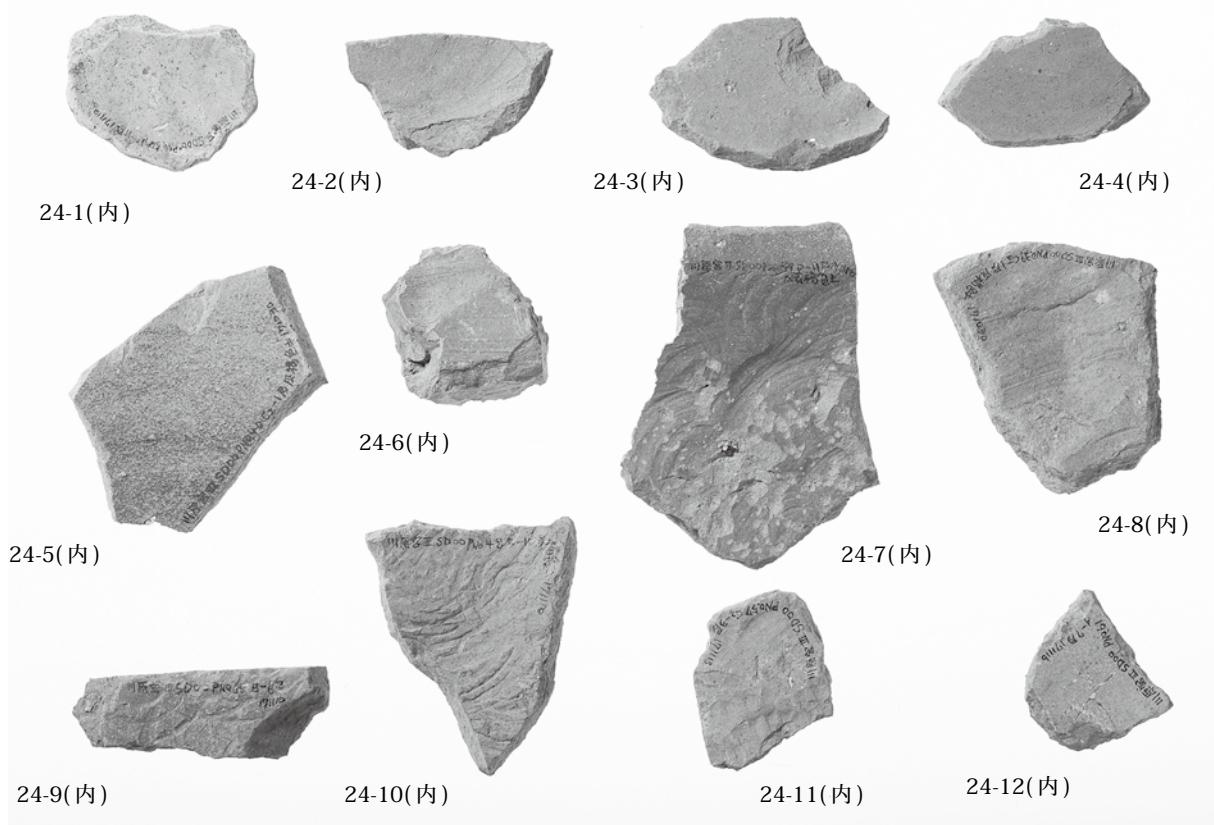


2. ピット出土遺物（第17図）

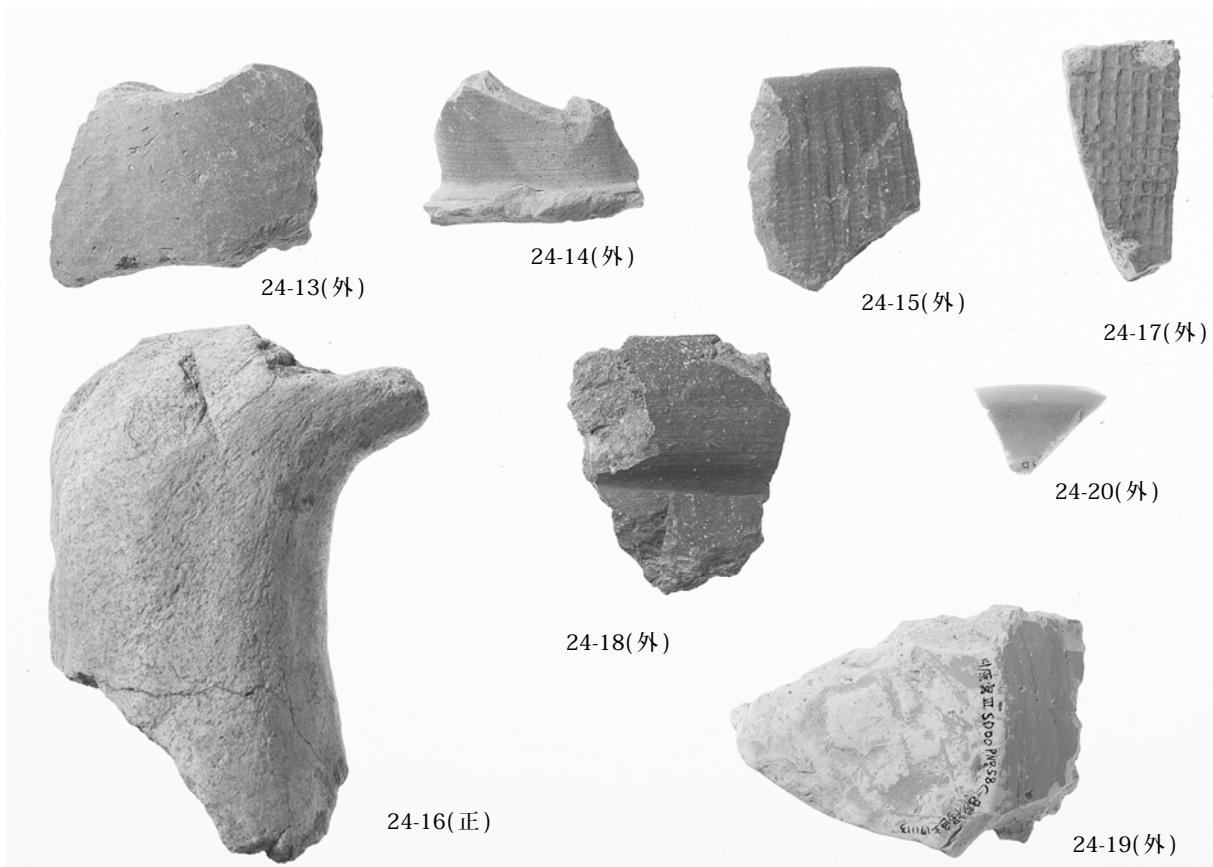
図版 14



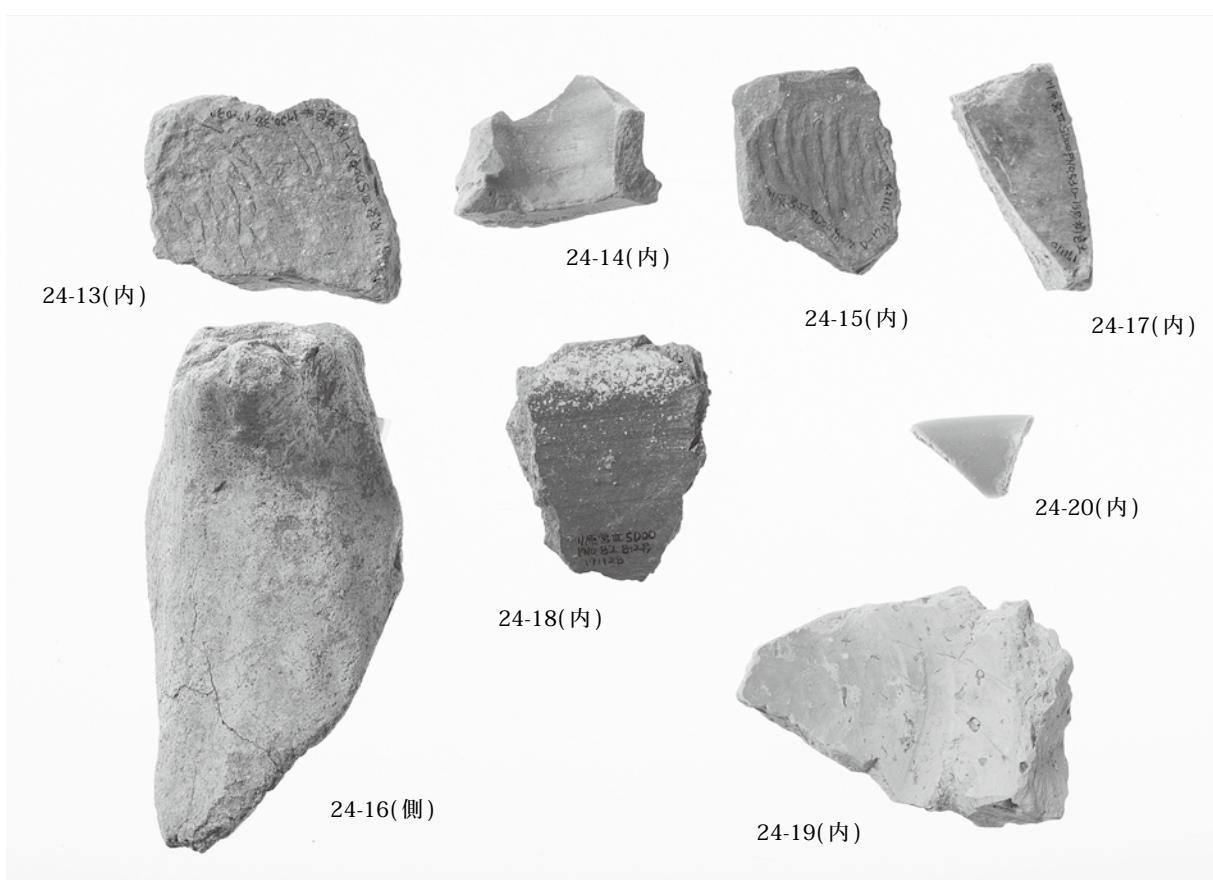
1. SD04 出土遺物（第 24 図）



2. SD04 出土遺物（第 24 図）

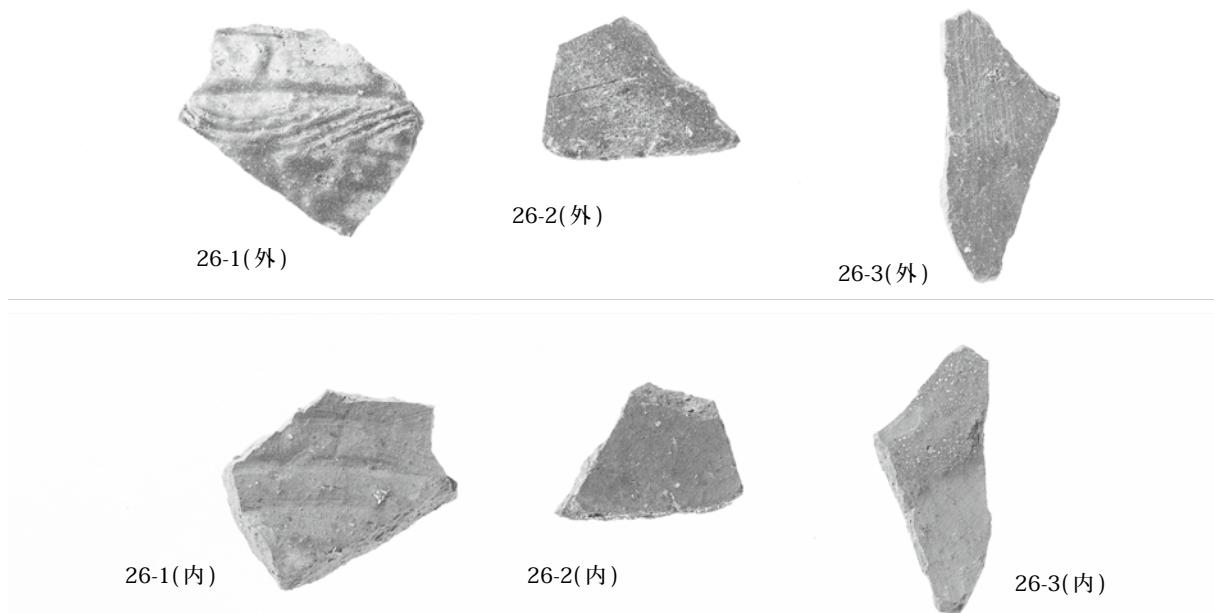


1. SD04 出土遺物 (第 24 図)

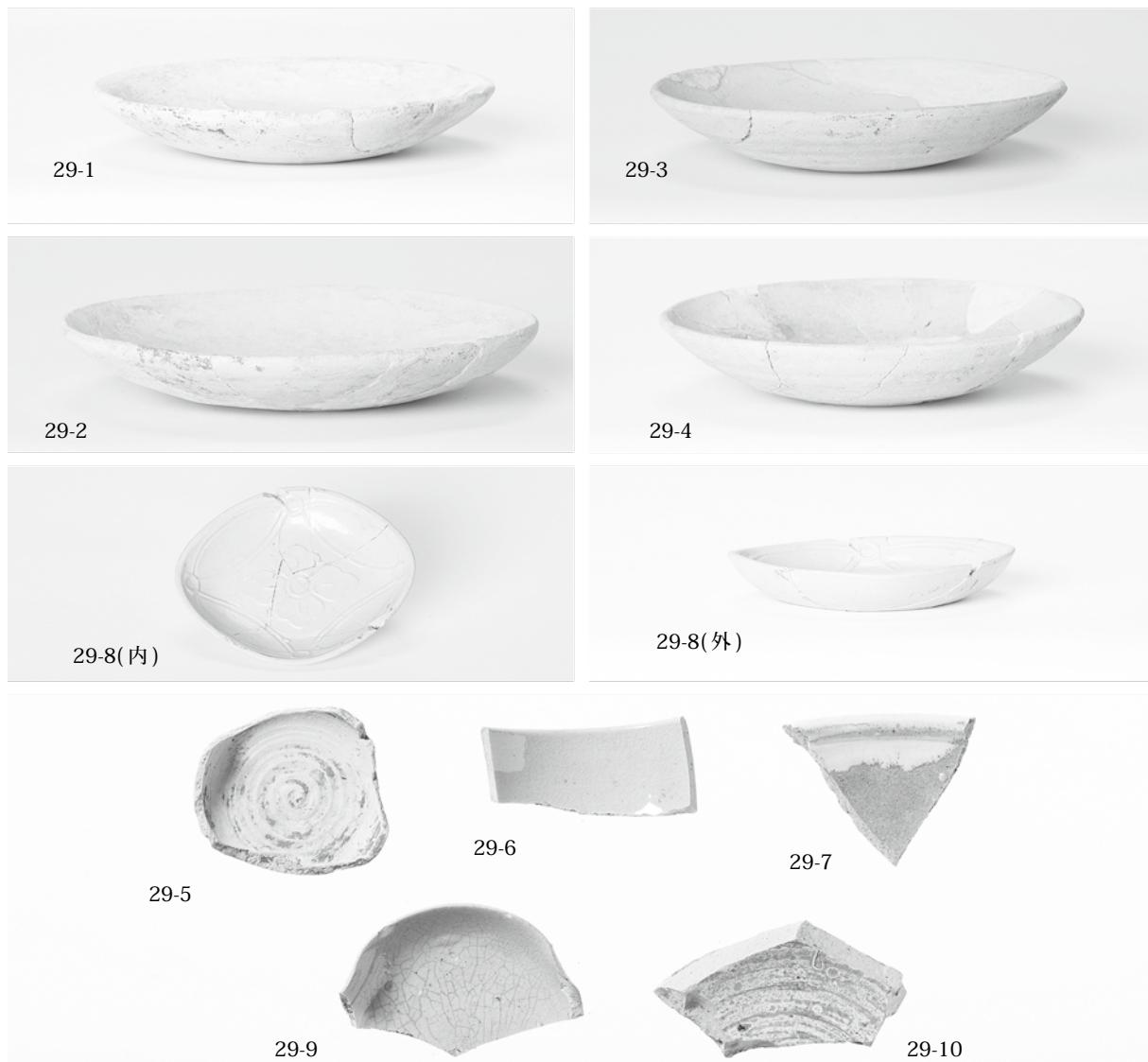


2. SD04 出土遺物 (第 24 図)

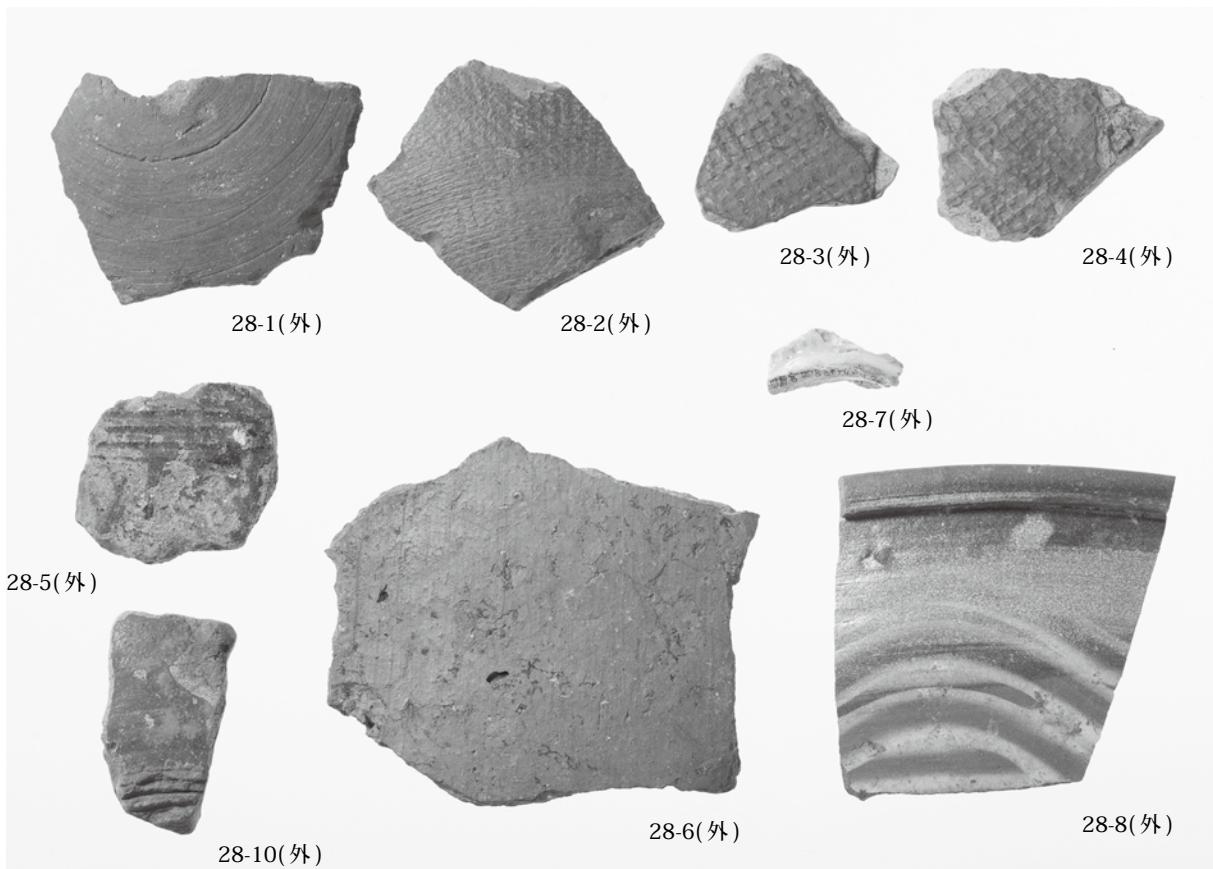
図版 16



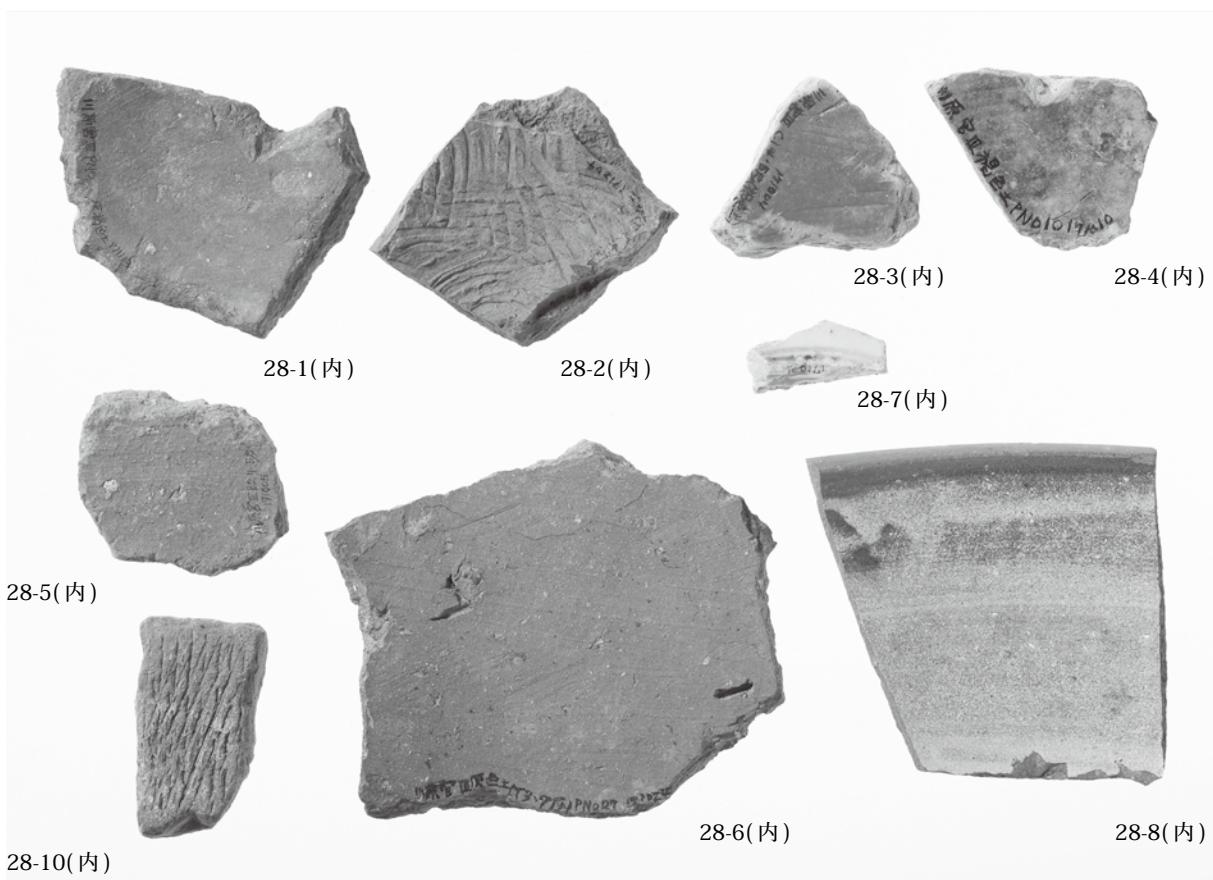
1. SX01 出土遺物 (第 26 図)



2. 包含層出土遺物 (第 29 図)

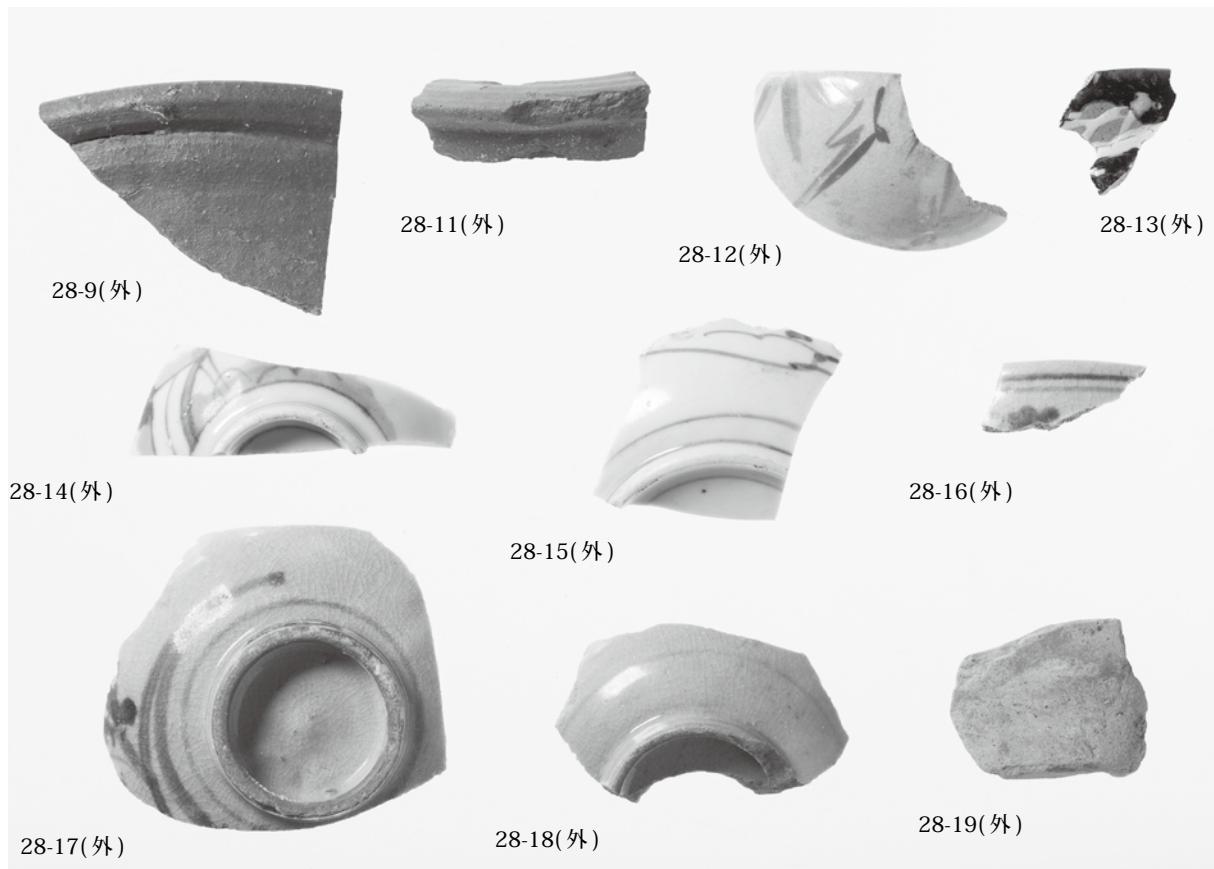


1. 包含層出土遺物（第 28 図）

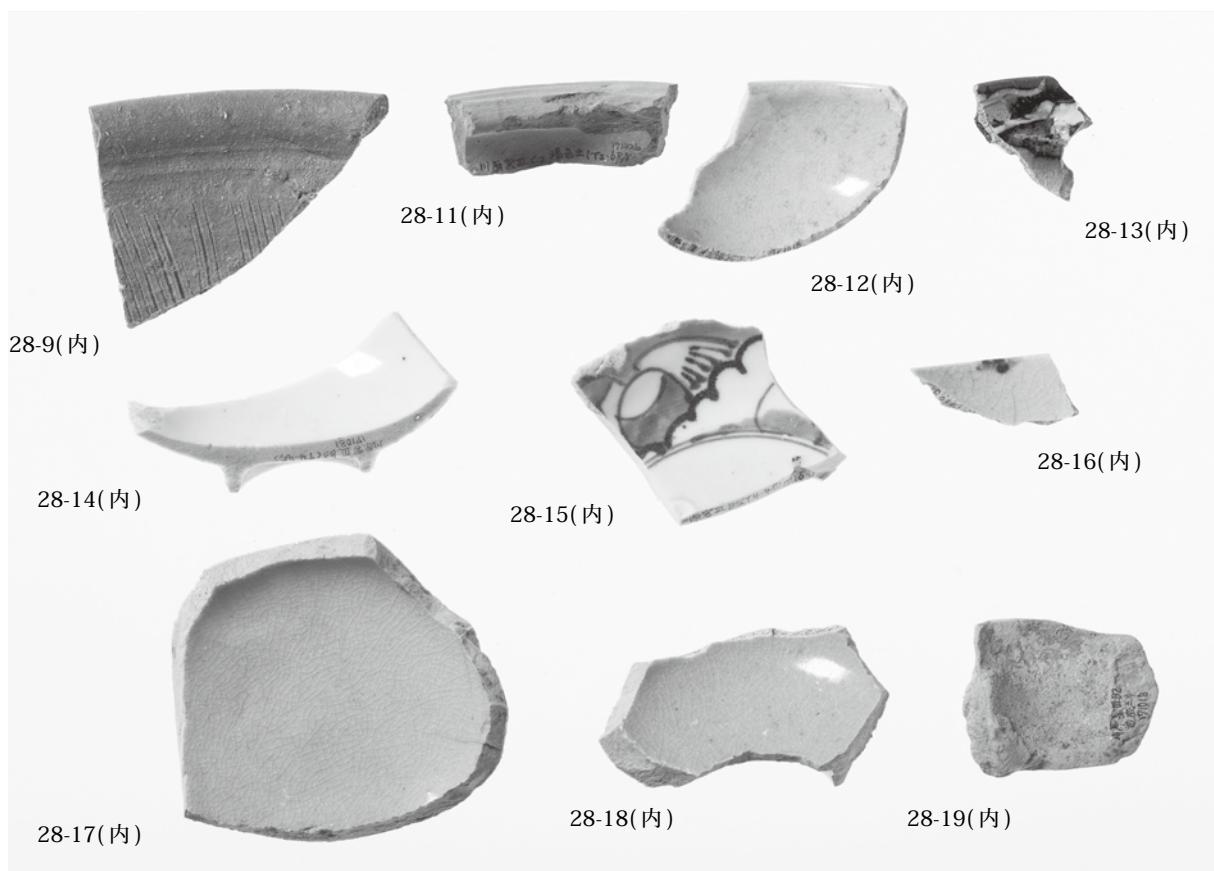


2. 包含層出土遺物（第 28 図）

図版 18



1. 包含層出土遺物（第 28 図）



2. 包含層出土遺物（第 28 図）

報 告 書 抄 錄

印刷仕様

紙 質 表 紙 レザック四六版 175kg
本 文 上質紙 A 版 57.5kg
上質コート紙 A 版 70.5kg
写真図版 上質コート紙 A 版 70.5kg

D T P Windows 7
Adobe InDesignCC2017 PhotoShopCC2017
IllustratorCC2017

画像原稿 階調画像線数 175 線 (AM スクリーン)

川原宮Ⅲ遺跡

国道 432 号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

発行 2019(令和元)年 9 月

発行者 島根県教育委員会

編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131

島根県松江市打出町 33 番地

TEL 0852-36-8608

印刷 有限会社 黒潮社